

## 第15章 北部ヴェトナム銅鼓をめぐる地域史・民族史的視点からの理解

### A はじめに

北部ヴェトナムは、雲南、広西と並んで、銅鼓が、その出現初期から現在まで使われ続けてきた地域である。現代ヴェトナムの民族あるいは国家シンボルにもなりかねない銅鼓であるが故に、バイアスなき研究のためには考古学のみならず多方面からの検討を必要とする。近年、吉開将人（1995,1998a,1999,2000）らにより精力的に進められていった銅鼓研究は、その模範例といえよう。

銅鼓は、その歴史資料への言及例、民族例の存在から、早くから多角的研究が行われてきた考古遺物である。また、日本ではドンソン時代の銅鼓が同様な性質をもった初期稲作社会の弥生文化で用いられた銅鐸との対照・比較研究も行われてきた（鳥居1923、森1981、寺沢1992、森・石野1994、Imamura 1996）。こうした比較は考古学的脈絡においてもっと行われるべきであろう。ただし、注意を要するのは銅鼓は現在まで使われ続け、銅鐸はほぼ弥生時代のみに使われたということである。吉開（1998a）が指摘する「銅鼓の柔軟性」である。

さて、ヴェトナムでも、ヘーガーⅠ式以外の銅鼓の研究に関しては、民族学からの研究や歴史資料などを併用して進める研究がDiệp Đình Hoa（2003）らを中心に、早くから進められていた。特に最も発見例の多いヴェトナムのⅡ式銅鼓（吉開分類の類Ⅱ式）に関しては、ムオン族（モン・クメール系）、ひいてはキン族とムオン族の分化やタイ系民族との関係といった歴史民族学的関心から論じられてきた。また、最近は類Ⅱ式銅鼓を中心に各省データ集成や新しい分類研究も試みられている（Nguyen, A.T.2001, Trinh S.&Nguyen A.T. 2001, Quach V.A.&Trinh S.2002, Quach V.A.2003, Đỗ N.C. 2003）。

今後はモノとしての銅鼓研究のみならず、生産、使用、流通の様々な文化的側面を明らかにすると同時に、地域史や民族形成史において銅鼓がどのような役割を演じたかを明らかにしていく研究を強化していく必要がある。

本論の主眼は銅鼓自身の編年議論ではなく、銅鼓の歴史的・文化的背景を論じるものである。編年・分類案自身、銅鼓への民族的・地域的主観が現れている場合も多い（今村1996）。例えば、ヴェトナムの銅鼓研究ではNgọc Lũ鼓などのAⅠ類を最古の銅鼓に位置づける考えや、ヴェトナムのⅡ式銅鼓とⅠ式銅鼓に年代的重なりを期待する考え（Pham M.H.et al.1987, Phạm H.T.et al.1990）がこれに相当するといえよう。本義論では、銅鼓の発生から現在までを進化系統論的に論じてきた、日本人研究者の編年観（今村1973,1992, 吉開1998a、俵1995）を編年議論の主軸に据え、一部、補完などが必要なときに限って、編年議論を局地的に行う。

なお、本論でふれる主な銅鼓型式はFig.218に代表例をまとめてある。

## B 北部ヴェトナム銅鼓の分布・性格・歴史的位置づけの変化

### I Pre-Heger I 式、Heger I 式石塞山系

紀元前3-5世紀に遡るこれらの最初期の銅鼓は、北部ヴェトナム平原部では、地域的限定性をあまり見せずに疎らに出土している (Fig.224)。ただし、ラオカイ省のラオカイ市で近年大量に出土した銅鼓の中には、当該期の銅鼓が比較的多く、今村 (1992) の論じる石塞山系からドンソン系へ移行する中間的なものも含まれている。ラオカイ省から国境を越えた雲南側には銅鉞山が存在し、北部ヴェトナムへの銅資源供給源になっている可能性もあり、ラオカイでの大量な銅鼓出土も理解されやすい。

### II Heger I 式ドンソン系前期

紀元前3世紀から1世紀頃と考えられ、分布に偏りがある (Fig.224)。紅河本流で北部と南部で分割した場合、そのほとんどは南部の平原部から中遊域に集中。それ以外に、中南部ヴェトナム、島嶼部も含めた他東南アジア諸国で確認されている。これらの銅鼓が、この紅河平原南域からタインホアの平野部で製作されたのは間違いあるまい。

Đông Sơn 遺跡 (ドンソン: タインホア省) や Làng Vạc 遺跡 (ランヴァック: ゲアン省) では集団墓地中で銅鼓が複数出土している。同じく、Yên Bông (イエンボン: ホアビン省)、Đình Công (ディンコン) や Xuân Lập (スアンラップ: タインホア省) もほぼ同時期の銅鼓が複数出土しており、これらの地域が当時のドンソン社会の小地域中心であった事が理解できる。こうした複数出土地点は山間部と平野部の移行地域に多く、当時のドンソン社会の領域的中心が理解できる。このなかで、Yên Bông III 鼓の場合、今村編年の2a期 (紀元前1世紀頃) に比定できるが、紀元2世紀の漢系印紋陶と共伴して発見されており (筆者確認資料)、磚室墓出土例ではないと理解される。従って、ドンソン系の集団が、銅鼓を一定期間使用・伝世して墓葬に埋めた可能性を示唆している。紀元2世紀という社会状況から判断するなら、埋納には平野部からの漢化の圧力が主理由であろう。

当式の銅鼓には画文を有す巨大銅鼓があり、紅河本流沿いに出土している。

船楼のなかには銅鼓が置かれている。また、Ngọc Lũ 鼓をはじめ、Cổ Loa I 鼓、Hồng Hà 鼓、さらにはダー川鼓の各鼓面には銅鼓を並べて樂器的に使っている儀礼風景が描写されている。彼らの社会の中で銅鼓の位置がよく理解できる。

上記の銅鼓の現象に並行して、もう一つ興味深い現象がある。中国広州市の南越国第2代王であった趙昧の墓 (BC122頃) から9点の桶型青銅器が出土している。これは現在の嶺南地区からヴェトナムで製作されたと考えられる非漢系在地青銅器である。そのなかに、鳥人と船を文様 (Fig.222-1) が描写されたものがあり、各文様がドンソン銅鼓と共通し、ヴェトナムで製作されたと考えられている。この船人文を報告者 (麦他1996) は戦士たちが戦争に行き、勝利による戦獲を得て、凱旋して帰る姿を描写していると考えている。その凱旋する船の上には、首級や捕虜とともに、戦士が銅鼓の上に腰掛けている姿がある。そして、戦士が銅鼓に腰掛けていることに注目し、これが勝利者側が使う祭礼具ではなく、戦利品であると推測している。この光景と対照的なのはNgọc Lũ 鼓 (Fig.222-2) である。側面上部に、同様な鳥人と船の文様がある。武器を抱えていることから、戦に行く風景と考えられる

が、船体中央あるいは後方に位置する船楼のなかに銅鼓が置かれている。前述の桶型青銅器の場合、銅鼓は船楼外か船倉に置かれ、船楼内には脚付きの壺（銅壺ではないか）が置かれているのとは対照的である。

両図像の違いから、銅鼓に対する扱いの違いを読み取ることができる。ドンソン文化系の青銅器を製作した集団の中にも、「銅鼓が戦利品や威信財の対象でしかなかった集団」と「祭器の中心として利用する集団」といった違いがあったのではないかと（西村2002b）。

ところで、銅鼓を頂点と位置づけていたドンソン社会はどういった今日の民族集団につながっているのだろうか？

一つの鍵は雄王伝説であろう。キン族とムオン族につたわる雄王伝説はフート省やハータイ省など、紅河平原中遊域に伝説関係地や神社（*dền*）などが多くとどめられている。そして、この雄王墓を祀った雄王神社（*Đền Hùng*）はフート省 *Lâm Thao*（ラムタオ） 県 *Hy Cương*（ヒークオン） 社のギアリン山にあるが、この山の麓でドンソン銅鼓最大例が出土している。当地域から西に紅河本流を渡れば、タイソン県などのムオン族居住域にすぐ到達する。言語的系譜を同じくするヴェト（キン）族とムオン族であるが、ムオン族には銅鼓起源伝説も存在する。ヴェト（キン）族とムオン族の分化がいつ完了したかは、議論の多いところだが、少なくとも、彼らの祖先がドンソン社会の構成メンバーであったことは確実であろう。

### III コーロア城出土の銅鼓と共伴遺物について

この時期の銅鼓の分布で例外的なのはコーロア城出土例（Fig.224）である。紅河平原北域（紅河本流から北）の南縁に位置するコーロア城は、従来からその年代的、文化的位置づけに様々な意見が提出されてきた。本城郭遺跡は外塁の周囲長ではヴェトナム史上最大を誇り、漢代成立の『広州記』や『交州外域記』等が伝える安陽王が築いた城とされている。城は紅河平原北縁から続く残丘・河岸段丘地帯の最南端の舌状台地上に位置している。そして、*Cỏ Loa I* 号鼓は、この城郭の中塁と内塁の間で、ドンソン青銅器群、半両銭などともに発見されている（SVHTTHN 1983）。また、あまり知られていないが1977年に内塁の東北域 *Xóm Nhồi*（ソムニョイ） 地点でも、銅鼓片と各種青銅器群が収集されている（Tran Q.V. et al. 1978）。

ところで、コーロア I 号鼓と城郭の年代に関しては、その重なりを認めない考えも存在していた（Hà V.T.1983、今村1997、西村2001）。しかし、2002年、2003年にコーロア城外塁の外縁域に相当する *Bãi Mèn*（バイメン）で行った大規模な緊急調査では、コーロア式瓦と土器の共伴、さらには半両銭の共伴などからコーロア城の建設年代が紀元前2-3世紀に遡ることが確実となった（Pham M.H. et al.2004、Nishimura&Pham M.H.2005）。また2004年の調査では、城内の内塁南西のコーナーでコーロアに特徴的な三翼鏃の鑄造炉も確認された。さらに、*Cỏ Loa I* 号鼓が出土した *Mả Tre*（マーチェー） 地点で、2003年の道路拡張工事中に筆者が確認した際に、同じくコーロア式瓦が大量に出土する場所であることが確認された。従って、コーロア城と銅鼓が年代的に重なることは問題ないと判断できる。そうすると、問題とされるべきは銅鼓製作者と城郭建設者あるいは城郭の主体的利用者が同じかどうかといったことである。

ここではマーチェー地点出土の銅鼓と共伴青銅器群、Xóm Nhòì地点の銅鼓と共伴青銅器をやや詳しく紹介し、その意味するところを考えてみたい。

Cổ Loa I 号鼓はマーチェーと呼ばれる内壘と中壘の間の畑地の地表下30cmで逆置の状態で発見され、周りにはコーロア式瓦がたくさんあったことも報告されている（Nguyễn Đ.B. 1983）。そして、その銅鼓を容器として、200前後の青銅器が埋納されていたわけである。

Table 11 Ma Tre地点出土銅鼓内に埋納されていた青銅器										
器種	銅鼓	三翼族	鍬先	靴形斧	U字鍬先形	方角斧	有肩斧	矛	短剣	バケツ型容器
数量	1	8	100	29	2	1	4	16	4	3個体分
状態	破片	原形	鑄造失敗・破損	潰れ		潰れ	潰れ	刃部欠損	刃部欠損	破片
三足盆	開口小型容器	楔状製品	穂摘み具	鑿	洗	ナイフ状製品	指輪状製品	半両銭	形状不明品	各種青銅器破片
1	2	8	2	1	1	1	1	1	4	19.95kg
破損	潰れ		破損	破損	破損					破損・潰れ

数量的最も多い鍬先は、銅の鑄まわりが悪く鑄造に失敗したものや、いばりをとっていない破片が多く含まれている。形式的にも均一性が高く。鑄造から埋納までの時間差、空間差を感じさせない資料である。三翼銅鍬（Pl.26）は、コーロア城の外壘外のCầu Vực(カウヴック) 地点で大量に発見されており、その鑄造失敗品などが多く混じることから、当城域での製作が想定されていた。そして、2005年3月の内壘西北角での発掘で、実際に三角翼の鑄造遺跡が確認された。両種の青銅器は共に、コーロア城以外での出土例は非常に少ない。

半両銭は写真（SVHTTHN 1983）から判断すれば、直径が2.5cm前後のもので、孔幅が9mm強である。紀元前175年から120年に鑄造された四銖半両の可能性もあるが、始皇帝時代に鑄造された半両銭の可能性もあり（高漢銘1990）、具体的な年代幅は紀元前3世紀末から2世紀後半に鑄造したものとししか限定できない。ランヴァックで四銖半両と八銖半両がまとまって1990年の114b墓より出土しているし（Imamura&Chu V.T. ed2004）、コーロア城バイメン地点でも、土壘等の建設時期と同時期と考えられる大型すり鉢状遺溝の埋土中から半両銭が確認されている。

銅鼓片（Cổ Loa II 号鼓：Fig.220-1）は、鼓面径が44cm前後で、蛙を載せたものである。3重の重圈文が櫛歯文帯に挟まれたもので、文様構成はCẩm Thủy鼓（タインホア省Cẩm Thủy:カムトゥイ県：Phan H.T. et al.1990）に類似している。蛙の形態はラオカイ出土例（Phạm M.H.1997）に類似している。この蛙の形態は今村銅鼓編年（1992）の第2期以降に出現する蛙とは全く異なっており、より早い時期を考えなくてはならない。ラオカイ出土銅鼓群は、石塞山型からドンソン型への移行段階のものを多く含んでいるが、石塞山型ならびにドンソン型両方に蛙が載っている。当例も今村編年のI期

には確実に遡るものと考えられる。

青銅斧 (Pl.25) には非対称形をした靴形斧と対称形をした方角斧や有肩斧がある。靴形斧は柄の断面が六角形であるのが特徴で、には刃部が方形に近いものがあるが、これはフート省の Làng Cả (ランカー) 出土例に類似している (Phạm M.H. 1996)。

穂摘み具 (6497、6795例 : Fig.219-1,2) はバックニン省のダイチャック (Phạm M.H. & Nishimura 2004)、コーロア城外南郊のディンチャン (Hoang V.K.ed. 2002)、Ngoai Do (ゴアイドー) に類似例がある。開口小型容器に関しては、ドンソン文化に典型的な文様の入ったものがランヴァック (ゲアン省)、Thiệu Dương (ティウズオン : タインホア省)、ヴェトケー (ハイフォン省) で出土しているが、同型式のものと判断できるものではない。

桶形青銅器 (MT82-558, Fig.219-7, Pl.24) は南越王墓出土例 (吉開1996) や貴県羅泊湾漢墓一号墓出土例 (広西壮族自治区博物館) に同じような文様構成を見ることができる。ただし、耳の形態は類似しているが全く同じとは言えない。

矛 (Fig.219-9) は紅河平原の諸遺跡 (Làng Cả: ランカー、ヴェトケー、ダイチャック) やドンソン遺跡で出土しているものに類似している。特に、刀身中央に稜が形成されているものはドンソン遺跡の矛の一つの特徴でもある。

短剣 (Fig.219-8) は同型式のものが、ランヴァック142号墓 (Imamura & Chu V.T. 2004) で出土している。また、同じ型式のものはドンソンでも出土している (Phạm M.H. 1996)。

突帯文を有す三足盤 (6501例) は、吉開 (1996) が嶺南・北部ヴェトナム地域の比較資料として指摘したように、南越王墓、貴県羅泊湾漢墓、ランカーに類似例がある。このほかに、機能不明な青銅器として、流水紋の文様を凹部で表現した板状製品 (バックル?) や横断面が半円に近い非対称楔形製品 (Fig.219-3, 6500例) や二股状製品 (Fig.219-11) などもある。

また、鋏先や三翼鋏といったコーロアで生産されたと考えられるものや中国製である半両銭以外の青銅器群において共通した特徴は、原形をとどめているものが極めて少ないということである。その多くが破損、折れ曲げ、潰しなどによりもともとの青銅器としての機能を果たせないものが殆どである。また、20kgに近い青銅器破片塊のなかにも、各種類の青銅器の破片、さらには青銅器を意図的に方形に切った破片、さらには鑄造時のいばりや湯口部の端片なども混ざっていたと報告されている (Nguyễn Đ.B. 1983)。筆者実見資料の MT82-6585 (Fig.219-11) も、鑄造時の湯口部片である可能性が高い。従って、こうした共伴青銅器群は、再鑄造に備えた原料的性格であったと判断される。

ところで、それぞれの青銅器の叙述で比較例を指摘したように、生産地が推定可能な鋏先、三翼鋏、半両銭以外の青銅器は、北部ヴェトナムの各地のドンソン文化遺跡で類似型式のものを見ることができる。これらの青銅器群の成分分析 (Phạm M. H. 1983) によれば、鋏先や三翼鋏などは鉄を多く含有し、微量元素コバルトやアンチモンを含み、ビスマスを含んでいない傾向が読みとれる。典型的なドンソンタイプの青銅器は鉄の含有量が非常に低く、コバルトを含有せず、ビスマスを含む傾向がみられる。従って、コーロア城で多く出土する青銅器とそうではない青銅器間に、青銅原料採取地あるいは素材生産過程の違いがあったと考えられる。問題は Cồ Loa I 号鼓と Cồ Loa II 号鼓片である。鉄の含有分が非常に低く、コバルトやアンチモンを含まない点では典型的なドンソン型の青銅器と同じであるが、ビスマスは含まれていない。安易な判断は危険だが、コーロア城域で鑄造された鋏先など

とは、鑄造の脈略が違う可能性が高い。筆者は、おそらくコーロア城域で銅鼓は鑄造されておらず、他所から搬入された可能性が高いと考える。また、コーロア城外の南郊に位置したĐình Trảng(ディンチャン)遺跡などで出土するタイプの矛などは、この埋納青銅器群には含まれていないことも、筆者の推察を補強している。

次にXóm Nhði Dưới (ソムニョイズオイ) 地点の青銅器群である。内壘北側と中壘の間に位置し、内壘の中央からは、東北方向に位置する。1976年地表下1mのところで53点の青銅器がまとまって出土している。その構成器種はマーチェー地点と類似している (Hoàng V.K.ed.2002)。それらの多くは破片や鑄造失敗品のようなものが多く、桶形青銅器片や鼓面を含む5つの銅鼓片 (Fig.220-2~4) が混じっていたことが確認されている (Tran Q.V. et al 1978, Hoàng V.K. ed 2002)。銅鼓に関しては、同一個体が破損して5片になったと考えられるが、脚部の破片から、直径は脚部直径が60cmを越す相当大きな銅鼓であったと推定される。胴部の2片 (6505a例、6504例) は文様帯の部分である (Pl.22)。円の中心点に小さい点を配した接円線文を2本対称的に配し、細めの櫛歯文を凸部で表現し、凹部には2点の点を凸部で表現している文様帯2本で、接円線文を挟んでいる。さらに、その外側には列点文の文様帯を配している。そして、6505例の場合は、その上に、鼓面の太陽紋の光芒間に見られるような凹部の三角形の空間を凸部斜線で充填している文様帯が断続的に配されている。接円線文、鋸歯縁文、列点文の組み合わせは、Hoàng Hạ鼓 (ハータイ省フースエン県)、Cổ Loa I 号鼓、Vũ Bì鼓 (ハナム省Bình Lục:ビンルック県) の文様とほぼ同じものである。ただしその上に斜線充填三角文を配したものは、管見では見られない。また胴部の傾きから考えて、この銅鼓は石塞山型ではなくドンソン型と判断できる。よって、完全同一例はないが、この銅鼓は今村編年のI期に位置づけてよいと思われる。これらの銅鼓片の一部 (Pl.23) の割れ目には、金属器 (鉄か?) で刻み入れたような面が残されており、故意に破損行為を行ったと考えられる。

また銅鼓片以外の定型的な青銅器には、鋏先、青銅斧、三翼鏃、矛、短剣、桶形青銅器片、小型偏鐘 (Fig.219-10: XN-11例) などが確認されている。小型偏鐘はランバック出土例に形態的に類似しているが、当例のような文様を施した例は未見である。

Table12 Xom Nhoi Tren出土の青銅器器種構成								
	鋏先	斧	矛	短剣	三翼鏃	桶形青銅器片	銅鼓片	小型偏鐘
数量	10	5	5	4	20	3	5	1
状態	破損品あり					破片	切断破片あり	

このようにマーチェー地点とソムニョイ地点の埋納青銅器群を俯瞰した場合、当城郭で生産されたであろう三翼鏃と鋏先以外に関しては、その多くがもともとの機能を果たせないように意図的に潰したり、破壊したり、切断した場合が非常に多い。これは、過去の研究が示すように、青銅器再鑄造のための原料としての意味があると考えられる。問題は、そうした青銅素材としてドンソン文化の青銅器を集めた意味である。既に指摘したように、これらの青銅器にはコーロア城の近隣のみでなく、遠

くはゲアン省やタインホア省の製品が入っている可能性がある。また、両埋納銅器群共に、ドンソン青銅器群の頂点をなす銅鼓が破片として存在する事実である。ドンソン文化の担い手が、自らの集団の中心的儀器存在である銅鼓を、故意に破損させて埋納するだろうか？現在まで、銅鼓の破片を埋葬させていた例は、ランヴァック（1981年調査：Ngô S.H. 1983）で確認されているが、複数を埋納していた例はまだ確認されていない。

2001年のバックニン省ダイチャック遺跡の発掘では、ドンソン期墓葬（F0号）の副葬品にドンソン型青銅器群が副葬されていたが、そのなかにドンソン型桶形青銅器を意図的に切断した破片数点が副葬されていた。他に完形品としての青銅器埋葬もあったわけだから、これは青銅鑄造原料としての価値を考えた方が適当だろう。

鑄造に失敗した鋏先あるいは鑄放しの鋏先や三翼鋏も青銅素材の財的価値の脈略で考えてよいであろう。200年ほど後、馬援が徴姉妹の起義を平定した際、在地の人が使っていた銅鼓を集めて鑄つぶして銅馬にしたことを『後漢書・馬援伝』は伝えているが、担い手の違いはあるにしろ、似たようなことがあったとしても不思議ではない。

また当銅鼓で注すべきもう一つの事項は、Cổ Loa I 号鼓に鑄造後に行われた線刻情報である。写真（Pl.20,21）が示すように、銅鼓表面には合范線に90度ずらして、鼓面脇から脚部までの直線や、それぞれの把手のまわりを囲むような線が刻み入れられている。刻み入れ方も、おそらく鋭利な工具で複数回の行われており、残された刻み面やその色から、明らかに鑄造後のものであることが理解できる。こうした刻線を施した完形銅鼓は筆者の実見例ではCổ Loa I 号鼓だけである。前出のXóm Nhði鼓片に残された刻線痕を参考にするなら、銅鼓を分割切断するための準備とも解釈できる。

また、脚部裏面に、隸書で刻文された銘文が確認できる。この銘文は、その判読案が複数提出されているが、確実なことは、漢字であり鑄造後に刻文したということである<sup>(1)</sup>。貴州羅泊湾墓例（広西壮族自治区博物館1988）でも石塞山型銅鼓に重量が刻文されているが、墓主は中原出身の人物と考えられており、量（今村・量1990）が指摘したように重量を表すのであれば、少なくとも、文字を記した者はドンソン社会の人間ではなく、漢字を常用する中国漢人社会かそこに近い人間ということになるだろう。

以上の事柄より、銅鼓製作者と最後の所有者の文化的背景（この場合は民族と言い換えてもよい）が全く異なっていたことが理解できる。

ところで、このコーロア城建設と利用をどういう集団が担ったかという問題も、コーロア出土銅鼓の解釈に大きな影響を与える。安陽王伝説は『広州記』や『交州外域記』のなかでの叙述資料が引用資料として残っており、かなり根拠のある歴史事件を素材にしていると考えてよい。また、趙佗に滅ぼされたことが本当であるなら紀元前2世紀前半からそれ以前の歴史を語っていることになり、近年の我々のコーロア城の考古学的研究とも年代的矛盾をみない。興味深いことに、この安陽王伝説の異伝の類が、紅河平原より北の山岳地帯のカオバンや、国境を南東にまたいだ広西側の龍州のタイ系民族間（Tày 族、壮族）にみられることである。Trần Quốc Vương（1983）はかなり直感的ではあるが、城堡の形、地名などから、タイ系民族の築造を考えている。

ここで、問題にしなければならないのが、銅鼓の分布である。ドンソン系銅鼓群のなかでもCổ Loa I 号鼓含むI式前期銅鼓群（吉開分類、今村分類のI a期）は、コーロア出土例以外紅河本流より南

に分布している。また、同時期に盛んに製作されるミニチュア銅鼓も、当該期のものは、ほぼ紅河以南に限定される。前時期と考えられる石塞山系銅鼓が紅河平原全域で確認されるのとは対照的である。

筆者は紅河を挟んだ南北の銅鼓の分布の違いは、銅鼓を儀器として社会内部に組み込んでいた集団とそうでない集団の差であると考え。極論すれば、雄王伝説などを頂点とするViet-Muong系の民族集団と安陽王伝説などを頂点とするタイ（Tay）系の民族集団の差と考える。ちなみに、管見では、広西側でも石塞山型の銅鼓はまま分布するが、その後のドンソン型の前半期（I式前期銅鼓群）に対応する銅鼓は西林普駄銅古墓例と漢墓から出土した貴県貴港高中鼓（鼓土1011）のみである（広西壮族自治区博物館1991）。しかもこれらは明らかにドンソン系銅鼓で、それ以外は皆無である状況については、今村（1992）、吉開（1998a）が指摘してきたところである。そして、近年の鉛同位体分析研究で、貴県貴港高中鼓は見事にヴェトナムのドンソン銅鼓群のなかに納まっている（万輔彬2003）。従って、広西ではI式前期銅鼓群並行期には銅鼓を生産して使う民族がほとんどいなかったことになり、紅河以北のヴェトナムの現象と連動している。壮族・タイ（Tày/Nùng）族の祖になるタイ系民族に共通した現象であったと理解できる。

おそらく、両集団間には社会組織の進化に伴って、集団間紛争などもあったと思われる。コーロア城の位置を北の勢力が南に向かって、威圧するように張り出した地点であると同時に、南との交流の一拠点になるところと考えれば、銅鼓の意味もドンソン文化の遺跡からの一般的出土例とは異なるということも理解されやすだろう。

筆者はこうした青銅器を埋納した集団はドンソン文化と対峙する集団で、ドンソン文化の青銅器を例えば戦争などで収集し、意図的に破損、潰しを行い再鑄造のための素材にまわしたと考えている。その集団がどういう人たちであったかは今後のコーロア城の考古学的研究に期待されるが、筆者は2つの可能性を指摘しておく。一つはViệt Mường（ヴェト・ムオン：オーストロ・アジア語族の下位分類）系集団と紅河を挟んで対峙していたであろうタイ系集団である。もう一つは北部ヴェトナムを一時的に間接支配下においた南越王国である。マーチェー地点の埋納銅器群含まれる青銅器には貴県羅泊湾漢墓や南越王墓に並行する時期のものも含まれており、紀元前2世紀のある時期と考えた方がいいとも考えられる。その場合、安陽王伝説にあるように南越王国が、コーロア城を築造した在地政権を倒したのか、あるいは南越王国自身がコーロア城を建造したのではないかという可能性も浮上するが、全ては今後の調査研究次第である。

#### IV Heger I 式ドンソン系中期・後期

今村編年の2b期以降、吉開編年のI式中期と後期を指す。

分布は紅河平原域内ではなく辺縁部が中心となる（Fig.224）。ドンソン型洗と同様、製作者集団と使用者集団が異なるものと思われる。それは、以下の理由による。

バックニン省ドゥオン川南岸のルンケー城址（通称：羸隴城Thuận Thành県）は、およそ紀元後2世紀から5-6世紀にわたって交趾郡（紅河平原域）の中心地（郡治所在地）として機能した龍編（Long Biên）城と推定される巨大な城址である（第12章参照：西村2001, 2003a）。1998年11月に城郭内でレンガ工場の土探掘坑の排土よりヘーガーI式銅鼓の鑄型片が発見され、さらに2001年の4-5月の発掘調査でも、城壁の盛り土から全く同類の鑄型小片が出土した（Nishimura 2001）。1998年発見例



の残存する鑄造面には、弧の中心から外側に向かって、複段の櫛歯文、複段の接線二重円文、櫛歯文、米粒のような点文、さらに圏線が順に、スタンプ技法を中心に凹文で施文されており、鼓面外縁部の鑄造面であることがわかる（鑄型図面はFig.167-7参照）。外側の圏線をもとに直径を算出すると50-55cm程で、ヘーガーⅠ式としては中型の部類である。問題はこの鑄型と類似した銅鼓である。全く同じ文様配置の出土例はないが、文様構成を重視すればPhú PhươngⅠ鼓（ハータイ省Ba Vì:バービー県）に類似している。スタンプ技法と接線円文を重視すれば、Đắc Glao鼓（中部高原コントゥム省）に類似している。明確なスタンプの多用ということを基準とすれば、Đắc Glao鼓により類似している。Phú PhươngⅠ鼓は今村（1992）編年の2b期、吉開（1998a）編年のⅠ式中期、Đắc Glao鼓は今村編年の3a期、吉開編年のⅠ式中期となる。興味深いことに、当鑄型類似の銅鼓の分布は決して紅河平原の中心部には存在せず、その外縁にあることである。具体的にはThôn Móng鼓（ニンビン省）、さらにはラオス南部のチャンパサック域出土例（チャンパサック博物館展示資料）やタイ側のメコン本流域のウボンラチャターニー県出土例（新田2000）なども、この範疇の銅鼓に納まるようだ。これらの銅鼓以前のドンソン文化の銅鼓が、紅河平原西域・南域からゲアン省までの山間部と平野部の移行地域にかけて密に分布していることは対照的である。当鑄型例はこのヘーガーⅠ式後半期銅鼓の絶対年代と生産体制研究に関する新局面を開くであろう。

考古学的出土状況は、この鑄型が紀元後2世紀あるいは3世紀に納まることを示し、生産形態に関しては、土墾などの時の権力者たる交趾郡太守クラスの居城内で銅鼓鑄造が行われていたことが理解できる。銅鼓が中国系、あるいは紅河デルタ在地の人間が造っていたかどうかは別にして、ルンケー城政権が銅鼓を青銅器工房の一角で生産し、それらが紅河平原域の外域あるいはさらなる遠隔地の異質な集団にもたらされるようなシステムがあった可能性がある（西村2001）。銅鼓使用者と製作者が完全に異質であったと考えられ、紀元前後頃まで、ドンソン文化の脈略で製作された銅鼓とは性質的に異なると考えてよい。羽人文など、銅鼓と共通する文様を有すドンソン系銅盃（吉開1995）と共に、その果たした役割は当時の漢系集団と紅河平原や、その周縁の在地系集団との関係で理解しなければならないものであろう。

吉開編年のⅠ式後期西群は唯一、紅河平原より北域に分布し、分布中心の広西側とのつながりが注目される。俚・僚などの史書が記す少数民族とつながるのであろうか。

また、ヴィンフック省のĐạo Trù鼓（Hoàng X.C.2000）などは、鉄やスズなどの鉱物資源分布域中で出土している。金属資源開発者と銅鼓製作者や使用者の関係を見逃してはなるまい。

## V HegerⅡ式

HegerⅡ式はフート省、ハータイ省、ホアビン省の山間地域あるいは山間地域と平野地域の間接地帯で出土しているが、非常に数は少ない（Fig.225: 吉開1998a、西村・西野2003）。これらを吉開の年代観（3,4世紀—8,9世紀）にあてはめた場合、紅河平原を中原として支配していた歴代中国人政権が、広西産銅鼓移入の仲介になったのか、あるいは、海か山間部を介した非漢民族ルートによる入手であったかが問題となる。

## VI 類 HegerⅡ式

この型式の銅鼓は非常に限られた分布を示す。つまり、ホアビン省、フート省西側、ニンビン省、タインホア省やゲアン省の山間部、Son La（ソンラー）省南部、ハタイ省西部など、ホアビン山塊を中心とした山岳域で、それ以外に若干数、飛び地的にヴェトナム中部と、国境を越えたラオス側に分布しているのみである（Fig.225）。この銅鼓はヴェトナム考古学が指摘してきたように、ムオン族の分布域（Fig.223:Schrock et al.1966）と銅鼓の分布範囲が重なり、ムオン族の具体的使用例（神話、伝承、儀礼、墓葬）もあることから、主要使用民族はムオン族であると考えてよい。

#### a 類 Heger II 式の分類について

ヴェトナムの銅鼓群において最大のグループをなすⅡ式銅鼓は、広西を中心に出土するⅡ式銅鼓との違いが大きいことは認識されていたものの、分類枠自体に疑問を呈したのは吉開の研究（1998）が最初であろう。

壺山式あるいは北流型のⅡ式銅鼓の要素を受け継いで成立したと見られる類HegerⅡ式には、年代論上の不備が多い。近年Trình Sinh（Quách V.A.&Trình S.2002, Trình S.&Nguyễn A.T.2001）らにより、系統的分類が進められており、そこには一定の成果を見ることができる。彼らは、銅鼓鑄造時の湯口の位置に2系統あることを指摘している。一つは鼓面の外縁裏二つとそれを一辺とし、もう1カ所をその辺と二等辺三角形になるように、合範線上に位置させたものである。もう一つは一つの合範線上に三カ所、間隔を置いて配置したものである。管見では、これと全く同じ湯口痕を残したヘーガーⅡ式銅鼓はないようであるから、Ⅱ式銅鼓との直接的影響関係を考えるのは難しく、似て非なるものと考えてよいであろう。従って筆者はこれらの銅鼓群を新部類として、V式として、独立させて呼んでもよいと考えている。

ところで、この類Ⅱ式銅鼓には形態的にかなり異なる二つのタイプが存在する（Fig.218-6,7,8）。一つは鼓体の真ん中前後で、くびれるように鼓体上半と下半が分割されているものである（Fig.218-6）。鼓面上の蛙は3つか4つで、鼓面中央の太陽紋の芒数は4芒、7芒、8芒が普通であるが、まれに低地の封建王朝で使用された石碑の基礎石の円周文様に用いる蓮弁文をはめ込んでいる場合がある。このタイプはホアビン省、フート省、タインホア省、ゲアン省、ソンラ省などで出土している。

もう一つは、鼓体の真ん中より上で、頭部と胴部が分けられるくびれが存在している（Fig.218-7,8）。頭部はやや膨らみを持つ一方、胴部は曲線状の裾広がりである。鼓面上の蛙は4つが普遍的で、鼓面中央の太陽紋の芒数は8芒である。このタイプの銅鼓もハータイ省、ニンビン省、ハナム省などの紅河平原の南縁域からフート、ホアビン、ゲアン、タインホア、ソンラなどに拡がっている。分布域としては前者の分布域とかなり重複するが、より広範な分布域を示している。

本論では前者を類ⅡA式、後者を類ⅡB式と便宜的に仮称しておく（Fig.218-6～8）

さて、これらの類Ⅱ式銅鼓の年代はかなり幅の広い年代枠が与えられており、始まりはⅠ式との併存を考えるほど古い年代を想定しているが、それを支持する考古学的脈絡での発見はない。こうした状況下、吉開（1998a）が、広西のⅡ式銅鼓の研究から、Ⅱ式東群（典型北流型）の流れを引くものとして、Ⅱ式の終末年代から、類Ⅱ式銅鼓の製作年代の上限が10世紀を越えないとした仮説を提出したことは画期的であった<sup>(2)</sup>。

ここでは、考古学的出土状況がはっきりしている銅鼓や、他種の青銅器や陶磁器、さらには彫刻類との比較で、ある程度の年代枠を抽出してみたい。

## b 類 Heger II 式の年代について

まずは、類 II A 式銅鼓の年代比定を筆者が調査を行っているホアビン省の資料を中心に簡論する。

Nguyễn Thành Trai (1985) は、類 II 式銅鼓に李陳朝さらには後黎朝期の彫刻などと文様が類似することを指摘しているが、類 II 式鼓のなかには確実にその年代が李陳朝期と考えられるものがある。それはホアビン省内 Kỳ Sơn(キーンソン) 県 Thống Nhất(トンニャット) 社出土の Xóm Rậm I 鼓 (Hoàng V. et al. 1978) で、鼓面径 50.2cm、脚径 45.9cm を計る。他の類 II 式鼓に比べ、腰部のくびれが大きく、鼓面径に対して鼓高が相対的に小さい。鼓面央部 (Pl. 27) は打楽器として使用したためか抜け落ちているが、その欠損部に隣接する文様は 4 体の龍文である。その龍文は李陳朝期の碑文や仏像等の基礎 (Pl. 30) に施される龍文そのものであり、報告者は 11-12 世紀の年代を考慮しており、Tống Trung Tin (1997) は鼓面に浮紋として付された馨形雲文を、13-14 世紀のものと考えている。また、この馨形雲文は青磁水柱 (Pl. 31: Bùi M.T. n.d.) にも、同様に浮紋として付されており、13 世紀に比定可能である。従って、Xóm Rậm I 鼓には、12-13 世紀の年代を想定しておくのが適当であろう (西村 2002b)。

ホアビン省にはこの他にも龍文が入った Xóm Dềnh 鼓 (Fig. 218-6, Pl. 28) があり、こちらは龍文が李朝期よりも陳朝期のものに類似し、花文や蓮花文が 14 世紀の印花碗に出現するものによく似ていることなどから、14 世紀を中心とする年代を想定したい。

類 II B 式鼓に関しては以下の年代的情報を掲げる。

この他に同省では Kim Bôi (キムボイ) 県の Kim Truỵ (キムトゥイ) 古墓群 (Phạm Q. Q. 1993) の 2 号墓では類 II B 式鼓 (Fig. 218-8) と陳朝期の鉄彩淡色釉長胴壺が伴っている例があり、大量に共伴した無釉陶器も陳朝期のものと考えられ、この類 II B 式鼓の年代下限は 14 世紀ということになるが、鉄彩淡色釉長胴壺の蓮花文は 13 世紀にまでに遡る可能性もある。この銅鼓にはハート形菩提樹葉文や蓮弁文、さらには二重方角文がスタンプによりほぼ全面に施されたもので、類 II 式鼓のなかでもかなり普遍的に見られる形態・文様を有している。

Bao La 鼓に施された写実的な鳥文や菩提樹葉文などは比較可能な資料がなく、年代比定に困難を伴うが、亀甲文、牡丹文などが 14-15 世紀に比較可能である。また鳥文に伴う雲文は 15 世紀頃の陶磁器文様に比較可能なものがあり、陳朝期の文様とは様式的に離れている。

また、上述の Kim Truỵ 古墓群の 3 号墓では 3 つの類 II B 式銅鼓が共伴し、1 号墓では 2 つの類 II B 式銅鼓の共伴が確認されている (Phạm Q. Q. 1993)。形態的には上記二つの銅鼓にかなり近く、これらの銅鼓の文様には 15 世紀の青花陶器に使用される菩提樹葉文や圈文に類似のものが存在する。こうした銅鼓も年代の下限は 15 世紀であろう。

陶磁器や他青銅器との比較で 17 世紀以降の遅い時期を想定できそうなものは、ホアビン省のみならず、他省にも見受けられない。従って、16 世紀頃にはこの型式の銅鼓は生産されなくなっていた可能性が高いと判断する。この判断は後述の阮朝期生産と考えられる龍文を鼓面に有す特殊な形態をした Lai Dong 鼓 (フート省) とは全く異なった形態・文様を示し、型式的連続・系譜的親和性を想定する

のは無理があることから支持される。

以上から少なくとも類ⅡA、類ⅡB式両方が陳朝期において併存していた可能性がある。また、両式とも陳朝を前後する年代に納まる気配を示している。具体的には、型式変遷としては類ⅡA式の中には李朝期に遡るものが存在するが、逆に後黎朝期に下るものではなく、ⅡB式のものには陳朝を年代の中心として、後黎朝初期（15世紀）にまたがる年代幅を想定しておく。

また、これらの銅鼓の年代上限に関して推察を加えると、吉開の論じるⅡ式の生産終末年代と類Ⅱ式の製作開始年代間に、空隙が生じている可能性もある。そのことが、両型式間を似て非なるものへ導いた理由かもしれない。

### c 類Ⅱ式銅鼓の役割

類ⅡA式銅鼓には龍文を鼓面に持つものが多く、上述の年代論から李・陳朝期の年代が想定される。ところで、龍文は李・陳朝期には王宮、仏教寺院など限られた建築や石像物に用いられたもので、当時の社会において決して一般的なモチーフではない。大西（2001）が具体例を挙げているが、龍は王権と密接に結びついている。後の後黎朝期には龍文を王室や朝廷に限って使用する定めも出されているほどである。李・陳朝期の仏教も王室の保護下に発達したものである。

これらの銅鼓のモチーフには龍文とならんで蓮弁などの仏教的モチーフも多用されており、仏教寺院やその石碑、石彫などと同じ脈絡で製作されていることが理解できる。また、龍文を有す銅鼓は類Ⅱ式の中でもわずかな存在であることは、製作量がその他の銅鼓に比べ圧倒的に少なかったと考えてよい。朝廷が製作を管理して、山間民族への贈品等にした可能性とてあろう。従って、銅鼓の製作をキン族の居住域に求めるPhạm Quốc Quân（1985）の意見は的を射ている。

ここで、思い出さねばならないのはタインホア省Vĩnh Lộc(ヴィンロック)県Đang Nê(ダンネー)社にある銅鼓山とその麓の銅鼓山神祀(Đền Đông Cơ Sơn Thần)である(Fig.225)。銅鼓山は前黎朝の黎大行による占城遠征(989年)出発地と想定されている(Nguyễn D. T. 1985)。14世紀成立の『越甸幽霊集』によると、後に銅鼓神は、李朝の李太宗が太子の時にに行った占城遠征(1020年)を助け、祀られていた銅鼓が昇竜に招来され、護国の神として都城域内の聖寿寺の後ろに、改めて祀られている。1028年には銅鼓は封爵を受け、この銅鼓山神祀(Đền Đông Cơ)では諸侯の会盟儀式を行う場となっている。さらに、第一次元寇を撃退した1285年に靈応大王として陳朝より勅封され、1288年には昭感の字が加封され、1315年には保祐の字が加封されて国家守護神としての扱いを受けている。

『大越史記全書』によれば、後黎朝創始者の息子黎太宗が即位時の会盟や黎仁宗が祖先祭祀(1456年)を行った藍京(後黎朝故地であると同時に陵墓)で、銅鼓が打ち鳴らされている。1619年の鄭氏政権下でも、タインホア省の銅鼓山が崩れたときにも、官を送って、祭を行っているから、一定の関心が国家により払われていたことが理解できる。

ちなみに、タインホア省でⅠ式鼓と類Ⅱ式鼓は明瞭な分布範囲を示している。Ⅰ式鼓は平野部を中心にヴィンロック県やThọ Xuân(トースアン)県などの中遊域に濃密に分布し、さらに山岳部域に入ると激減する。逆に類Ⅱ式鼓はCẩm Thủy(カムトゥイ)県、Thạch Thành(タックタイン)県、Làng Chanh(ランチャイン)県などの山岳域県から以西に集中して分布する。Hò(ホー:胡)城や銅鼓廟が

位置するヴィンロック 県中心部では、類Ⅱ式鼓は報告されておらず、李朝の李太宗が昇竜に持ち帰った銅鼓はⅠ式鼓の可能性が高い。マー川を越えたĐang Nê（ダンネー）社の対岸には胡季 氏が14世紀末に都を置いたNhà Hồ（胡朝）城が位置しており、当地域が戦略上、交通上重要であったことを示している。当地域の背後にはムオン族などが居住する広大な山岳地域が控えている。

また、後黎朝故地である藍京が位置するThọ Xuân（トスアン）県Xuân Lâm（スアンラム）社は、Chu（チュー）川流域において類Ⅱ式鼓の分布のほぼ東限に相当している。ここから西に行けば類Ⅱ式鼓の分布が濃厚となる。実際、藍京域内で類Ⅱ式鼓も出土している。後黎朝創始者黎利は母方がムオン族といわれ、藍京自身がキン族とムオン族分布域のはざまのようなところに位置している。

銅鼓山神祠やホー城、そして藍京は、共に平野から山地への中間域として、戦略・交通上重要ばかりでなく、平地民と山地民の入り交じる高地と低地を取り結ぶ緩衝地帯として政治上も重要であったはずだ。つまり、平地民と山地民の間を取り持ってきた歴史地理的環境のなかで銅鼓の役割を考える必要がある。

桃木（1992）は李・陳朝期に起きたタイ系諸民族の西北部からチュオンソン山脈での政治活動活性化とそれに伴う抗争激化を「西」からのヴェトナム王朝への脅威として捉えている。

実際、ホアビン省のフランス植民地時代の地誌では、李聖宗のタイ族征討時に李朝側に協力したムオン族の首領（土郎）が征討後、加位加封を受けたこと、陳聖宗がダー川のChợ Bờ（チョボー）<sup>(3)</sup>に進軍した際、周辺のムオン首領達はその支配権等を保証され、陳聖宗が鑄造させた銅鼓が各首領に送られたことなどの伝承が採集されている（Grossin 1926）。こうした李陳朝時の西北部征討時については文献や他の地誌からもある程度検証可能なため、それなりの信頼すべき情報を含んでいるのであろう。

そして銅鼓自身はその後も各ムオン族の首領の家などに類Ⅱ式鼓が伝承されていたことが、各調査で明らかにされている（Cuisinier 1948, Quách V.A. 2003）。筆者も実際、類ⅡA式鼓が、ムオン族の族長の家で保管・使用され続けている例を実見した。驚くべきことはCuisinier（1922）の報告ではⅠ式鼓もムオンの家の中で保管・使用されている写真が掲載されている。もちろん、銅鼓が権力者たる首領家等や族長に集中していたことは言うまでもない。

これらの報告では、ムオン族が銅鼓を鑄造した話については、伝説的な銅鼓鑄造起源の話以外はない。また葬礼などで積極的に銅鼓を使用していたムオン族に、銅鼓が次第に使わなくなるようになった理由を見いだすことも難しい。さらにはムオン族間には青銅器鑄造例が全く報告されていない。20世紀初めに北部ヴェトナムの山岳民を踏査したアバディ（1944）によれば、ムオンやタイ系の諸民族においては、簡単な鍛冶や銀細工を営む例を認めるのみで、鑄造を伴うような本格的金属手工業は報告されていない、楽器として頻用される銅鑼などもキン族の製品を手に入れていることが記録されている。

また、ムオン古墓に埋納されている陶磁器の場合、使用者側のムオン族の嗜好を反映して作られているものは全くないといってよく、あくまでも単なる輸入品である。そこに読みとることができるのは、低地民の生産した陶磁器が時間軸上でどのように変化したか、どのような嗜好を持っていたかということと、使用者である高地民がどのような陶磁器を購入あるいは入手することを好んだかということのみである。

以上のことから、筆者は、類Ⅱ式鼓は平野部のキン族側が製作したもので、龍文を有した銅鼓など一部は、李陳の朝廷が直接製作に関与していたと考えたい。そして、ムオン族を中心とする銅鼓使用伝統を維持していた民族に、これらの銅鼓は贈答品あるいは商品として流通したと考える。もちろん、王朝からの贈答品の場合は、ムオン族よりさらに西に控えたタイ系緒族との抗争時に、ムオン族と平地政権側の関係をとるもつ具体的仲介品であったと考える。

ここに、文献からの筆者の説に関する傍証資料を挙げておく。中国、宋代の文献史料である『嶺外代答』には、紹興26年（1156年）に宋の使節が入朝した際の見聞の叙述があるが、そのなかに衣服や身体装飾について触れてあり、「其文身如銅鼓款識」（巻二の29）という記述が登場する。当時の銅鼓は当然類Ⅱ式銅鼓であり、そこに現れる文様モチーフに入れ墨と同じものがあったことになる。この記述と関係資料から推測可能なことは、北部ヴェトナムの低地域で、類Ⅱ式銅鼓が中国からの使節に目に触れるようなところで使われており、そのなかの特徴的な文様と入れ墨の文様のモチーフが同じであったことである。『大越史記全書』での李朝期の銅鼓の使われ方を参考にするなら、朝廷内での使用も十分考えられよう。ここで思い出されるのは、李・陳朝期に製作された鉄彩長胴無頸壺に描かれた兵士の足に、龍文が入れ墨されてあることである（三上編1984）。宋の使節が目撃した文様が龍文であったことは十分可能性がある。いずれにしても山間部で発見されることの多い類Ⅱ式銅鼓が平野部の中心域（都城）で作られたり、使われていた可能性を示す間接的証拠資料である。

より新しい時代において、こうしたムオン族と平地民との関係は、宇野（1999）の研究で、鮮明化されている。そして、吉開（2000）が指摘するように、後黎朝の時代に儒教が政権思想として積極的に強化採用されていく中、異質の思想を具現する銅鼓は次第にその役割を減じていったのであろう。このあたりの問題は歴代政権の高地民政政策のなかで捉えていく必要がある。

ところで、隣接居住するThái（タイ）族にはムオンに比較して、銅鼓使用伝承や神話が非常に少ない。ただし留意しなければならないのは、過去においてはタイ族も使用している可能性が高い。それは、タイ族の征戦史を語った『Tay pu xac（父祖の征戦物語）』（Cầm Trọng私信、檜永2002）には、銅鼓が登場し、ラオス側に銅鼓を12鼓贈呈した話もあるという。もし、この記述にある程度の確証性があるなら、タイ（Thai）族も一時的に銅鼓を入手し、利用していた時代があることになる。

また、こうした類Ⅱ式は、数量的に非常に少ないながらも、中部ヴェトナムの山間部と、国境を西にまたいだラオス南部のサワナケート県やチャンパサック県でも出土している（例、ヴィエンチャン博物館資料、川島秀吉確認資料）。分布のあり方としてはヘーガーⅠ式中期の銅鼓群と同じような分布をみせることが興味深い。流通ルート、使用者、銅鼓の交換・流通形態に類似性があったと考えられる。

さらに、ホアビン・タインホア・フートなどの紅河平原南接山岳域に分布する類Ⅱ式とはやや異なる類Ⅱi式が、ハザン省やカオバン省などで、近年報告されている（Phạm M.H. 2001）。例えば、BTHG.KL/D18鼓は形態的に類Ⅱb式同様、頭部と胴部間を大きく分ける突帯が存在し、頭部が膨らみを持つのに対し、胴部は裾広がりであるが拡がりかたは真っ直ぐである。類ⅡB式のBao La鼓などに近い形態である。しかし、類ⅡB式との大きな違いは耳が頭部と胴部をまたいで、鑄接されていることである。文様は四重の蓮弁紋が特徴的で、報告者は14-15世紀のヴェトナム青花陶器の蓮弁に存在し、この銅鼓もその年代に納まるのではないかと考えている。筆者も同意見だが、この蓮弁文は正確

には15世紀にみられるものである。また、鋤等を引く農作業風景が浮紋で抽出されており、麻江型（IV式）との共通性も感じさせる。

## Ⅶ III式銅鼓

III式に関しては現在まで、ライチャウ省、ソンラ省、ゲアン省、ダックラック省などラオスと国境を接する北部・中部各省でしか発見されていない。ヴェトナムではヘーガーの4分類中、発見数の最も少ない銅鼓である。

この銅鼓に関してはクム（Kho Mu, Khum:オーストロアジア語族）族の民族使用例が報告されている（Diệp Đ.H.&Đậu X.M. 1976）。彼らは正月や家の新築などの祭礼時に使っている。また、銅鼓の入手に関しても村人から金を集めて銅鼓を買いに行った話やラオスから僧を招いて銅鼓を鑄造させた話（Diệp Đ.H.私信）が収集されている。

## Ⅷ IV式銅鼓

分布の中心は、ハザン省、カオバン省、ラオカイ、ライチャウ省、ソンラ省の北部山岳部の中国国境域に多く、ハザン省での出土例が最も多い。これらの出土例は広西・雲南の出土例と連携して考察する必要がある（Fig.225）。ただし、平野部でもハナム省のLong Đoi Sơnでの例が孤立して存在する。

IV式銅鼓の場合は、広西と雲南に国境を接するハザン省に多く居住するLô Lô（ロロ）族が現在でも使用している（Quảng V.C. et al. 1974, Lô G.P. 1996）。一族の族長が銅鼓を管理し、普段は地中に埋納し、葬礼時のみ掘り出して利用する。一族のなかで死者が出た場合、地中の銅鼓を掘り出し、葬礼を行う家の前でつるす。そして、祭壇の前で、死者のために祖霊の出迎えをお願いするときに、叩く。また、広場の下の仮屋で銅鼓をつるし、水牛か牛を供犠するときに男女で輪舞するが、その時に、二つの銅鼓の鼓面を向き合わせてつるした銅鼓を叩く。さらには死者の霊が現世を離れあの世に行くための儀礼時にも、銅鼓を叩き踊る。この時には2-3対の銅鼓を使うこともある。その後、死者を墓に埋めた後、9晩続けて銅鼓を叩き、踊り死者をしのぶ。

ロロ族の銅鼓の場合、雄鼓と雌鼓の区別があるが、それは世界が洪水に見舞われたとき、二人の姉弟のうち、姉が大きい銅鼓に、弟が小さい銅鼓に体を結びつけ助かり、そこから種族が、再び復活したという伝説に基づいている。同様に、ロロ族の銅鼓は銅鼓鼓面縁部に二つの小穴が開けられているが、これも二人の姉弟が魔物を退治した伝説に基づいて説明されている（Lô G.P. 1996）。17世紀末成立で、属明期の（1407-1427年）ことが詳しく記録されている『安南志原』では、広西・雲南国境近くに住む僚が、銅鼓を屋敷の庭に置き儀礼に使うこと、雄雌の区別があることを記している。その他の民族習慣に関する記述は、ロロ族のそれに近いものがある（樫永私信）。また、1508年には、ロロ族と考えられる民族が、後黎朝朝廷支配域に侵入するという事件がおきている（『大越史記全書』）。「黒羅羅国人侵入朱村田開、...、往征黒羅羅、到朱村田、分立界碣、尋命燭等經理順（興）化處水尾朱開地方、以修理關隘」とあり、現ラオカイあたりに雲南のロロ族の国が攻め込んだことを伺わせる記述がある。雲南側では類II式銅鼓がハザン省に北接する文山県（夏雲輝2005）、ラオカイ省に北接する河口県（吉開 1998a）でも発見されている。

中国でも雲南省の文山県でヴェトナムのロロ族に対応する□人（彝族の支族）の銅鼓伝説などが報告されている。ただ、文山県のIV式銅鼓は大半が壮族の集落で確認されているようである。この傾向はヴェトナム側とは異なっており、民族が同じであるからといって、銅鼓利用が国境をまたいで認められるわけではないことを示している。その民族が関係を持ってきた平野や権力中心地の民族や政権との関係で考察しなくてはならないことを示しているようだ。

当然、類IIについては紅河平原の生産の可能性が高いことから、ムオン族のように、後黎朝朝廷とロロ族の関係が銅鼓に象徴されている可能性がある。

これらの記述がロロ族のものとするれば、少なくとも15世紀から現在までのロロ族による銅鼓利用が確実となる。当然、銅鼓利用に関してはその前史があると考えられ、ロロ族が居住するIV式銅鼓分布域との重なりを見せる類II式やII式銅鼓の利用民族にロロ族が重なる可能性も考慮しなくてはならない。注目すべきはII式銅鼓で、脚部を切断し短くしたもので、銅鼓鼓面中央部に二つの小穴が明けられている例があることである（Phạm M.H.2001）。これはII式銅鼓をロロ族が再利用した可能性もある。

## IX Lai Đồng式鼓

フート省タインソン県のLai Đồng（ライドン）社より接收された銅鼓は上記の5つの型式と全く異なるものである。頭部と胴部は真ん中で若干くびれをもって、分かれているが、共に無紋の長方形浮紋をいくつかめぐらしたのみで、文様帯を構成はしていない。鼓面には二匹の龍と雲文が絡み合ったものが配置され、中央部の太陽紋も12芒ながらも、これまでのどの型式の銅鼓とも類似していない（Fig.218-8）。龍文などから判断すれば阮朝期（Nguyễn A.T. 2001）と考えてよいのであろう。この銅鼓は他の銅鼓とのつながりを求めるよりは、青銅製の太鼓との関連を追及すべきであろう。

フート省タインソン県では、ムオン族の間でLai Đồng式鼓や類II式鼓を対にして使う伝承が残されている（Bùi Tuyết Mai ed. 2001）。村落の集会所の亭（Đình）での儀礼時や各族・家族単位での儀礼時に用いられたようで、銅鼓を対にして正置状態で吊し、その下に穴を掘り、音の響きをよくしたようだ。

## X 銅鼓の二次的利用や銅製太鼓の問題

ハイフォン省キエンアン県Đông Hoà（ドンホア）に銅鼓を祀る寺があった（Mỹ Khánh：ミーカイ）。これは信者が入手した銅鼓を寄進したものであり、ものとしては寺の縁起と全く関係はない（Lê T.H.1999）<sup>(4)</sup>。最も優美な銅鼓の一つに挙げられるNgọc Lũ鼓も、村人が紅河沿いの水路掘りで掘り出したものを見つけ、村のĐền（神社）に持ち帰り奉納したものであった。黎貴淳が伝えるヴィンフック省の銅鼓寺（18世紀:Nguyễn X.L.2000）、ハーナム省のLong Đọi Sơn（ロンドイソン）に伝来していたというIV式銅鼓、さらにはChùa Đậu（ダウ寺）に伝来していたとされる銅鼓（Nguyễn D.H. 2001）なども、地中から掘り出された銅鼓が、珍奇なもの、あるいは霊験あらたかなものとして、宗教施設に奉納され、二次的に利用されたケースは非常に多いと考えられる。タインホア省の銅鼓神社（Đền）の起源に関してもこうした出土銅鼓をもとにしていた可能性は大いにあろう。

これらの二次的利用例はキン族の信仰体系のなかで理解されるべきものだが、山間部民族間でも、



Thái(タイ)族が、地中から掘り出された銅鼓を二次的に信仰財として屋内保管していた例などがある(Diệp Đ.H.1987)。

ハザン省の場合、胴部あるいは脚部が意図的に切断・除去され、ロロ族が使うⅣ式鼓のように器高が低くされたⅠ式やⅡ式がある(Phạm M.H. 2001)。現在のロロ族使用例のように、鼓面に小穴を規則的に開けていることもあるため、ロロ族などが、後世に出土した銅鼓を再利用したことを想定する必要がある。

銅鼓と銅製太鼓共、ヴェトナム語でTrống Đồngと呼ばれるがゆえに、ヘーガー分類に対応する銅鼓やその変種と混同されてしまう銅製太鼓が存在する。Nguyễn Duy Hinh (1983) はナムディン省やニンビン省の寺院(Chùa)、神社(Đền)などで、後黎朝の後半期以降から20世紀前半にかけて铸造された銅製太鼓使用例を報告し、木製の太鼓を模倣した銅製太鼓と認めつつも、ドンソン銅鼓とのつながりを密かに期待している。彼が報告する銅製太鼓が銅鼓と系譜的に直接のつながりを有すかどうかは、今後、銅製太鼓の研究を行わなければ明らかにできないことだが、可能性は低いであろう。ただし铸造法や文様の比較などを通じて、類Ⅱ式銅鼓の遅い時期のものやLai Đồng式鼓などと、銅製太鼓の間に生産地上の重なるの有無、年代上・铸造技術上の並行関係などを考察する材料になると考えられる。

## C おわりに：銅鼓と民族史

こうした銅鼓利用史を整理していくと、一つの共通した現象に気づく。それは、紅河平原の南縁からホアビン山塊にかけてが、銅鼓分布の主地域であることだ。これは、北部ヴェトナムではViệt-Mường(ヴェト・ムオン)系民族に銅鼓利用の伝統が永続し、最終的には漢化やキン化をほとんど経験しなかったムオン族に、その使用伝統が保存されたと考えてよい。銅鼓の製作はヴェトナムでは断続的ではあるが、その起源からつい最近まで続いたことが理解できる。ただし、製作者は状況により変化しており、必ずしも使用者が製作しているわけではない。ただし使用者の主体は変化を受けつつも、ヴェト・ムオン系民族の中では継続したということになる。逆にタイ系緒族にはその銅鼓利用伝統が、根付かなかったとみてよい。

歴代のヴェトナムの政権にはキン族のみならず、ムオン系集団が積極的に参加していることも、この現象を理解する背景である。おそらく、中国やタイ系緒族との拮抗関係のなかで銅鼓は集団の帰属意識を誇示・増幅させるのに格好の儀器であり、ゆえに長い存続利用が許されたのであろう。それと同じ脈略でロロ族の銅鼓も考察されるべきで、ロロ族居住域での類Ⅱ式銅鼓例は、後黎朝政権側が懐柔策として、銅鼓を利用した可能性がある。

つまり、やや言い古された表現かもしれないが、銅鼓はドンソン文化時代のある時期以降、民族集団あるいはそれに近いものに、密接に結びついた儀器でありつづけたことであり、その分布研究は民族形成史を理解することに大いに寄与することを強調しておく。

また、ホアビン省のChợ Bò鼓とĐền Bò(デンボー：黎聖宗北西部遠征記念碑文地点)やタインホア省の銅鼓廟とNhà Hồ城(胡朝の西都)等、地域史的にみて重要な地点での銅鼓出土に関しては歴史

地理学的脈絡からの検討も重要である。

#### 注釈

(1) この銘紋に関しては、Nguyễn D.H. (1996) のように、文字の読み方として異なる解釈も存在する。2004年の筆者の観察では最後の4文字が、量 (ibid.) の報告にあるように「百八十二」とよめるのはかなり確実であろう。

中国秦漢史研究の工藤元男 (早稲田大学) に拓本からの釈読をお願いした。ご教示では、確定的なことは言えないが、量氏の指摘のように末尾が数字なら、最初の字は”重”であるかもしれない。”百”の字は漢代の隸書に属するものであろうということであった。

(2) 吉開は類Ⅱ式の起源において、典型北流型からの系譜を重視している。しかし、二重の弦紋や耳が環耳ではなく、扁平耳であることなどⅡ式西群 (典型靈山型) とのつながりもあると思われる。

(3) ChọBờ (チョボ) はĐà (ダー) 川の水運上、重要地点であった。ここではⅠ式鼓も出土しているが、歴代朝廷の西北部征討時の拠点になっているようだ。黎聖宗は当地点近くで哀牢征討時に協力してくれた集団・民族を顕彰する碑を残している。フランス植民地時代は、ここまで大型船の朔上が可能であった。

(4) この銅鼓に関しては、別報告 (Trần Phương 1998) で、同じ行政区内のMỹ Khê (ミーケー) 寺 (Mỹ Khánh 寺のこと) の銅鼓として報告されている。報告では、銅鼓は、近くのNam Sơn (ナムソン) 坊のĐền Khả Lâm (カーラム) 等に伝わる陳聖宗の娘、昭征 (Chiêu Chính) 公主による采邑伝説に結びつけられて、その公主による生産のものとして語られている。2005年6月3日に行った筆者のMỹ Khánh寺とĐền Khả Lâmでの聞き取り調査では、銅鼓は寺のものではなく、一時的に引き受けた寺僧のもので、寺域から掘り出されたものではなかった。また、昭征 (Chiêu Chính) 公主による采邑伝説自体は、玉譜などが存在することから、封建王朝期に遡る可能性を有するものの、銅鼓に関する伝承は全く存在しなかった。従って、銅鼓を所有していた僧かあるいは報告者の創作と考えられる。東方学会会議発表原稿 (2004) では、現地調査を行わないままに報告を利用したので、訂正を強調しておく。

#### 謝辞

本論執筆に当たって、吉開将人氏、Diệp Đình Hoa氏、Phạm Minh Huyền氏とは銅鼓の具体的論議をかわし、ご教示も頂き、大いに勉強となったことを感謝の意をこめて記しておきたい。また、Cầm Trọng氏と樫永真佐夫氏、Trần Quốc Vượng氏にはタイ民族史についてのご教示を頂いた。八尾隆生氏と岡田雅志氏には文献史料についてのご教示を頂いた。Quách Văn Ấch氏、Nguyễn Văn Hảo氏、新田栄治氏には貴重な資料を頂いた。ハノイ市博物館、ホアビン省博物館には遺物実見のための労を払って頂いた。以上、記して感謝の意を表したい。ホアビン省での研究活動の一部は、トヨタ財団助成による研究プロジェクト「ホアビン省のムオン古墓の研究：研究代表 Bùi Minh Trí」に依拠している。また本論で基盤にした銅鼓データは西野範子氏と共同作業で進めている銅鼓出土基礎データ集に基づいている。当データ集は、完成次第出版の予定である

## 第16章 紅河平原における輪中型堤防形成に関する試論

### A はじめに

北部ヴェトナムの紅河平原 (Fig.226) は、低平な自然堤防と後背湿地の複合体やデルタが地形の大部分を占める。従って、夏の雨期にしばしば冠水を被る地域であり、豊富な水源を利用して先史時代より水稻耕作地帯として発達を遂げてきた。従って、洪水防止と水稻耕作のための水利は古来より、国家から家族レベルにいたるまでの関心事であった。

現在、当平原を空から見渡すと堤防が網の目状にめぐらされた地帯となっていることがよくわかる。なかでも紅河本流やダイ川の下流域 (ハータイ省南部、ハナム省、ナムディン省、タイビン省) などは輪中型堤防 (懸廻堤) <sup>(1)</sup> がひしめき合っている (参照:Gourou 1936 Fig.12)。日本の濃尾平野などの輪中地帯と比べ範囲規模の大きい輪中がひしめき、輪中型堤防形成に至る深い前史を想像させる。当平原の堤防形成については、これまで地理学と歴史学からの発言が中心であった。フランス植民地時代に紅河平原で人文地理研究を行ったグルー (Gourou 1936) は水文環境のなかで、当地域の輪中型堤防の特徴を捉えると同時に、文献史料を使ってその前史を探ろうと試みている。

桜井 (1987a,1987b,1989) は、『大越史記全書』、『安南志原』などの史書資料の歴史地理的研究において、陳朝期 (1225-1400年) に、大規模な堤防 (鼎耳) の建設が始まり、後黎朝期 (1427-1789年) には、堤防網はほぼ完成したと判断し、さらに、阮朝期 (1802-1945年) にタイビン輪中などの巨大輪中が成立したと考えている。同氏以外に、いまのところ北部ヴェトナムの堤防形成過程を体系的に論じたものはない <sup>(2)</sup>。桜井の議論では、陳朝期に建設された堤防は、宋代の江南デルタに出現した大型堤防と同様な非締め切り型の馬蹄形堤防と考えられており、阮朝期の平原下流域に造られた完全締め切り型巨大輪中との間には、堤防進化史上のギャップが存在する。日本の輪中型堤防の発展史にみられるような非締め切り型堤防から締め切り型 (輪中型) 堤防への進化段階 (Fig.227) を見いださなくてはならない。

本論考では、筆者が近年調査してきた輪中地帯における集落形成に関する考古学的研究から発展させ、輪中堤防形成年代や集落成立との連関性などについての試論を提示したい。

### B バックコック集落とその周辺の考古学研究より

紅河平原下流域のナムディン省ヴバン県タインロイ (Thành Lợi) 社のバックコック (Bách Cốc : 旧百穀村) 集落と周辺で、筆者はバックコック学際研究チームの考古学担当として、1996年から2002年にわたって小規模発掘と表面調査を行い、集落形成史を明らかにしてきた (西村他1998,2000, Nishimura&Nishino2002, n.d.)。

バックコック集落は紅河右岸からナムディン川右岸地域にかけて形成されたナムディン輪中の東南縁に位置している (Fig.228-1)。等高線分布図 (Fig.231) から明らかなように、バックコック集落は海拔1-2

mの微高地帯に位置している。春山（1999）による地形形成研究（Fig.170）では、バッコック集落は旧河川のコック（C6c）川沿いの自然堤防上に位置し、自然堤防列の南側にはクアリン（Quả Linh：旧果靈社）集落が、西にはズオンライ（Đương Lai：旧陽来社）集落が旧海岸線で発達した砂礫列上に位置している。これらの集落は微高地である自然地形に沿うプランを呈するのが特徴である。また、バッコックの東にはフーコック（Phủ Cốc：旧富穀社）集落が、北側にはタンコック（Tân Cốc：旧小穀村）集落が位置している。後2集落ともに方形のプランを呈し、家々が整然とした列をなし、池が家の周りに多く分布しているのが特徴である。

バッコック集落5地点、ズオンライ集落2地点、フーコック集落1地点の発掘調査と、各集落での表面調査から以下のような集落形成史が明らかにされている（Fig.199）。現バッコック集落中央西部とズオンライ集落はともに居住開始は10世紀以前に遡り、13世紀以降安定した居住が行われる。17世紀以降になると、バッコック集落やクアリン集落の居住範囲が西側を中心として拡大し、特に両集落の西側で新たな集落域の拡張が行われる。同時に現フーコック集落と現タンコック集落での居住も開始される（Fig.199）。Fig.186,184はフーコック集落のPC地点とバッコック集落のXCSC地点の発掘坑の堆積層序である。前者は盛り土開始時期を17世紀、後者は18世紀に比定可能で、盛り土が堆積層の大部分を占めることが理解できる。同様な現象はバッコック集落のXB地点でも確認されており、17世紀以降の集落は、盛り土により居住面を高レベル化していたことが理解できる（Fig.230）。

こうした発掘結果から得られる家屋と周囲地形の関係は、Fig.230のように略図化することができる。つまり、低湿な土地に池を掘り、その堀上げた土でマウンド状に盛り土をし、その上に住居を築くものである。グルー（Gourou 1936）は、盛り土上に住居を築き、家と池が、まばらかつ整然とした分布を見せるフーコックやタンコックのような集落を、ハッモン（Hát Môn）型集落と呼び、大河床域に小さい輪中をつくって立地しているパターンを見いだしている。ちなみに彼は、こうした形態の集落の居住史が比較的新しいことも見抜いている。

この盛り土マウンド上に家を建てる現象は、日本の濃尾平野や荒川流域の輪中地域でも“水屋”、“水塚”などとして報告されている（安藤編1975、佐藤他1987）。日本の事例研究では、このような建築現象は輪中内でも悪水が滞留しやすい低湿地域に多く見られる。これは輪中内の排水機能が滞ったときに、滞留する悪水による浸水から逃れるためである。盛り土を1m以上行って、石垣で固めた堅牢なものが多いが、その性格・機能は上述したナムディン輪中内の盛り土住居と何ら変わりはない。また濃尾輪中地域では、堤外地での盛り土住居も報告（安藤編同上）されているが、この問題は後で触れたい。

先述したように、タンコックやフーコック集落は周辺地域に比べ、最も低平な地域（海拔標高1m以下）に囲まれて立地している。そして、タンコックとフーコックの間にはVạn Tiển（ヴァンティエン）川という、排水と灌漑の両機能を備えた水路が走っている。19世紀末に編纂された地理誌『同慶御覽地輿誌』（Fig.229）には現在のナムディン輪中の東半分（Fig.228：現行政区分のNam Định市、Vụ Bản 県、Mỹ Lộc 県に相当）近くを占める範囲（大安縣の一部、務本縣、美祿縣、上元縣）が一つの地理的単位として認識され、その内縁を道路が囲っている。これは、ひとつの輪中型堤防とその上を走る堤防道を示していると考えられる。この古地図上の各社名を現地図で対応させると、現在のナムディン輪中の範囲に対応することが理解される。つまりナムディン輪中は19世紀には現在の範囲になって

いたと理解できる。そして、小穀村（タンコック集落の旧名）と百穀村（現バッコック集落）の間に河川が描かれており、現Vạn Tiển（ヴァンティエン）水路の祖形が19世紀にはすでに存在したと理解できる。

ところで、このバッコック集落（旧百穀村）、フーコック集落（旧富穀社）、タンコック集落（小穀村）が位置する地域は19世紀に残された地籍簿分析（桜井1987ad）とそこに記載された田地名の比定研究（中沢1997）で、水田を中心とした耕作地や宅地などの非農業地の利用形態の具体的復元が可能である。

耕作地に関しては、社会主義革命以前のヴェトナムにおいて、水田耕作地には主として公田と私田の区別が存在した。公田は国家所有のもと、村落が割り振り分配を行うもので、私田は個人に所有権が帰するものである。そして、村落によって、公田比率が高い村と私田比率が高い村といった違いが生じている。

富穀社と小穀村の場合はほとんどが公田で、百穀村では逆に公田比率が40%を越えない。しかし、この地域を俯瞰すると、上述3村の公田比率が突出していることが理解できる（桜井同上）。そして、中沢（同上）の田地比定によれば、これら3集落の公田は、バッコック集落から東側のナムディン川までの一帯、タンコック集落とその北側、現堤外地を含む一帯の低位地域にほとんどが集中していることが理解できる<sup>(3)</sup>。また、タンコック北側の公田地域には百穀、小穀、富穀以外にも、務本社と安邏社の公田も分布している。

そして、考古学による集落形成史を重ねると、集落形成史の長いバッコックは公田比率が相対的に低く、集落形成史の浅いフーコックとタンコックは公田比率が高かったことが理解できる。

紅河平原の伝統的稲作の場合、陽暦の6-7月に収穫する五月稲（夏田）と11-12月に収穫する十月稲（秋田）の作付け選択が行われていた。そして、各地簿（1805-1889年の間に編纂）によると19世紀段階の富穀社、小穀村、百穀村全てにおいて、公田（低位地域）は秋田、つまり十月稲が栽培されていたことがわかる（桜井同上）。

しかし、バッコック集落やフーコック集落の古老（Sakurai 2002）、ならびに省、県、合作社の水利担当者からの聞き取り調査（河野・柳沢1996）では、1960年代のヴァンティエン水路のポンプ場稼働以前、つまり20世紀半ばにおいて、当地域は、雨期の高水位化が原因で五月稲（夏田）のみの一期作であったことが明らかである。従って20世紀前半か19世紀末に、低地部で十月稲（秋田）から五月稲（夏田）への作付け転換が起きていることになる。この転換を引き起こした理由は1920-30年代の大型堤防の建設と考えられている（Sakurai 2002）。しかし、これは以下の理由から説明として適切ではない。

『同慶御覧地輿誌』の南定（ナムディン）省の記述では、夏田は少なく秋田が多く、その原因が秋から冬にかけての潮水進入にあることを伝えている。つまり、冬季は乾期の水位低下により、感潮時に堤防外からの潮水進入が容易になり、低地では乾期に塩害のため水稻耕作ができないことを意味している。低地の秋田を夏田にするには、密閉可能な水門と排水・灌漑設備を整えて潮水進入を遮断して冬春期の灌漑を行わなくてはならない。堤防の巨大化は水防上の堅牢さを保証しこそすれ灌漑・排水の性格を変えるものではない。

Dumond (1995:232) やGourou (1936) が、下流域の感潮域で報告する1920-30年代の伝統稲作法な

どを参照して当地域の19世紀末以前の稲作を類推すると、乾期の五月稲の場合には低位部で、水門を開け潮汐利用の灌漑を行っていたのではないかと考える。そして、雨期には堤防を締め切り、高位部で苗代育成を長期で行い、稲の背丈を高くしてから低位部へ移植するか（Dumont 同上）、禾の高い品種を利用するなどして、高水位に対応していたのではないかと考える。また、河水面自体もさほど高度化しておらず、洪水期以外は排水も比較的容易であったのではないだろうか。

ところが、阮朝期から仏領期を通じて行われた堤防強化政策は、提外地の沖積を活発化し、天井川化などの弊害を引き起こし、河水面が圧倒的に水田面より高くなったと考えられる（例：Đỗ Đ.H. 同上:278）。そのため、ある程度行えた雨期の輪中内排水も不可能となり、乾期の五月稲（夏田）へ転換せざるを得なかったというのが筆者の類推するシナリオである。

ところで、19世紀末から20世紀初頭以前における当地域の公田地帯は、雨期の高水位に対応した稲作であり、夏期増水時の浸水危険にさらされていたことになる。しかし、桜井（1987a）は1422年から1786年までの史書記載の災害分析から、夏期の洪水発生率が高いにもかかわらず、干ばつの危険をもつ五月稲（夏田）より、十月稲（秋田）の生産の方が圧倒的に安定していることを述べている。この議論に関しては、農業被害の記録回数比較にもとづく桃木（1991）の反証的批判も行われており、その是非判断は難しい。いずれにしても低地の十月稲栽培の場合、堤防建設による河川氾濫からの水田防御は必須のことであり、低地域を保護するには馬蹄形輪中のような非締め切り型堤防では対応できない。完全締め切り型の輪中型堤防が必要とされる理由がここに見えてくる。フーコック、タンコックの現集落の成立が輪中成立を機とした17世紀とすれば、周囲の低地域の開発（あるいは大公田地帯の成立）も、その時期が上限と考えるのが妥当であろう。

ただし、留意すべきことはフーコック並びにタンコック共に、現在の集落が旧集落から移動した可能性が高いことである。これは富穀社が、崇徳8年（1573）年の百穀社の香盃庵碑に登場しており、タンコックに関しては、その前身である小穀村が百穀村から陳朝期に分村した伝承を持つことから、17世紀以前に両村が集落として存在していた可能性がある。両者とも、ナムディン川の川べりに位置しており、その河川流路変更に伴い集落の位置が変更されるのは十分に想像できる。春山（1999）の地形・地質分析では現在のナムディン川はかなり新しい河道で、バココック集落とフーコック集落の間に旧河道を見いだしている。従って、考古学的知見を考え合わせると、17世紀の盛り土による現タンコックとフーコックの造成は、ナムディン川の河道変化に伴うもので、おそらく現集落よりさらに東側に位置していたタンコックやフーコックの旧集落が放棄され、西側に再立村されたことを示している可能性が高い。さすれば、富穀村に全く私田がなかったこと、また小穀村には集落最南端の提外地にしか私田がなかったことが、河道変化による旧集落域の喪失が旧来からの私田としての土地所有を不可能にしたか、あるいは減少させた原因と理解できる。そして富穀・小穀・百穀を主とした各村・社協力により行った堤防建設により、ナムディン川沿いの堤内地低域を田地化し、公田分給を行ったのではないだろうか<sup>(4)</sup>。さらには、既存の集落に付随する耕作地が多かったバココックの場合、従来の耕作地が私田であったため、タンコックやフーコックに比べ、相対的に公田比率が低くなったと理解すべきであろう。公田地帯の成立自体、フーコック、タンコックの現集落の成立と輪中型堤防建設と密に絡んでいるのである<sup>(5)</sup>。

## C 紅河平原他地域からの知見

前述したナムディン省バクコック集落周辺以外に、紅河平原の集落と堤防形成の関係を考える上で興味深い事例を紹介したい。

### I チューダウとミーサー

ハイズオン省ナムサック県タイビン川左岸のタイタン（Thái Tân）社チューダウ（Chu Đậu）村とミンタン（Minh Tân）社ミーサー（Mỹ Xá）村は、現在、堤防を挟んで、堤内地と堤外地の関係にある。堤内地のチューダウは海拔標高1.25m以上のところに立地し、堤外地のミーサーは2.5m以上のところに立地している（Fig.232）。

両集落ともに、15-16世紀の陶磁器生産を行った窯業集落であったことが考古学調査で確認されている（Tang B.H.ed.2000, Bui M.T.2001）。チューダウ村の場合、現集落の直下に窯址が確認されているが、窯址本体自体は現集落の表土面（居住面）とさほど変わらない高さに位置し、窯が操業していた時の居住面はより低いレベルにあり、17世紀の分厚い盛り土が、居住面の高レベル化と面的拡大をもたらしたことが確認されている（Bui M.T. et al.2003）。

ミーサーでは現集落から外れた堤防側の水田面で、窯址やその灰原（ものほら）が確認されている。そして、こうした窯業操業時に形成された文化層の上に、現集落が依拠する盛り土による高みが形成されている。文化層に含まれる遺物は15-16世紀の陶磁器生産時のものと、17世紀の居住活動により残された陶磁器である。前述の高みは集落下の水田面と比べ、2.5-3mほどの比高差があり、チューダウの現居住面よりかなり高くなっていることがわかる。従って、15-16世紀の窯業生産が終焉をとげ、17世紀初頭以降に、チューダウとミーサーの間に堤防が形成され、ミーサーが堤外地化したことにより、雨期の高水位に対応して、集落居住面を盛り土により高くしたと理解できる。

地元住民の言い伝えでは、過去、チューダウとミーサーの北縁に旧ケーダー川が流れており、近年まで水路として残存し、堤防と交わる場所では水門があったが、近年、水路、水門ともに埋められたという。現在、チューダウ側の旧ケーダー川脇では15-16世紀の陶磁器が大量に採集できるし、Xóm Bến（ソムベン）という船着き場としての旧地名も残っている。従って、15-16世紀段階においてこの旧川は、船が行き来するほどの河川規模を保っていたと考えてよい。おそらく、その後の堤防建設に伴い、河川が堤防内の水路と化し、水量の低下による規模縮小化へと徐々に向かったと考えられる。

以上の事象より導けるチューダウとミーサーの景観変化は以下のようなものであろう（Fig.230）。15世紀、ケーダー川とタイビン川が交差する南側微高地（自然堤防）を利用し、陶磁器生産がはじまった。当時はまだ本格的堤防建設は始まっておらず、両集落ともに居住面の比高差は生じていない。16世紀末あるいは17世紀初頭には両集落とも陶磁器生産が終焉を遂げるが、両集落ともに盛り土による集落の高レベル化と面的拡大が顕著となる。特に、ミーサーの高レベル化は堤外地適応のそれであり、ミーサーとチューダウ間に堤防が建設されなければ、起きなかった現象である。そして、この堤防建設が集落居住面の盛り土時期と重なると考えてよい。

## II ビンザン窯址群

ハイズオン省ビンザン県のサット (Sát) 川、ドーダイ (Đồ Dáy) 川沿いには、15世紀から20世紀にかけての窯址が集中して分布している。ホップレー (Hợp Lễ)、バートゥイ (Ba Thù)、カイ (Cây)、ゴイ (Ngói)、ラオ (Lào)、ヴァンド (Vân Độ) の各集落で窯址が確認されており、ヴァンド以外は全て、右岸に位置している (Fig.233)。注目すべきは、ホップレー、バートゥイ、カイ、ゴイ、ラオは、現堤防外に位置していることである。

ここでは、考古学調査に基づき、窯業生産の時期的分布を確認する。

ホップレーは15世紀から17世紀末か18世紀初頭にかけての窯業生産が行われていたことが大規模な発掘で確認されている (Bùi M.T. 2001)。1989年の発掘では約1.85m厚の遺物包含層が各層認められ、そのうち、表面から1.1m深前後 (発掘深度1-11レベル) まで、17世紀後半の遺物が確認されている。そして、1.1m-1.6m深前後で16世紀の製品が出現し (発掘深度12-17レベル)、15世紀のものは1.6mから1.85m (発掘深度18-23レベル) で確認されている。従って、17世紀以降の製品が確認できる層が非常に厚いことが分かる。調査者は、盛り土のように遺物を少量しか含まない層が厚く確認できたことを認識しており (Bùi M.T. 私信)、17世紀に盛り土によるレベル上昇があったことが考えられる。

バートゥイは15世紀から16世紀末あるいは17世紀初頭までの生産が確認できるが、それ以後の時期に関しては確実な資料は発見されていない。カイは15世紀から20世紀までの連続した生産が確認されている。さらに上流のラオでは16世紀から17世紀末か18世紀初頭の生産が確認されており、その始まりは15世紀にまで遡ると考えられている (Tăng B.H.2000)。筆者のサーベイでもラオは14-15世紀の遺物を確認している。

ゴイはカイ、ラオの間に位置した、堤防上の集落である。当集落では1999年の小規模発掘で、堤防と集落形成との関係がかなりはっきりした。現堤防道を挟んで3カ所の地点で試掘を行ったが、全ての地点において、最下層から出土するものは15世紀のものであり、その上に16世紀の遺物包含層が確認されている。また、そのなかの1地点では15世紀初頭の遺物を含む堤体と思われる盛り土層も確認できた。従って15世紀に現堤防道下に、より小規模の堤防があったことが確認される。そして、別地点では16世紀包含層の上で、堤防建設のための堅くしまった粘土の盛り土層 (約80cm厚) が確認された。発掘面積が狭いため、この層中の遺物量は非常に少なく、堤防建設の年代を判断することは難しい。しかし、盛り土層直上の最上層部で1980年代の瓦を焼成した層を確認しており、17世紀から1980年の間に盛られたものであると限定できる。地元住民によれば、20世紀初頭に現在の堤防道が造成され、1980年代の瓦窯操業以前は人が住んでいなかったという。この聞き取りが真実なら、発掘坑で確認された堤防形成の盛り土層は20世紀初頭の可能性が高い。そうすると、17世紀から20世紀初頭にかけては、全く無人地帯であったことになる。

これと同様な現象を確認できた地点に左岸のタインコイ村のはずれで発見された陶磁器集中分布地点である。当地点は窯業生産地ではなく居住遺跡と考えられるが、陶磁器の年代分布は14世紀から17世紀初頭に限られている。乾期の川水面より1.3mほど高い地点で包含層が確認され、その層は現堤防の盛り土層下に入り込んでいることが確認された。17世紀半ばか後半以降の陶磁器が全くないことを重視すれば、17世紀半ばか後半以降に当地点もゴイ同様、無人化したと考えられる。



こうした、観察事実をまとめると以下のようなことが推察可能となる。

16世紀末あるいは17世紀初頭になって、現在の大集落間を結ぶ堤防道上にあった小規模集落は廃棄されている。そして、窯業生産は17世紀半ば後半以降、カイ、ホップレー、ラオの3集落のみで行われるようになった。そして、この変化を引き起こしたものが堤防建設、あるいは、それに伴う河水面の上昇と考えたい。

### III フーラン

フーラン（Phù Lãng：旧扶朗社）集落はバックニン省クエヴォー（Quế Võ）県のフーラン社に位置している。当集落も伝統的窯業集落で、現在、棺桶、甕や壺などの日常生活雑器を焼成している（西野1997）。集落はカウ川右岸の自然堤防上に発達しているため、細長い形状を呈している（Fig.234）。現在集落の西側に残丘間をつなぐように建設された堤防が走っている。この堤防の起源は定かではないが1930年代、1960年代、そして2003年の3度にわたって改修が行われ、大規模化されている（西野私信）。1971年まではフーラン集落は堤外地に位置し、雨期には窯業が不可能になるほど居住面が浸水したようで、その後一部が堤防上あるいは堤内地に移住し現在に到っている。

このフーラン集落の直下に過去の陶磁器生産を示す遺物包含層が確認されている（Nishino 2003）。遺物分析では生産が13世紀まで遡り、その後、現在まで連綿とした生産が続いていることが確認された。乾期の露頭面の調査で以下のことが明らかになっている。チュン村（Thôn Trung）地点で、乾期の河水面から、わずか40-50cm高いところで13世紀から15世紀にかけての窯址、遺物包含層が確認できた。また、水面より、約2m高いところで19-20世紀の包含層が確認され、さらにその上に2m近い盛り土層が、現集落下に確認された。それから、ハ村（Thôn Hạ）地点では13-14世紀の包含層の上に、約2m厚の盛り土層があり、さらに、その上で17世紀の遺物包含層が確認できた。従って、13-15世紀においては、乾期水面から50cm前後しか高くない面で操業し、その後17世紀のある時点で、盛り土による居住面の高レベル化を行っている。高レベル化は、その後も現在に続くまで行われているようで、これは堤外地が堤防の高レベル化に適応したものであろう。

### IV バッチャンとキムラン

両村は紅河本流の左岸の堤外地に南北隣り合って位置し、行政上はハノイ市ザラム（Gia Lâm）県に所属している（Fig.201）。現在、両村落の間にはバックフンハイという水門付き水路があり、バックニン省、フンイエン省、ハイズオン省、そしてハノイ市のザラム県の排水・灌漑を行っている。

バッチャン（Bát Tràng）社は伝統的窯業集落であるが、窯業史の歴史的遡源については考古学からの本格的な調査はいまだなく、文献・伝承史料から、その起源は李朝期にまで遡るという仮説が提出されている（Phan Huy Lê 1995）。しかし、2000年よりバッチャンに南接するキムランで、陶磁器生産の直接証拠が発見されはじめ、考古学からのデータに重きが置かれはじめた（Nishimura&Nishino2003、西村2006a）。

バッチャンの河川側は紅河の攻撃斜面に位置しているため、乾期に集落下の堆積状況を観察することができる。堆積状況は以下のものであった。現集落面と基盤の褐色粘土層の間に約8mの堆積を観

察できるが、最下部約50cmは灰色粘土層で、15世紀あるいはそれ以前の遺物が包含されている。その上2.5mは明褐色粘土、黄色粘土、灰色粘土が斑状に混じるもので遺物をほとんど含んでいない。この層の直上で17世紀後半以降の遺物を含む薄い層が確認された。そして、さらに上層（約5m厚）では主に20世紀の遺物を主とした包含層と無為物層が確認された（Fig.230）。

キムラン（Kim Lan）社は現在、バッチャンの窯業技術を導入し、陶磁器生産を行っているが、19世紀以降は養蚕が盛んであった『京北風土記演国事』。2000年に集落脇の紅河左岸の川岸で、過去の集落の居住面が報告され、緊急発掘の対象となっている（Nishimura et al.2002）。発掘では11世紀から17世紀半ばにかけての居住活動がほぼ同一レベルの面で確認されているが、17世紀終わり以降の居住活動は全く確認されていない。陶磁器生産に関しては13-14世紀に遺跡周辺で行われた直接証拠が発掘で確認されている（Nishimura&Nishino 2003）。現在の集落の生活面はこの当時の生活面に比べ、約4-5m高くなっている。河水面との高さは、発掘された過去の生活居住面は、当然雨期の間は水面下にあり、乾期のみ地上に出現する。水面との比高差は最大2mほどにまで広がる。また現集落面さえ夏期にはほぼ、水に浸かるほど増水する（Fig.230）。

以上の観察事実から、キムラン、バッチャンともに17世紀の半ばか終わりになって、ようやく居住面を高レベル化する現象が確認される。共に提外地における河水面上昇に対応したものであり、高レベル化自体はその後にも継続している。従って、17世紀の半ばか終わりに、現在の紅河兩岸の堤防が閉鎖型堤防に変質し、河水面が高くなったことが理解できる。

しかし、15世紀の前半のある時点でほぼ居住痕跡がなくなり、16世紀のある時点で再び居住が復活した後は、陶磁器産業が20世紀末に至るまで復活することはなかったと考えられる。しかし、発掘地点で再び確認できる遺構群、大量の銅銭と炉址である。炉址は径1m前後のもので、青銅の鑄かすが若干確認されている。銅銭などの小銅片を溶解して、別の銅製品に鑄造していたか、あるいは青銅の地金などを生産していた可能性が高い。こうした炉址は現在までのところ16-17世紀のものしか確認されていない。そして、17世紀末頃で旧集落地点は放棄されている（Nishimura et al. 2002, Nishimura and Nishino 2004）。

さらに興味深いのは古堤防がバックフンハイ運河と発掘地点の中間で確認できることである（2004年3月調査資料）。2004年年頭の乾期はまれにみる小雨気候となり、河水面の低下をもたらした。そしてキムランとバッチャンの現集落のほぼ真ん中に位置する紅河左岸で、水面よりわずかに上の河床露頭面で、木杭列のようなものが発見された。筆者とキムラン歴史研究会の踏査で、この杭列は図のような配列、構造を持っていることが明らかとなった（Fig.235）。

それぞれの構造が、木杭と板を組み合わせた柵状のものを水流方向に直交するように土中に連続的に埋めており、日本の古堤防の発掘においても、愛知県名古屋市込高田堤防や東海市浅山新田堤防（北村1998）では、堤防基底部に板柵をつくり、さらには横木を交え、土嚢などを積んで、堤体基部の決壊防御工事を行っているが、キムランでの確認例も、堤体の中央かあるいは川面側かという問題はあれ、堤体基部を決壊から防護し、堤防土の安定を図った基礎工事の一部と見て間違いあるまい。

現河川流路に沿って100m以上の長さで確認され、その方向から推測するなら、旧集落地点と紅河の間を堤防が走っていたことが推測可能である。共伴する陶磁器で判断すると、この堤防の存在期間は17世紀末か18世紀から19世紀の間と考えられ、キムランが最低でも17世紀末か18世紀からある期間、

堤内地に立地し、バッチャンは堤外地に立地していたことが理解できる。そして、この杭列中の埋土に共伴する陶磁器は17世紀末から18世紀のものである。その時間幅に建設されたと考えられるのが筋であるが、建設時期は複数回繰り返された可能性も考慮しておく必要がある。堤防跡の位置・方向から判断すると、キムランの旧集落（バイハムゾン遺跡）範囲を紅河と分け隔て、バッチャン集落の東側へ向かって延びていた可能性が高い。また、バッチャン集落東側の水田地帯（現在は沖積土壌の堆積で畑地化）はキムランの土地で、バックフンハイ運河の建設でバッチャン側に所属している。これらの事実は、紅河本流が形成する自然堤防において、キムランはもともと、バッチャンよりさらに東側の自然堤防に位置していたことが理解できる。従って、17世紀末か18世紀からある期間、キムランは堤内地、バッチャンは堤外地に立地していた

そこで、キムランが最低でも17世紀末か18世紀から、ある期間堤内地に立地し、バッチャンは堤外地に立地していたことが理解できる。これは古老が伝える過去の集落の位置とも合致する。また17世紀から18世紀においてバッチャンの陶磁器生産域は面的に川沿いに現在のキムラン集落北部に浸食する形で拡大しており、この現象は堤防建設によるキムランの堤内地化現象と表裏一体の現象であるようだ。

キムランの古老の記憶やフランス時代の地図資料をもとにすると、革命以前のキムランは16のソムがあり、その大半は現中心集落に集中しているが、地形が現在200mほど紅河側へ張り出していた事が理解でき、この張り出し部は徐々に水流に呑み込まれ、最終的に1969年から1971年の洪水で消滅したようだ。

土地所有においては、私田に対して公田比率がかなり高い集落例であったことが記憶されている。公田分布域は現中心集落から南側、現在トウモロコシなどを栽培している畑地が中心だったようだ。ただし、現在の土地利用が過去に遡るわけではない。革命以前は低域で水稻（モチ米）、中域で陸稲やトウモロコシ、高域で桑の木が栽培されていたようだ。もちろん堤外地の川砂の頻繁な堆積が起きるところであるから、水稻栽培ができるような低所は非常に少なかったようだ。ただし、これはキムランが堤外地に位置している場合の農業形態であり、前述のように堤内地に位置していれば、全く異なったことが予想される。これは前述した17世紀末か18世紀の堤防建設が輪中型堤防とすれば、もともと排水域としてしか機能しなかった低域が堤内地化し、そこが農地（水田）として活用できるようになったことを意味しており、その水田は公田地帯であった可能性がすこぶる高い。筆者は、考古学調査と過去の土地所有形態から、17世紀におけるナムディン省のパッコック、フーッコック、タンコックでの輪中型堤防建設に伴う公田地帯の成立と同様な解釈が、キムランにも当てはまりそうである。

ただし、この堤防は最終的には、18世紀から20世紀のある時点で、破堤をして放棄され、キムランは、バッチャン同様、堤外地に位置することになる。この時に、キムランは堤外地に立地することを余儀なくされたと考えられ、堤外地に適した桑の栽培に主生業を切り替えたのではないかというのが筆者の推測である。『京北風土記演国事』（1807年以前成立）には、キムランは桑の栽培地として登場する。キムランの『北寧省嘉林県金關社神跡』（漢喃院所蔵資料4Ea7/12）では、9世紀の高駢（安南静海軍節度使）がここを通過した際、桑の栽培を教えたことになっているが、これは後世の附会の可能性を考えておかねばなるまい。

## V クアカムとトーハー

クアカム (Quả Cầm) 村は、バックニン省ホアロン (Hòa Long社) 社のカウ川とグーフエンケー (Ngũ Huyện Khê) 川の合流地点に位置し、トーハー (Thồ Hà) 集落は、バックザン省のヴァンハー (Vân Hà) 社カウ (Cầu) 川蛇行部内側の提外地 (ポイントバー) に位置している集落である (Fig.236, Pl.6)。両集落はカウ川を挟んで向かい合った関係になっている。現集落下には13世紀から16世紀末あるいは17世紀初頭にかけての無釉陶器生産時に分厚い包含層が堆積している。現在、集落内には無釉陶器製造法を伝えた李朝代 (1010-1225年) の皇女を祀った廟がある。

トーハーはつい最近まで、無釉陶器を生産する集落として有名であったが、現在は対岸のヴァン (Vân) 村同様、酒造りが主に行われている。この村の無釉陶器の考古学的痕跡は、現在の集落が提外地全面をほぼ覆っているため、正確には把握しえないが、17-18世紀にまで遡るのは確実である。興味深いのは、集落内で最も古式の建築を残している亭、寺などの碑文が共に17世紀末の建設を伝え (Thanh H.&Phuong A.1977)、亭や寺を中心に、家々が両翼に広がるように整然と並び、さらに集落を構成するソム (Xóm:社や村より下位の集落単位) も、その両翼に均分区画されるように並んでおり、意図的な集落設計が読みとれることである。こうした集落形態は、長期間にわたって形成された集落では普通みられず、形成史の新しい集落の特徴と思われる。

ところで、両集落の周辺では河川沿いに非常に多くの窯址遺跡が確認されており、最古の窯址遺跡は9-10世紀にまで遡る (Fig.236, Nishimura&Bui M. T. 2004)。現在までのところ9地点以上で窯址遺跡が確認されている。そのうち、クアカムを含め7地点が16世紀末から17世紀を生産の最終年代とするもので、それ以上新しい時期の窯址は確認できない。つまり、17世紀のある時期にこうした川沿いの各窯業生産地は生産をやめ、トーハーでの生産に収斂した可能性が高い。実際に、クアカムからトーハーに住民が移住した伝承が残っており、現在でも、トーハー側の一族の支派はクアカム側に年に一度、氏族祭礼時にやってきて祭礼に参加するという。さて、この変化を引き起こしたのは何かが問題となる。

前述の各窯址遺跡は全て、現堤防の提外地側で確認できるものであるが、その高度は乾期の河水面から50cmから1mほどの高さで確認できる。これは当時の河水面が現在に比べ、低かったことを意味している。ところでトーハーはカウ川の提外地に位置しているため、周囲の非残丘部と比べ相対的に標高が高く、最高位部で約8mに達している。集落中央の亭も標高5mのところに立地しており、17世紀末の亭建設時に5mの標高が集落の居住面として確保されていたことがわかる。ちなみに、この亭の建設地面と、川を挟んだ東向かいのクアカム側の窯址地点の表面高度はほぼ同じであった。そして、現在のトーハーの集落高度が示すように、盛り土や沖積土、さらには陶器焼成窯の連続した破壊と建設で、次第にその高度が高くなり、建設時から基壇を変えていない集落中央の亭 (Đình) が、結果的に周囲より低くなったと考えられる。従って、以前から居住自体は存在していただろうが、17世紀末がトーハーにとって集落形成史上の大きな画期である可能性が高い。

トーハーの集落自体はカウ川の蛇行部の内側に位置しており、周辺の窯址は対岸の河川攻撃面に位置しているところが多い。攻撃面側の地点では浸食が大きく、提外地での安定した居住は望めないが、逆にトーハーの側では堆積作用が大きいことを気にしさえしなければ、広大な安定居住面を望める。堤防建設が先か、窯業集落の再編が先かは、考古学的な調査が進まない限り判断はできないであろう

が、筆者は互いに時間的に近接し、相互影響を及ぼしていたと考える。

トーハーとその対岸域はまた、水上交通の要所でもあり、今日でもトーハーの対岸でのヴァンでは造船業が行われているし、クアカムの方では水上生活者や水上運搬業をやっている人たちが多くいたといわれている。提外地がその立地からも、手工業生産とその運搬に適していることはいうまでもない。よって、筆者は堤防建設による高水面化と提外地の水上交通の利便性が結びついて、窯業生産地の再編が起きたと考えたい。

## VI ハノイ市チャンティエン通り

レロイ（黎利：黎朝創始者）が湖に剣を投げ入れた伝説を持つホアンキエム（環剣）湖はハノイ市のシンボルの景観である。『洪徳版図』ではこの湖からは南東に川がのび、紅河本流に合流している。ところが、19世紀末に編纂された『同慶御覧地輿誌』には、この河川は全く痕跡さえとどめていないから、その間に埋められたことになる。2000年にこの旧河川上に位置する、チャンティエン通りとイコンバイ通りが交差する旧百貨店地点の緊急発掘調査が行われた（Bui M.T.2001）。発掘坑は旧河川を埋め立てた厚い埋土（褐色粘土層）を明らかにした。埋土の下は旧河川がまだ機能していた時の黒色あるいは黒褐色泥炭粘土層である。

出土遺物はほとんどが17世紀のものが中心で、16世紀以前のものは非常に少ない。17世紀半ばを中心とした貿易陶磁（中国・日本産）が数多く出土しており、当地点が17世紀段階で船着き場のような性格を有した可能性がある。おそらく、この時点で周囲の居住域の拡張や川の縮小化がはじまっていたと思われる。そして、この上の盛り土層は18世紀のものと比定されており、おそらく18世紀には川としての機能がなくなっていたと推定される。17世紀から18世紀にかけて、居住面の拡大、高レベル化が行われた一例であろう。

## D 結論

紅河平原の複数の地点・地域において、集落と居住面形成、そして堤防との関係について述べてきた。研究方法論的には、日本の輪中型堤防卓越地帯の研究が非常に参考となる<sup>(6)</sup>。

全体を概観して明らかなのは17世紀に突如活発化する集落の居住面高レベル化、面的拡大である。そして、これらの現象で輪中型堤防形成を前提にしないと説明できないというのが筆者の結論である。

ただし、その形成時期については地域あるいは輪中単位での時間差がありそうだ。バッコックやチューダウの例は17世紀の初頭、トーハー、キムラン、ハノイの例では17世紀末の可能性が高く、紅河平原下流域が早く、中流域が遅いという傾向があるのかもしれない。濃尾平野の輪中形成史でも、古くから集落が成立していた自然堤防地帯において、築捨堤から輪中型堤防（懸廻堤）に移行していく現象が、低位部から高位部にかけて拡大する現象が指摘されている（安藤1988）。ただし、筆者は17世紀を通じて輪中型堤防建設現象があったと考え、場合によっては16世紀の末にまで遡るところもあるかもしれないし、18世紀以降も堤防建設は盛んであったと考えている。ただし、前後との差を重視するなら17世紀であり、この時期が、まさに現在我々が目にするような稠密な紅河平原の集落風景

が形成され始めた画期と考える。

因みに文献史料では、1619年から1705年の間の詔令を集めた『国朝詔令善政卷之七』に河政関係の詔令が集められており、陳荊和（1988）の議論では、1660年から1673年にかけて7度の堤防修築令が集められている。これは、17世紀後半において破堤がしばしば起き、政権がその修築に対応する必要があったことを意味している。そして、陽徳二年（1673年）秋七月の申明培築堤路に、堤防修理の勅令がある。このなかに「水関」、「水竇」が登場する。水竇は後に、阮朝の『大南会典事例』で、堤防存廃の議論を行った際に触れられており（陳1988）、堤防の左右に水路を伴って設置されたものであることが理解でき、水田への入水機能や、入水遮断機能を持っていたことが理解できる。「水関」、「水竇」共に水門の類と考えられ、排水、入水の機能を持った閉鎖型つまり輪中型堤防が存在したと理解できる。ちなみに、明代の珠江下流域でも「竇」を輪中型堤防の水門として使っている（王2002）。前出の1673年詔令記事が、水関や水竇が付された最初の堤防記述であるなら、この時期には輪中型堤防が出現していたこととなり、筆者の推定する輪中型堤防出現期と齟齬をきたさない<sup>(7)</sup>。

バッコックやキムランでは、堤防形成と集落史と土地利用の相関性から、輪中型堤防形成により、堤内低地が新田化された時に、公田化され、結果として公田高比率地帯が成立している可能性が高いことを指摘しておきたい。沿岸部の防潮堤建設による土地の囲い込みによる新田開発でも、国家側が主体的に堤防建設を行っている場合は、公田が多く形成されているようだ（嶋尾2003）。また、17世紀後半から18世紀にかけて、堤防修築の際に付近の社を動員したり、税負担を決める勅令が出されている（Phan Khánh 同上、Đỗ Đức Hùng 同上）。さすれば、バッコックやキムランでも、鄭氏政権の主導のもと各社を動員して堤防建設を進めたと想定するべきなのであろうか。堤防形成と集落形成史を絡めて、土地利用を理解する視点は、従来のヴェトナム土地制度史研究ではなかったもので、今後、堤防建設の計画・管理・実効者なども含めて、各具体事例での検討する必要がある。

また、桜井（1987a）は『洪徳版図』、『国朝官制典例』などの史料分析から、紅河平原域の集落数が15世紀から18世紀にかけて、社（xã）数はさほど変化しないのに村（thôn）数が大きく増加していることを指摘し、そこに社からの分村の可能性を推測している。筆者はこの村数増加をおこした主因の一つが、輪中型堤防により、堤防内の低湿地を新たな居住地、耕地として利用可能としたことだと考える。その結果、堤防内の既存社から分村して、新集落が成立することは蓋然性が非常に高い。

さらには、堤内地と堤外地では居住面形成法において、差があることが明らかとなった。堤内地では、日本の水屋建築のように、各家単位で盛り土をして高位面を形成して、高水位に対応すればよい。しかし、堤外地の場合、日本のように石垣を使って、堅牢な水屋建築を築けるような条件や伝統がない場合、集落全体で高位居住面を維持して、高水位に対応しなくてはならない。また、堤外地の場合、河川の堆積作用も直接に被るわけであるから、盛り土をせずとも自然堆積で高レベル化することが考えられ、河川蛇行部の滑走斜面側のトーハーなどはその典型例だろう。従って、堤外地の場合、正確には河川の堆積作用と盛り土両方による高レベル化と考えた方がよい。

また、こうした堤外地にしばしば窯業集落が立地しているのも興味深い。原料（陶土や薪）の搬入、製品の伴出共に、つい最近まで水運が中心であり（例：西野2002）、堤外地というのは窯業集落の絶好な立地なのであろう。そして、窯業集落だけでなく、伝統的手工業集落にはそうした堤外地に好んで立地している場合が他にもある。その一つがキムランなどに見られた養蚕業である。これは養蚕業

に必要な桑の栽培に堤外地が適していること（安藤編1975）が関係していよう。こうした産業は堤外地の有利性を利用しているわけであるから、輪中型堤防形成がこうした手工業集落の立地を限定したり、あるいはその專業度を強めさせた可能性とてあろう。輪中型堤防形成により本格化する堤内地と堤外地の地形的格差はそこに立地する集落の性格も変えていったと考えられる。今後のヴェトナム史研究で注意すべき課題である。

#### 注釈

（1）輪中は閉鎖型（懸け廻し式）堤防に囲まれた地理空間、社会を意味するもので、堤防自体の用語としてはふさわしくない。本論では、一定の囲い込まれた空間を創造する閉鎖型（懸け廻し式）堤防を輪中型堤防と仮称しておく。

（2）ヴェトナム人による堤防史研究（例：Phan Khánh ed. 1981、Đỗ Đức Hùng 1997）は堤防建設や治水関連記事を読めるのみで、堤防体系の進化論提示に至っていない。また、陳荊和氏は、後述の『国朝詔令善政卷之七』や『大南会典事例』の記述から鼎耳が、水門を備えた輪中型堤防であると想定している。しかし、これらの記述は陳朝期に活発化した堤防（鼎耳）建設が、黎朝後半期や阮朝期まで、形態や構造を変えずに続いていたという想定に基づいており、堤防進化史的視点からは適切ではない。また、史書の記述から阮朝の河政官自身、陳荊和氏と同様な考えを有していたと伺える。筆者は、鼎耳は、ヴェトナム人研究者が訳すように、鼎や鍋の耳の形をしたものと考え、それは馬蹄形輪中に他ならないと考える。

（3）中沢（1997）による田地名比定では、かなりの小穀村の公田が現タンコック集落の北東にある堤外地に位置している。堤外地での稲作は、雨期の大増水により基本的に乾期しか不可能であるから、十月稲の公田としては存在が不可能である。筆者は、こうした公田は、地簿編纂時には堤内地に位置しており、その後河道変化に伴う堤防移動が、堤外地になった結果と考える。

（4）タンコック社とその北側に百穀、富穀、小穀、安邏、務本各社、各村の公田が分布する状況（Fig. 231）は何を意味しているのだろうか？筆者は、堤防建設を負担し、それに伴う低域での新田地造成と新田分給に参加した集落を表すと考え。上述の集落は全て、ナムディン川沿いとその西側の後背湿地を多く抱える集落だからである。

（5）頻繁なる破堤水害を受ける越後や福井の低地では土地の割替え制が発達し、特に、越後平野の割替え制は村請け型の開拓地域に集中している（桜井1987a）。パッコック周辺やキムランなどの公田化問題も同ような文脈で考察されるべきであろう。

（6）東アジア、東南アジア史からの比較検討も必要であろう。行論で再三言及したように、紅河平原の堤防形成における現象は日本の濃尾平野などの輪中地帯の堤防形成史に同様な並行現象を見ることが多い。しかも、輪中型堤防が本格的に形成され始めるのが両地域共に17世紀であることを考慮すると、単なる並行進化の結果なのか？と疑問さえ感じてしまう。中国という当時の先進地域からの技術移転を通じた並行現象ではないかといふかってしまう。中国の長江中・下流域では、宋代には輪中型堤防と考えられるものが出現し、その後、連綿と発展している（長江流域規画弁公室長江水利史編集組1992）。珠江下流域でも明代には輪中型堤（堤圈）が盛んに建設されている（王2002）。西日本の山口県などを中心に残る唐樋（水門）は、干拓時に潮水侵入を防ぎ、干拓地内からの排水を行うために17世紀建設されたものが多く、中国からの技術導入といわれている。今後、水門にとどまらず、築堤や水路掘削等の土木技術史での比較研究を日・中・越で行ってみる必要もあろう。

(7) 『大越史記全書本紀』洪徳15年（1484年）「定築田界蓄水令...繼今某処該内有破決防提、秋田淹浸、勢可蓄水以作夏田。承憲二司責令府県州河提勸農等官、合於潦水稍退之時、預為小民救飢之計、相視地勢、隨其便宜、督責鄉民、培築田界、要令蓄水以作夏田」という記事を、桜井（1989）は、堤防決壊により雨期作田が冠水した場合に、田畦を高め洪水を残し乾期作田の用水にまわすと訳し、それらから、当時、大堤防列や輪中があったことの根拠に挙げている。大堤防列に関しては筆者は否定しないが、輪中存在の理由に挙げることに關しては懐疑的である。なぜなら、輪中が有れば、水門を開けない限り、輪中内に降雨や洪水水が溜まることになり乾期作の水利用には困らないであろう。むしろ、この記事は、逆に当時の堤防は馬蹄形輪中のような非閉塞型の輪中で、田界を作るなどして、水溜まりを作らねば、乾期に堤防の非閉塞部分から水が流失していたことを示すのではないだろうか。



## 第17章 おわりに：紅河平原とメコン・ドンナイ川平原と周辺域の地域形成について

### A 通時代的全体比較

最後に、これまでの論述を総括し、両地域の比較を念頭において論述の締めくくりとしたい。

紅河平原域の場合、第3章、第7章で述べたように、旧石器からホアビニアン時代及び前期新石器時代には、ホアビン山塊やバクソン山塊の山裾域、あるいは平原域の辺縁部が居住域になっており、後期新石器時代、特にフングエン段階以降は、平野部で遺跡数や居住範囲も増加・増大し、複数時期の文化層が重なる居住遺跡や重層マウンド遺跡なども出現するようになる。物質文化的内容から判断すると、前期新石器時代後半期（ゴーチュン遺跡など）と後期新石器時代前半（マドン・ホアロック期）の内容にはかなり違いがあり、大幅な文化変容を想定しないと説明できないと思われる。よそからの文化移入によるものか、あるいは在地文化の担い手集団の内在的発展をベースにしたものかといった疑問に対する回答は慎重を要するが、第2章のマドン・ホアロック期の編年議論で言及したように中国嶺南地域との物質文化的つながりを見過ごすわけにはいかない。同時期あるいはやや先行する時代に、台湾海峡を越えてオーストロネシア語族が中国大陆から台湾へ植民を行った説（Bellwood 1989, 1997）も提出されており、傾聴の要がある。ただし、従来からの文化（埋葬など）も継続しているものがあり、筆者は文化移入か内在的発展かといった単純な解釈は無理と考えている。

メコン・ドンナイ平原域では、第6章、第8章で明らかにしたように、確実な旧石器時代の遺跡の存在については、疑問符が残り、他大陸部東南アジアで確認されているホアビニアン・インダストリーの遺跡、さらには北部の前期新石器時代に並行する遺跡も確認されていない。これは調査密度や精度にも起因していようが、前期新石器並行の遺跡がないことは明らかな北部との違いである。そして、フングエン段階とほぼ並行する新石器時代以降、居住遺跡や重層マウンド遺跡が出現する。これは、北部ヴェトナムを除く大陸部東南アジア他地域（例えばタイ）と同様な文化変化の傾向を示している。当地域の新石器文化の出現は、自律的内在的発展より、完成されたものがよそから導入されるという文化移入による説明を積極的に評価した方がよいのであろう。ここにオーストロ・アジア系言語の人間集団の植民説が登場する余地があるわけである（Bellwood 1989, Higham 1996, 西村1996）。

いずれにしても紅河平原とメコン・ドンナイ川平原両地域で、紀元前2500-2000年前後頃に大きな文化変容が訪れている。ほぼ同時期の島嶼部へのオーストロネシア語族の植民説（Bellwood 1985）とともに、東南アジア史における最初の大変革期と考えられる。

さて、北部の前期新石器時代（フングエン期以降）と南部の新石器時代以降に、遺跡数の増加が顕著となる。農耕適地での遺跡形成、遺跡重層マウンド遺跡の成立、土器の器種分化、稲穀殻資料出土や籾殻を混ぜた土器の出現などを根拠に、当該期において本格的農耕社会が成立したと考えたい（第9章、参照、Bui P.D. et al. 1997, Nishimura & Nguyen K.D. 2002）。ただ、当時の農耕の具体的内容については、今後詳細な研究を進める必要があるが、遺跡立地から考えた場合に、水稻耕作に適したとこ

ろに立地している場合もあれば、水稻耕作には不適で、焼き畑作や畑作適地に立地している場合もある（第9章）。立地に応じて、水稻耕作と陸稲作の両方を行っていたというのが筆者のシナリオである。

ところで、新石器時代以降の遺跡分布変遷には差異を読みとることができる。

筆者の遺跡統計データ（西村・西野2003、Nishimura n.d.）をもとに、時期区分を以下のように統一して、時期別の遺跡数を統計に表してみた。

新石器時代＝紅河平原では後期新石器時代（マードン・ホアロック、フングエン期）、

メコン・ドンナイ平原では新石器時代

青銅器時代＝紅河平原ではドンダウ・ゴームン期、メコン・ドンナイ平原では青銅器時代

鉄器時代＝紅河平原ではドンソン時代、メコン・ドンナイ平原では鉄器時代（ゾンフェット期を含む）

初期歴史時代＝紅河平原では紀元1-10世紀、メコン・ドンナイ平原ではオケオ文化

Table 13 北部と南部の遺跡数変化				
	新石器時代	青銅器時代	鉄器時代	初期歴史時代
紅河平原	145	61	246	228
メコン・ドンナイ平原	142	16	32	209

両地域とも新石器時代から青銅器時代にかけて遺跡数が激減しているが、減り方としては南部の方が激しい。ただし共通するのは、青銅器時代の集落が水際、つまり水上交通の要所に立地を移し、平原と周辺にはない金属資源の入手を計っていることである。

北部では、青銅器時代と鉄器時代を通じて、下流域への漸次的居住域拡大や遺跡増加が明確に確認されるのに、南部では遺跡数増加が微弱ながら確認できるのみである。ホーチミン市南端のカンゾー地域やブンタウ市沖のマングローブ地帯のような特殊環境での遺跡形成を除いて、居住域拡大は明瞭には認められない。これは、北部が作付け選択などの農耕技術の向上を行い、低地開拓を可能としたのに対し、南部ではそうした水稻農耕による低地開拓や、そのための農耕技術革新のベクトルが弱かったことを意味している。より粗放的な農耕であったのかもしれない。

北部では初期歴史時代（紀元後1世紀以降）になると平原部低域での居住域のさらなる拡大、あるいは高密度化が漢墓系資料などから確認される。南部では初期歴史時代（オケオ文化期）以降、メコンデルタの低域などで、遺跡の爆発的増加が認められる。ただし、これを農耕などの生業技術の進歩による開拓域の前進などと説明することはできない。なぜなら新石器時代以降、すでに居住・開発が行われていた環境であるからだ。両地域とも、南海貿易の活発化による交易中継地の必要性などに刺激されて、形成された遺跡が多いと判断する。この時期の文化的内容の解釈については後述する。

両地域の差で問題となるのは、10世紀以降の違いである。北部は10世紀以降も海岸部を中心に開拓を行い、海岸線形成に応じた開墾を現在まで続け、水稻農業をベースにした人口稠密地帯を作り上げてきた。しかし、南部ではオケオ文化以後の遺跡はないわけではないが、散在するにしか確認できず、オケオ文化期に比べ明らかに減少すると考えられる。つまりポスト・アンコール時代以降の遺跡が非常に少ない（例：Vuong T.H. et al.1996）。ポストアンコール、アンコール時代を担ったクメール人も当該域では、大規模な遺跡をさほど残してはおらず、クメール帝国にとっては当該域は辺境であり、居住人口もさほど多くなかったと類推される。

この現象には、新たな研究・議論を設定しなくてはならないので深入りはしないが、一つ明確に言えることは、南部の低地社会が、北部ほど水稻耕作を集約化し、農業地として積極的な土地利用を行ってこなかったことである。つい最近まで、メコンデルタには広大な浮き稲栽培域や未開墾のドンタップムオイ地域ウーミンの森が広がっていたことは、北部のような開墾努力や水利条件の人工改変など稲の集約化生産へ向けた投資が無かったことを意味している。これは、後の紅河平原を中心とする北部平原域の輪中化（第16章）と、それに準じるものが全く発達しなかった南部という違いにも端的に象徴されている。

## B 定住性と居住構造をめぐる検討

本論文は、第7章以降で居住に関するテーマを多く扱ったが、その基本には定住性や居住構造をめぐる問題が大きく関係している。すでに、アンソン遺跡ならびに南部先史時代の土器編年で検証したように、先史時代重層マウンド遺跡などでは居住活動が連続していることが理解できる。特にアンソンでは、土器の微細な型式が、構成層単位で徐々に変化する様子が確認され、連続的居住に伴うものと確定できる。当遺跡は約1000年間の居住期間が想定され、他マウンド遺跡も数百年間の居住期間が確認できる。こうした理解は、紅河平原域の後期新石器時代以降の居住遺跡にもあてはまろう。ドンダウ遺跡ではフングエンからドンソン期までの連続居住が確認され、その期間は1500年以上はあると見積もられる。従って、北部・南部ともに新石器時代（北部では後期新石器時代）以降には、数百年間あるいは1000年程度の連続居住（定住）が可能であったと理解できる。

また、南部の場合も先史時代にすでに、人間の生活環境としては決してふさわしくないマングローブ地帯や低湿地帯での長期安定居住を行っていたことが、ドンタップムオイ地域やカンゾー地域の遺跡などから明らかとなった。こうした低湿地での居住は、現在の開発あるいは森林伐採が進んだ時代においても決して好まれている生活環境ではない。しかし、当時の人間には生活環境のマイナス面（低湿なこと、マラリアなどの風土病に感染しやすいこと、真水を得にくいことなど）を克服させるほどの、その立地にこだわる文化的・経済的ベクトルがあったと理解せざるをえない。それは、水上交通での利点を居住選地に優先させる考えと言い換えてもよいだろう。

バッコックやキムランでの調査研究（第13、14章）は、集落の出現からその形成過程、そして現在に到るまでを検証するものである。バッコックでは、少なくとも陳朝期以降の連続的安定的居住、さらには17世紀以降の居住域拡大も確認された。キムランでは北属時代末（8-9世紀）以降の連続居住、また15世紀に、おそらく洪水等に起因する分村や一時的居住退行現象があるものの、再び16-17世紀

の連続的居住が続き、それ以降は、より高レベルの居住面で現在に繋がる居住が行われたと結論するに到っている。

ただし、解釈の可能性として留保しなくてはならないのは、先史時代の遺跡形成パターンで、季節的移住あるいは周回的な居住（例えば雨季・乾季での村替え、山と平野間での村替えなど）を繰り返したとしても、同様な考古学的結果が予想されることである。例えば、ホアビンアン期の洞穴居住は厚い文化層堆積と多くの遺物集積を残しているが、これを連続的安定的居住の結果と捉える人はいないであろう。

もちろんこの疑問はそうと認定できる居住痕跡を確認することによって、肯定的立証はできても、そうでないとする否定的立証は非常に難しい。ただし、紅河平原域を例にとった場合、フート省やヴィンフック省、ハタイ省などでは、時代を下るに従って、山裾から平野への進出居住が明らかである。また、平野において連続する複数時期の居住活動が確認できる遺跡が多いことも明らかとなっている。山側と平野側を分けた場合に、後者に居住・土地利用の比重が置かれていることが明らかであり、平野部に居住の重心をおいた居住形態と結論をくだしても差しつかえあるまい。もちろん山裾や山間部に一時的居住拠点（出作り小屋的など）はあってもおかしくはないが、果たして現在の考古学的認識レベルでは現れていないのではないかと想像する。

歴史時代に入ると、紅河平原の場合、バクコックやキムランが決して特異な位置の集落ではないことを考慮するなら、500年以上、場合によっては1000年以上の長い居住史を持つ集落は決して例外的な存在ではなく、むしろかなり普遍的であると考えた方がよい。そして、両集落共に、残された文書や文字資料、伝説、史跡などに、その連続的居住史が十分対応することを見いだすことが可能である。極論すれば、現集落の居住者のなかには、安定居住開始期からの子孫が厳然として存在する可能性が高い。つまり、10世代はおろか20世代をまたぐ長期間の定住が行われているのである。

ではこうした強度の定住性は、ヴェトナムにおいて紅河平原などの平野部においてのみ、見られる現象なのであろうか？これはキン族と同様、水稻耕作民であるホアビン省のムオン族居住地帯のことを参照するとよい。ホアビン省は省全域にムオン族の居住地区があるが、たいがい集落は山と平地の接点域に疎らに家が建てられていることが多い。そして、集落の近く、特に裏手の山などに彼らの墓地が作られている。筆者の調査事例、ホアビン省Tân Lạc（タンラック）県Đông Báy（ドンバイ）では、集落の裏山に広大な墓地空間が広がり、出土遺物などから陳朝期から現代まで墓地が存続していることが確認できる。また、墓制（配石墓、立石墓）自体も、陳朝期から現在にいたるまで、変化しながらも継続したものであることが理解できる。もちろん、現集落民にも移住を繰り返したような伝承はなく、ムオン族も強度な定住性が確立されていることが理解できる。これはかなり長期間の集団墓地形成などが確認できる西北部ヴェトナムの山間部タイ族においても同じでようだ。従って、民族や居住立地に定住性が左右されるわけではないことが結論付けられる。

むしろ、ここで考えないといけないのは集落あるいは居住の形態であろう。紅河平原の場合、水田を海と見立てた場合に、各集落がまるで島のように分布し、その中に密度の高い居住を行っていることが理解できる。先程述べてきた紅河平原先史時代の居住遺跡も、遺物の分布範囲が限定されるわりには文化層が厚いものが多いことを考えると、先史時代の居住も居住密度は比較的高く、長期安定居住が主流であったと考えたい。こうした密度の高い形態は山間部には先史時代から現在に到るまでは

とんどみられず、紅河平原などの地域的特徴として捉えてよい。

メコン・ドンナイ平原の場合、重層マウンド遺跡や長期間居住が確実な遺跡が多く分布する先史時代においては紅河平原と同様な居住形態を示していると判断される。ただし、川岸や汽水域などでの水上杭上住居居住が同時に発達していることや、新石器時代においては、環状（土塁）集落に代表されるように、丘陵地帯において集住密度の高い長期安定居住を行った大型居住遺跡が形成されていることなどが、紅河平原との違いになるようだ。

しかし、現在のメコン・ドンナイ平原は紅河平原のような稠密な居住を行ってはいない。留意しなくてはならないのは、当該域での主たる居住者が現在はキン族であるが、17世紀以前にはキン族ではなくクメール族などの非キン族と考えられ、単純な比較はできないことである。しかし、キン族、クメール族共に現在のメコン・ドンナイ平原の農村域では、稠密居住を行っていないのは確かである。従って、先史時代から現在に到るまでに、居住形態に関する基本的方向転換が行われていると考えざるをえない。稠密居住から疎らな居住へ変化した歴史を説明するには、先史時代とクメール時代をつなぐ、紀元1世紀頃以降から7-8世紀頃まで続いたオケオ文化（扶南の考古学的文化）時代の集落構成やそのパターンを議論しなくてはならない。

ただ、それにふさわしい研究がまだ蓄積されておらず、ここでは多少の例を引きながら、見通しを述べるに留めたい。カントー省のニョンタイン遺跡の場合、低湿地に盛り土などによる造成を行い、水上高床居住を広範囲の面積で行っていることが確認できる（Nishimura et al. 2006）。ただし、地点単位での居住期間はさほど長くなく、せいぜい100-200年間程度のような。ドンタップ省のゴータップ遺跡も、盛り土による居住面造成が確認される。しかも、その遺跡範囲は数haに及ぶ大規模なものである。ゴータップの場合、その範囲内に大型宗教建築が群をなすように存在することが確認されており、当時の地域的中心（都市か？）であろうと思える。その一方で、ロンアン省のビンター遺跡群のように、大型宗教建築遺跡群はあるものの、居住遺跡としての痕跡が非常に疎ら、あるいは稀薄な遺跡もある。また、宗教建築自体は、高みに確認されるものの、居住文化層自体は確認できない場合も多い。該期においては基本的に、宗教建築はその地域における高みに立地し、周囲に居住地帯が分布するという構造で、遺跡を捉えていいのであろう。しかし、先史時代のように重層マウンド遺跡の形成はほぼみられないし、長期間同所で居住を繰り返している遺跡も非常に少なそうである。おそらく、ニョンタインやゴータップなどは希にみる都市的遺跡であるが、その他の居住遺跡は非常に疎らな居住を行っていたのではないかと想像される。従って、メコン・ドンナイ平原では、先史時代において限定された面積に密度の高い居住を繰り返していたが、紀元1000年紀以降は、より大規模な広がりをもつ居住あるいは面的に疎な居住形態による集落が形成されていた可能性を想定しておく必要がある。当然、現在の居住形態はオケオ文化以降の居住形態に近いものである。

### C 寡資源地帯としての平原部

第7、8、10章で論じたように、平原部は石や金属資源のない寡資源地帯である。この付帯条件が、過去において集落形成パターンも左右する大きな文化変動を起こす主因となっている。おそらくこれは紅河平原、メコン・ドンナイ平原に限らず他東南アジア大陸部や世界の沖積平野に共通している可

能性があるのではないだろうか。揚子江下流域の良渚文化から馬橋文化への変動（中村1996）などは、この視点で考えてみる必要を感じる。

この平原部の寡資源性については、現在の経済活動をみてもよく理解できることである。量の多寡は無視して、品目で考えた場合、山間部から入手される資源・製品には以下のようなものがある。

タケノコ、獣肉、蜂蜜、木材、竹、薪や木炭、金属資源、石炭、石灰石などの各種石

このなかで金属資源がその価値の高いものであったことは言を待たないであろう。

逆に海岸を含む平原から供給できる資源・原料あるいはそれをもとにして生産・供給されているものは以下のようなものがある。

塩、干し魚、い草、ガラス、レンガ、カオリン、陶磁器

品目は意外に少なく、上述以外は他所より原料をもってきて加工しないと供給できないものばかりである（例：金属器）。

食料に関しては、塩や干し魚以外で、生産の集約性による量の多寡（米はその典型例）はあれど、入手可能品目に平原部と山地部の違いを感じさせるものはない。せいぜい、若干の森林産物（獣肉、タケノコ、蜂蜜）入手において違いがある程度だが、これとて、過去の平原部に森林が豊かな時代（例：李朝期に王は像狩りのため平原部に出かけている）があったことを想定すれば、問題ではない。従って、食糧以外の資源の入手可能性が大きな意味を持っていると考えられる。また、山間部に比べ生態的多様性が小さい平原部は、農業を含めた生業活動が集約化し、生産を高めていく方向が、生態的付帯条件から考えれば合理的といえる。もちろん、これには、災害等により極度の生産不振に陥る危険性が伴う。歴史時代、北部平原部にしばしば見られ飢饉はその結果であることが大きい。近年では、日本軍の強制栽培などにより引き起こされた1945年飢饉が、特に平野部において甚大な被害となったことがそれを象徴している。

平野部から山間部へもたらされる資源で、ガラスと陶磁器に関しては、考古資料でしばしば確認できるものである。特に陶磁器は山間部の古墓から多く出土している。胎土と燃料さえ準備できれば生産できる土器や陶磁器類は、平野が主体的に生産し供給できる数少ない重要かつ需要の高いものであることが理解できる。南部のマウンド遺跡における土器集中生産は、こうした地理的生態的背景を反映していると考えられる。現在、カンボジア南部での盛んな土器生産もこの脈絡で理解してみる必要があるだろう。また、塩も考古学的に注目すべきものである。紅河平原では、その具体状況をまだ指摘できないが、第11章で論じたように、メコン・ドンナイ平原の海岸部での特定器種の集中生産（ゾンカーヴォ、ゾンフェット、ザックヌイなど）は土器製塩の可能性を暗示していると考えている。

青銅器も、山岳域の墓葬からしばしば出土する副葬品に含まれている。第15章で述べたように、ムオン族で使用習慣が続いた銅鼓は、少なくとも歴史時代においては平野部での製作と判断されるし、現山間民族の伝統楽器である銅鑼も平野部での生産（西村2002b）のようだ。当然平野部での青銅器

生産の場合、外部からの資源供給を安定させ、集約的生産や高度な生産技術、あるいは製品の需要が見込めるある程度の市場などといった条件が揃わないと、その製品や製品の流通が優位な立場になることはないであろう。北部ヴェトナムの平原部の場合、武器や仏具に青銅製品を多く使う伝統が、高度な青銅器生産を集約化、活発化させてきたようである。現在でも原料を輸入してでも生産を行う体制が存続を許され、伝統的青銅器鑄造村落として多く残っている。また、寺鐘などの場合、大きさや意匠・モチーフを、注文者の意をくみ取って生産する必要があることも、専業生産者の存在を可能にする条件である。陶磁器の場合、山間部集団の好みを反映して製作している例はまれにしか確認されていないが、銅鼓に関しては、第15章で述べたように、歴史時代の銅鼓は山間部集団を利用者であることを理解して（その程度は場合により異なろうが）、平野部集団が製作している可能性が極めて高く、山地集団と平野集団の関係を象徴するユニークな器物である。

#### D 政治的結合と平原部の文化的均質性

第15章の銅鼓分布研究で述べたように、ドンソン時代までの紅河平原は、文化的に同質的な空間ではない。ドンソン時代後半において、紅河本流からドゥオン川あるいはそれ以南の居住稀薄地帯を分岐線（ドゥオン川ータイビン川と紅河本流に挟まれる区間）として、南と北では銅鼓に対する文化的処遇の差をうかがい知ることができる。既に述べたように、それはタイ系とヴェト・ムオン系という言葉民族的集団差を表している可能性がある。ドンソン文化はキン族の祖先的文化というアプリアリな思いこみは禁物である。

そして、漢文化の本格的かつ均質的な入植・侵入（紀元1世紀以降）により、紅河平原域内の文化的均質性が高められたようだ。これは域内のどこでも確認される磚室墓とその副葬品から判断することができる。ただし、これは社会の上層・支配層の動きであり、それら以外の人々がどのような行動をとったかは、資料不足から未だ明らかにできない。

さらに、磚室墓群は、第7章でも論じたように山間地域では全く報告されておらず、漢文化が侵入できない強烈な異文化空間が成立していたようだ。おそらく中国の政権側の実効力が及ばない地域であったことは間違いなく、起義・独立運動の際の重要な基盤になっている（李賁、呉権、丁部領など：西村2004a）。ドンソン時代以降も銅鼓利用の文化がホアビン省やフート省などのムオン族に保存されたと考えるなら、オーストロアジア語族の1グループであるヴェト-ムオン族の分化は、漢化の受容・非受容が一つの起点になっていることは間違いない。これは起源を同じくする集団が山間民と平野民として、文化適応を行ったと言い換えてもよい。

ただし、課題として、両地域共に鉄器時代から初期歴史時代の移行過程をより鮮明化する必要がある。北部でのドンソン文化と中国化あるいは秦・南越・前漢諸王朝との関係、南部での鉄器時代後半からオケオ文化への変容の実像などが今後の研究課題である。

メコン平原とその周辺の場合、鉄器時代、あるいは次続するGiồng Phệt（ゾンフェット）期段階では、甕棺葬や伸展葬土坑墓などの墓制の地域的違いに代表されるように、地域性を解消するような文化段階には至ってないようだ。後続するオケオ文化以降に初めて、水柱瓶などに代表される地域性の

薄い土器アセンブリッジ、インド系宗教のレンガ建築基壇遺跡が均等に出現してくるようである。

また、オケオ文化の遺跡は、第8章で論じたように山間部に非常に少ない。近年Lam Dong（ラムドン）省Cat Tien（カッティエン）遺跡群（Bui C.H.2004）が、オケオ文化の大遺跡として話題となっているが、ここはドンナイ川上流域にあるかなり規模の大きい盆地に位置しており、山間部・丘陵地帯の遺跡としては認識できない。南部においても、山間部にはインド系宗教や物質文化を受容しなかった集団が、居住領域を構成し、平野部との棲み分けが生じていたと思われる。

紅河平原域、メコン・ドンナイ川流域ともに、平原部低域も政治支配域として認識した国家形成あるいは国家支配原理の出現が、平原域の地域性を薄められるという方向に働いているようだ。当然、外来文物のヴァリエーションや量的増加が示すように、外部との交流、交易の活発化がその背景にはある。この活発化を引き起こしたものは、一つには、北部の場合、漢代の中国からの移住者の増加、南部では、インド系移民の存在があると考えられる。北部での磚室墓やその物質文化に代表される中国系文物の出現、南部におけるインド系宗教のための宗教建築やそれにまつわる物質文化は、前後の文化の内容差を考えれば、単に在地の人間が外来文化を自律的に受容したレヴェルのものではないことが明らかである。両地域ともに、中国化、インド化を、その後長期間にわたって経験する地域であり、先進の文物、思想、制度導入が社会の新たな構造変化をもたらしているはずだ。当然、新参した集団には平原部低域は人口の稀薄で開発しやすい環境に見えたであろうし、在来集団にとっても従来の枠をはみ出した活動が容易であったはずだ。従って、低地での本格的な遺跡形成、つまり居住域化が、人口増加や集落間の活発な交流をもたらし、低地社会の形成、ひいては平原域のなかでの文化的均質性を作り出したと考える。北部における磚室墓やその副葬品、南部における宗教建築や水柱瓶を中心とする精製土器群などに地域色が豊かでないことが、そのことを雄弁に物語っている。それ以前の社会はあくまでも河川の水系を軸にした空間を重視した社会であったと思われる。

北部の平原部において政治権力が編み出した水田支配・分与システムは、米を主作物とし、その生産集約化へ進むことを路線化し、平野部全体で稠密な人口居住を可能とし、ひいてはその政治体維持に大きな役割を果たしている。北部ヴェトナムの各長期王朝が紅河平原を中国の中原のように位置づけ、政治中心地を寡資源地域の真ん中、つまりハノイにおき（西村2004a）、水稻耕作の集約生産のための諸政策を進めたことは、政治的中心を支える稠密な人間集団を作り出すものとして、それなりの意味のあったことなのである。そのように考えれば、紅河平原のような大規模な水稻耕作地適地がほとんどない雲南・広西・海南島が中国に服属するなか、ヴェトナムのみが度重なる中国の侵略を退け、独立を維持できた理由が見えてくる。

南部のオケオ文化の場合、低湿地も含めた低地で、集落数を膨大に増やしている背景には、水稻耕作による食糧確保が基盤になっていることは間違いない。しかし、その後の集落が連続しないことは、北部のように、政治権力が土地の支配・分与を重視していなかったことに起因する可能性がある。第8章で述べたように、水稻耕作といっても、浮きイネ栽培や作付け選択の発達していない粗放的なものではなかったのだろうか。つまり、土地や農業以外の別のもの（例：人間）を支配下におく政治システムだったのではないだろうか。これはオケオ文化の主たる担い手であった国家“扶南”の性格を考える上で興味深い現象である。言い換えれば、低湿地を含む低地居住の進展は、その土地の農業開発ではなく、交通や交易拠点の確保など別の目的であった可能性が高い。そのように考えれば、交易



国家として発展した扶南時代の集落があえて低湿地や低地での居住にこだわり、扶南後の遺跡が非常に少ないかを理解できる。

上記の違いはヴェトナムの北部と南部に生まれた政治権力の基本的構造差であろう。

## 本論作成にあたってお世話になった方々へ

日越合同考古学調査隊に参加をさせていただき、1990年10月21日に初めてヴェトナムの土を踏んだ。そして、1994年8月27日から現在にいたるまで、この国に腰を落ち着けて研究をしている。訪れるまでは東南アジアの一角を占めつつも、実態的イメージを持つことが難しく、ベトナム（抗米）戦争とドイモイ政策といったありきたりのイメージしか持つことができなかった。そのような国でいきなり2ヶ月間に及ぶゲアン省ランヴァック遺跡での発掘は、この国、民族、文化、土地を理解する上でまたとない貴重な導入となってくれた。当時、東南アジア考古学を専門としようと思ったものの、具体的にフィールドを選定しているわけではなかった私にとって、この経験は強烈であった。紆余曲折はあったが最終的に、私をヴェトナム考古学に釘付けにしてくれた大きな原体験である。初めて訪れたヴェトナムで、初めて考古学調査の一翼を担わせて頂き、初めて東南アジアの考古学者と共同研究した経験は、その後の研究人生の基本的方向付けを行ったようだ。当時、今では古めかしく聞こえる”西側諸国”に門戸を開いて3年強ほどしかたっていないヴェトナムにおいて、考古学院と考古学者は、その当時の社会状況から考えると、私たち日本人研究者に極めて開放的だったことが、その後のヴェトナム長期生活で理解することができた。この時の人間関係は途絶えることなく、現在まで私の重要な友人・同友関係として続いており、私のヴェトナムでの大きな研究基盤のみならず人生の基盤の一つを形づくっている。具体的にはヴェトナム文化交流研究センター長（当時）のPhan Huy Lê教授、ヴェトナム考古学院前院長Ha Văn Tấn教授、現副院長Hà Văn Phụng氏、Tống Trung Tín副教授、Nguyễn Giang Hải氏にはヴェトナムでの研究生活において、様々なご協力、教示、支援をいただいた。それから、Long An省博物館、Đồng Nai省博物館、Bắc Ninh省博物館、Nam Định省博物館にも、長期間調査のための支援、便宜供与をしていただいた。幾度となく調査を同行したPhạm Minh Huyền副教授、Hán Văn Khán副教授、Nguyễn Kim Dung氏、Lê Thị Liên氏、Bùi Minh Trí氏からは、様々なことを学ばせていただいた。特に、Phạm Minh Huyền副教授には、調査研究のみならず、ヴェトナムの生活・文化のいろいろなことについて、助けていただき、教えていただき、議論の相手にもなっていただいた。また、その広範な博識でもって、遺跡や調査現場で私にいろいろなことを教えてくれた故Trần Quốc Vương教授にも、感謝をこめた哀悼の気持ちを捧げたい。さらに、幾度となく調査を同行しているTrịnh Hoàng Hiệp君には、博士論文完成を我が身のように心配してもらい、感謝に堪えない。

それから、自身のふるさとの歴史を明らかにするために、町人学者として研究をつづけるNguyễn Việt Hồng氏をはじめとするキムラン歴史研究グループの翁の方々には、記して感謝申し上げたい。研究とは、自弁で自発的にやるものだという学問本来の姿を学ばせていただいた。第14章は、キムラン歴史研究グループとの調査成果を大いに反映している。

さて、本論は、私が東南アジア考古学の世界に生きる上で、強力なアクセルを踏ませてくれた3人の先生への具体的卒論のつもりである。極めて個人的な事象なので文章にするのははばかりだが、動機あつての研究であろうから叙述しておきたい。

当時、東京大学考古学研究室で石器時代を中心とした先史考古学を教えておられた藤本強教授がSiberian Mousterian :from outsider's viewという論考を準備しておられたときである。授業でその内容に触れられ、outsider's viewという言葉を使った理由をおっしゃられた。その軽妙な使い方に感心して「僕

も使おう」と軽口をたたいた時に、先生はすかさず「おまえはInsider's viewじゃないとだめだ」とおっしゃられた。その言葉に妙に自分が納得したのをよく覚えている。

ランヴァック遺跡調査のため、ハノイに入りランヴァック遺跡調査に行く直前に調査隊で会食をしている時に、当時東京大学考古学研究室で助手をしておられた今村啓爾現教授が「東南アジアは編年や年代観がC14年代頼りであてにならない」と僕に言われた。日頃から先生がおっしゃっていたことであったが、ヴェトナム考古学を目の前にしての言葉は妙に重く、この問題を解決しないといつれ自分の学問的将来はないなと感じた。人間は勝手なもので、C14年代に関して、私は限定的かつ批判的利用者となり、特に欧米のC14年代に依存した編年方法論批判の急先鋒になりつつある（Nishimura 2002a, 2003a, 2005a）。

さて本論の内容であるが、私がここ10年間主なフィールドとしてきた紅河平原とメコン平原並びにその東接するサイゴン・ドンナイ河流域の考古学的諸事象を対象としている。なぜ平原域かと問われれば、現在両地域がヴェトナムの二大中心地（ハノイとサイゴン）の位置するところであり、歴史時代にあつては様々な国家興亡の舞台となり、現在に至っている。かつて、桜井由躬雄先生は、紅河平原域（桜井先生は紅河デルタと呼ぶ）の漢代並行期から陳朝期に至るまでの居住域の拡大現象と稲作農耕と土地利用に関連づけて、その歴史的变化を見事に描き出した。もちろんその議論には考古学のデータもふんだんに応用されている。読後の感想は考古学者がすべきことを歴史学者がしているという感であった。その逆に挑んでみたいと思った。1995年の12月のクリスマスの頃、ホーチミン市社会科学学院のゲストハウスで桜井由躬雄先生と偶然宿を一緒にすることになった。当時、地域研究という私には新鮮に聞こえた学問に邁進しておられた桜井先生の語る村落研究は、具体的内容がまだよく呑み込めなかったが、とても魅力的に聞こえた。そして、酒もなくならんとする頃に先生はご自分が組織されているナムディン省バクコック村の農村調査計画で考古学担当として、掘ってみたいかとおっしゃった。また、たたみかけるように「フングエンやゴームンだとか細分されたつまらん専門家などいてもしょうがないだろう」とおっしゃられた。この言葉が具体的には私をヴェトナム考古学のまっただ中にはめ込んだといっても過言ではない。この挑発的お誘いがなければ、現在の自分はなかったといってもよい。本論でも、8、13、16章は、先生の先行研究がなければ存在しなかった研究である。

1996年以降、私自身自分の研究計画として紅河平原・メコン平原とその周辺域で具体的に調査活動を始めたが、この3人の先生方の研究・言葉がいつも頭のどこかにあったことは間違いない。

その後、自分で調査研究活動を始めて、いくつかの悩みにぶつかったし、また自分にまだ考古学を遂行するだけの基礎や力が欠けていることにも色々な局面で気づいた。特に、東南アジア考古学は学問の基礎体力自身ができていない。重厚な日本考古学と比べれば、非力さは見て明らかである。そう思った思いの中、日本考古学がここまで発達するにあたって日本の考古学者は何を考え、どういった調査・研究を編み出してきたのかを知りたいと思った。幾人かの大先学の著作に触れるうち森浩一先生のご著作が、自分の心の琴線に最も響いた。先生が理想とされてきた”遺跡研究”が考古学の究極の目的であり、遺物研究もその中に位置づけなければ単なる古物の研究に終わってしまうという考えは、僕の終生の目標になりそうだ。本論でも遺跡の調査・研究で考えたことを、かなり議論の中心に据えているつもりである。

それから、東南アジアの各研究者との交流も、私の学問形成の上で非常に重要であるが、なかでも

特に影響を受けた方おひとりについて記しておきたい。私にとって、最初に深い関係を持たせて頂いた東南アジア人研究者はシルパコーン大学の故スリン・プーカジョン教授であった。当時、ホアビニアン研究に邁進しようとしていた私に先生は快く自分の資料分析の機会を与えてくださり、さらには自分の調査に参加するよう進めてくださった。先生の南タイでの民族考古学研究と発掘調査は、東南アジアの民族形成史を考える上でも興味深いもので、私も一時研究域を変えようか真剣に迷った時がある。特にSakai洞穴の調査時に、「Nishimura! 面倒をみてやるから、ここで、民族考古学の研究をしないか?」と言われた時には、その意味の大きさに深く感謝すると共に、たじろいでしまった。もし、あの時「はい!」と返事をしていたなら、その後の私の研究者生活はようになっていたのであろうか想像がつかない。結局、ホアビニアン研究とはやや遠のいてしまった自分であるが、あのころの興奮や発憤した気持ちは、私にとっての精神的財産であるし、学問形成においてスリン先生の人格・学問・思考が、大きく影響していることは間違いない。先生は2004年に肝炎のため志半ばにして他界されたが、私は先生の意志の一部を継承しているつもりである。

また、自然地理学の春山成子氏、ヴェトナム史の桃木至朗氏、中国古代研究の吉開将人氏などから、新しい視点、異なる学問的方法論や考えを吸収できたことも、本研究展開上の大事な機動力になっている。記して感謝する次第である。

それから、妻の西野範子にも深謝の気持ちを表したい。同業の身でありながら、子育てと私の論文作成を優先してくれた。もしそうでなければ、まだコンピューターと格闘していたのではないかと思いますと空恐ろしい。これからは、もっと良い夫でありたいと思う次第である。最後に、最良の教育の機会を授けてくれた両親に深謝の気持ちを捧げたい。

なお、第6章、11章、13章はトヨタ財団の研究助成、第5章、12章、13章は文部科学省科学研究費、第15章の一部は高梨財団の研究助成にもとづく研究成果を基礎としている。

## 参考文献

(日本語・中国語)

アバディ・モーリス 民族学協会調査部訳

(1944) 『東京高地の未開民』 東京：三省堂

網野善彦

(2001) 『日本中世都市の世界』 ちくま学芸文庫

安藤万寿男編

(1975) 『輪中-その展開と構造』 古今書院

安藤万寿男

(1988) 『輪中-その形成と推移』 大明堂

石橋新次

(1997) 「土器焼成に関する二・三の予察（前編）」 『みずほ』 第23号:52-67

井関弘太郎

(1972) 『三角州』 現代地理学シリーズ2、朝倉書店

伊原弘

(1993) 『中国人の都市と空間』 原書房

今村啓爾

(1973) 「古式銅鼓の変遷と起源」 『考古学雑誌』 59-3 : 35-62

(1987) 「まとめと今後の問題点」 『東南アジア考古学会報』 7号 : 18-20

(1982) 「バンチェン文化の古さについて」 『東京大学文学部考古学研究室紀要』 第1号: 215-234.

(1992) 「ヘーガーI式銅鼓における2つの系統」 『東京大学文学部考古学研究室紀要』 第11号 : 109-124

(1997) 「東南アジアにおける銅鼓研究の役割」 『考古学雑誌』 82-4 : 93-108

今村啓爾・量 博満

(1990) 「ヴェトナムを訪ねて（Ⅱ）」 『東南アジア考古学会会報』 第9号:61

上原真人

(1997) 『瓦を読む』 講談社

宇野公一郎

(1999) 「ムオン・ドン系の譜ベトナム北部のムオン族の領主家の家譜の分析-」 『東京女子大学紀要論集』 49-2 : 137-198

王双懷

(2002) 『華南農業地理研究』 中華書局

大西和彦

(2001) 「ベトナムの龍」 『アジア遊学特集ドラゴン・ナーガ・龍』 第28号:38-41

岡村秀典

(1984) 「後漢鏡の型式と編年」 『史林』 67-5: 1-42

夏雲輝

(2005) 「試論文山馬銅鼓的幾個特点」 文山壮族苗族自治州文化局『声震神州』 雲南人民出版社:268-272

柏原孝俊

(1997) 「弥生時代前期の土器づくり-一の口遺跡出土の焼土塊をめぐって-」 『みずほ』 :42-51

川村佳男

(2001) 「四川盆地における銅戈の変遷」 『東南アジア考古学』 第21号: 160-188

広東省博物館

(1982) 「広東省始興晋-唐墓発掘報告」 『考古学集刊』 2: 113-133

(1983) 「広東曲江南華寺古墓発掘簡報」 『考古』 7期: 601-609

広東省文物管理委員会、華南師範学院歴史系

(1961) 「広東英徳、連陽南斉和隋唐古墓の発掘」 『考古』 3期:139-141

広東省文物管理委員会、汕頭地区文化局、揭陽県博物館

(1984) 「広東揭陽東晋、南北朝、唐墓の発掘簡報」 『考古』 10期:895-903

広東省文物考古研究所、珠海市博物館編著

(2004) 『珠海宝鏡湾-海島型史前文化遺址発掘報告』 科学出版社、北京

菊地陽子編

(1997) 『百穀社版圖』 ベトナム村落研究会

北村和宏

(1998) 「愛知県の治水・利水遺跡について」 『治水・利水遺跡を考える: 人は水とどのようにつきあってきたか』 (第1分冊 資料編): 436-464、東日本埋蔵文化財研究会

紀仲慶

(1979) 「揚州古城変遷初探」 『文物』 9号 北京:日本語訳文『中国江南の都城遺跡』 (1985) 同朋社所収: 135-150

栗島義明

(2000) 「いわゆるグオム技法について: ベトナム北部旧石器時代の剥片石器群」 『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』 東京堂出版: 1009-1034

高漢銘

(1988) 『簡明古錢辞典』 江蘇古籍出版

広州市文物管理委員会、広州市博物館

(1981) 『広州漢墓』 文物出版社

広西壮族自治区博物館

(1988) 『貴県羅泊湾漢墓』 文物出版社

広西壮族自治区文物工作隊、興安県博物館

(1998) 「広西興安県秦城遺址七里墟王城坪城址の勘探与発掘」 『考古』 11期:34-46

広西壮族自治区文物工作隊、那坡県博物館

(2003) 「広西那坡県感駄岩遺址発掘簡報」 『考古』 10:35-56

河野泰之、柳沢雅之

(1996) 「ナムディン輪中の水利」 『百穀社通信』 第7号: 1-27

胡守為

(1999) 『嶺南古史』 嶺南文庫、広東人民出版社

後藤均平

(1968) 「漢代九真郡の窯址」 『集刊東洋学』 20:1-20

(1975) 『ベトナム救国抗争史ベトナム・中国・日本』 新人物往来社

湖南省博物館

(1984) 「長沙樹木嶺戦国墓阿弥嶺西漢墓」 『考古』 9:790-797

桜井由躬雄

(1979) 「雒田問題の整理」 『東南アジア研究』 17巻1号: 3-58

(1980) 「10世紀紅河デルタ開拓私論」 『東南アジア研究』 17巻4号: 597-632

(1981) 「李朝期(1010-1225) 紅河デルタ開拓試論-デルタ開拓における農学的適応の終末-」 『東南アジア研究』 18巻2号: 271-314

(1987a) 『ヴェトナム村落の形成-村落共有田=コンディエン制の史的展開』 創文社

(1987b) 「ヴェトナム紅河デルタの開拓史」 『稲のアジア史』 2: 235-276

(1989) 「陳朝期紅河デルタ開拓試論: 1.西沱濫原の開拓」 『東南アジア研究』 27巻3号:275-297

(1995a) 「ベトナム紅河デルタ村落研究報告-東南アジア地域辺境としての人口過密地帯」 『百穀社通信』 第1号、ベトナム村落研究会

(1995b) 「陳朝期ベトナムにおける紅河デルタの開拓-新デルタ感潮帯の開拓-」 『東南アジア世界の歴史的位相』 山川出版:21-45

(1998) 『重修欽定百穀社史註』 (バックコック調査隊内配布資料)

(2000) 「紅河デルタにおける地域性の形成」 坪内良博編著『地域形成の論理』 京都大学学術出版: 263-300

佐藤甚次郎、佐々木史郎、大羅陽一

(1987) 「荒川流域における水塚」 『歴史地理学紀要 29: 治水・利水の歴史地理』 : 127-148

嶋尾稔

(2000) 「19世紀-20世紀初頭北部ヴェトナムにおける族結合再編」 『[血縁]の再構築-東アジアにおける父系

出自と同姓結合』風郷社：213-254

(2003)「紅河デルタ沿海部開拓史研究の概観」春山成子編『紅河デルタの環境変動と環境評価』文部科学省科学研究費成果報告：171-188

徐恒淋

(1963)「広東英徳浣鎮南朝隋唐墓発掘」『考古』9期:486-492

蒋廷瑜

(1994)「嶺南出土石戈探微」Ancient Cultures of South China and Neighbouring regions:essays in Honor of Professor Cheng Te-K'un on the occasion of the sixtieth anniversary of his academic career. Center for Chinese archaeology and art, ACS, The Chinese University of Hong Cong:229-238

曾祥旺

(1998)「深圳竜崗荔枝園村旧石器地点試掘簡報」『南方文物』第3期：8-15

田中耕作

(1991)「村尻遺跡出土の「ねかせ」状態の焼粘土塊について-村尻遺跡発掘出土遺物の紹介 その3」『北越考古学』第4号：51-60

谷豊信

(1992)「仏教と蓮華紋瓦当」『アジアから見た日本』：245-270、角川出版

(1999)「中国古代の紀年磚：唐末までの銘文と出土地の考察」『東京国立博物館紀要』第34号：174-271

俵寛司

(1995)「古式銅鼓の編年と分布」『日本中国考古学会会報』第5号：70-106

中国珪酸盐学会編

(1982)『中国陶瓷史』文物出版社、北京

長江流域規画弁公室長江水利史編集組

(1992)『長江水利史』鎬木孝治訳、古今書院

陳荊和

(1988)「「鼎耳」小考」『創大アジア研究』9：241-255

寺沢薫

(1992)「銅鐸埋納論（上）」『古代学研究』44-5：14-29

(1992)「銅鐸埋納論（下）」『古代学研究』44-6：20-34

東京大学埋蔵文化財調査室

(1998)『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（I）』東京大学埋蔵文化財調査室

鄧聡、王韻璋

(1992)「大湾文化試論」『南中国及隣近地区古文化研究：慶祝鄭德坤教授從事學術活動60週年論文集』香港中文大学、香港



東南アジア考古学会編

(1994) 『東南アジア・南中国貝塚遺跡データ集』 東南アジア考古学会、東京

鳥居龍蔵

(1923) 「我が国の銅鐸は何民族が残したものか」 『人類学雑誌』 :38-4

中沢正樹

(1997) 「百穀社地簿にみる處の位置関係とその比定」 『百穀社通信』 第7号 : 1-51

永積洋子

(2001) 『朱印船』、吉川弘文館

中村慎一

(1996) 「良渚文化の滅亡と「越」的世界の形成」 『講座 文明と環境』 第5巻 : 181-192

西野範子

(1997) 『北部デルタにおけるフーラン窯業村の位置づけ』 東京外国語大学提出卒業論文

(2001) 『陳朝期ナムディン省出土碗皿の製作技法による分類』 2000年度金沢大学大学院提出修士論文

(2002) 「ヴェトナムにおける陶工と行商人の移動-フーラン村を事例として」 『旅の文化研究所研究報告』 11

巻 : 111-124

(2004) 「17世紀バッチャンに嫁いだ日本人女性について」 『東南アジア埋蔵文化財保護通信』 第7・8号、東南アジア埋蔵文化財保護基金

(2005) 「フーラン村における窯業の生産・流通システムの変遷-1930年代から2003年まで-」 『ベトナムの社会と文化』 第5号:3-53

(2006) 「ヴェトナム陶磁の製作技術的視点からの分析」 東南アジア考古学会大会 7月1日発表原稿

西野範子、チン・ホアン・ヒエップ、西村昌也

(2006) 「Xom B地点の試掘」 『百穀社通信』 第12号:43-47

西村昌也

(1992) 「最近のホアビニアン研究における成果と問題」 『東南アジア考古学会会報』 第12号:17-37

(1993) 「ヴェトナム・タイの貝塚遺跡」 『東南アジア考古学会会報』 13:25-50

(1994) 「東南アジア大陸部の貝塚遺跡をめぐる生業史上の問題-タイ・北部ヴェトナムの事例を中心に-」 『東南アジア考古学』 第14号 : 58-100

(1996) 「東南アジア的世界成立のプロローグ : 紀元前2000年前後の大陸部東南アジアの変動」 『文明と環境 : 文明の危機』 朝倉書店 : 127-145

(1997a) 「Bach Cocと周辺域のジェネラル・サーベイ結果初歩報告」 『百穀社通信』 第7号、ベトナム村落研究会

(1997b) 「メコンデルタの初期国家”扶南”出現前後の近年の考古学的研究」 『月刊埋蔵文化財情報 最新海外考古学事情 2 アジア編』 : 122-128

(2001) 「紅河デルタの城郭遺跡Lung Khe城をめぐる新認識と問題」 『東南アジア歴史と文化』 30: 46-71

(2002a) 「近年のヴェトナム陶磁研究：考古学からの新展開」『陶説』557:20-29

(2002b) 「ヴェトナム銅鼓の生産と使用をめぐるいくつかの問題:考古学的視点を中心にして」『ベトナムの社会と文化』第3号:377-388

(2003a) 「近年の考古学データから見たルンケー城と紅河平原」東方学会シンポジウム「ヴェトナムの中国化・脱中国化」発表原稿、東京、2003年5月16日

(2003b) 「紅河平原の遺跡分布パターンの変化に関する考察」『ヴェトナム紅河平原遺跡データ集』文部省科学研究費成果報告書:267-309

(2004a) 「北属南進の歴史：圧倒的な存在としての中国・フロンティアとしての中・南部」今井昭夫・岩井美佐紀編『ヴェトナムを知る60章』青木書店：28-32

(2004b) 「北部ヴェトナム紅河平原における輪中提形成に関する試論」東南アジア史学会関西例会発表要旨（2004年9月19日）

(2006a) 「キムラン研究覚え書き1：川べりの手工業專業集落の歴史地理的概要」『ヴェトナムの社会と文化』第5号:80-93

(2006b) 「Phu Coc地点の試掘概報、ならびにバクコックと周辺の居住史に関する覚え書き」『百穀社通信』第12号:30-41

西村昌也、グエン・ヴァン・ハオ

(2005) 「バイノイ磚室墓の緊急発掘」『東南アジア考古学』第25号：149-176

西村昌也、西野範子

(2003) 『紅河平原遺跡データ集』文部科学省科学研究費報告書

(2004) 『東南アジア埋蔵文化財通信』第7・8号、東南アジア埋蔵文化財保護基金

(2005) 「ヴェトナム施釉陶器の技術・形態的視点からの分類と編年—10世紀から20世紀の碗皿資料を中心として」『上智アジア学』第23号:81-122

西村昌也、西野範子、チン・ホアン・ヒエップ、グエン・クオック・ホイ

(1998) 「1997年度夏期考古学調査の概報」『百穀社通信』第8号:159-180、ヴェトナム村落研究会

西村昌也、西野範子、平野裕子、チン・ホアン・ヒエップ、向井互

(2000) 「1998年度と1999年度の夏期考古学調査の概報」『百穀社通信』第10号:95-145、ヴェトナム村落研究会

新田栄治

(2000) 「メコン流域発見のヘーガー式銅鼓」新田編『メコン流域の文明化に関する考古学的研究』平成9平成11年度科学研究費補助金研究成果報告書

麦英豪、林華、王文建

(1996) 「代表的遺物の紹介」『中国・南越王の至宝 前漢時代 広州の王朝文化』毎日新聞社:114-126

春山成子

(1994) 「ソンコイ川下流デルタの地形環境」『国際関係学研究』21:1-13

(1999) 「ハンドオーガーを用いた簡易ボーリング調査と空中写真を用いた微地形分類図について」『百穀社通信』第9号 ヴェトナム村落研究会: 207-219

(2002) 「北部ヴェトナムの海岸浸食」『地理』47-4:98-105

春山成子、平出重信、堀和明、田辺晋、斉藤文樹、Le Quoc Doanh

(2000) 『電気探査を用いたデルタ微地形の環境復元ー北部ヴェトナムの紅河デルタを事例地域としてー』  
Advanced Research Institute for Science and Engineering, Waseda university. Technical report No.2000-15

ファン・ダイ・ゾアン

(2002) 「十七世紀のあるベトナム-日本人家族について-バッチャンの『阮氏家譜』を通じて-」『近世日越交流史-日本町・陶磁器』:89-93 (大西和彦訳)

北京大学歴史系考古専門14C実験室、中国社会科学院考古学研究所14C実験室 (1982)

「石灰岩地区炭-14様品年代的可靠性与甌皮岩等遺址の年代問題」『考古学報』2:243-250

万輔彬

(2003) 「越南東山銅鼓再認論与銅鼓分類新説」『広西民族学院学報』:25-6

三上次男編

(1984) 『世界陶磁全集 16 南海編』小学館

宮本一夫、俵寛司

(2002) 「ベトナム漢墓ヤンセ資料の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』97:123-192

桃木至朗

(1991) 「書評論文「ヴェトナム村落の形成-村落共有田=コンディエン制の史的展開」『東南アジア-歴史と文化』20: 77-100

(1992) 「10-15世紀ベトナム国家の「南」と「西」」『東洋史研究』51-3:158-191

(1994) 「ヴィエトナム前近代史の時代区分」『古代文化』46-11: 48-54

(1998) 「近世北部ベトナムの風水と高駢の地理書」『百穀社通信』第8号:104-122、ヴェトナム村落研究会

森浩一

(1981) 「銅鐸を歩く-銅鐸の性格とその問題点-」『考古学ノート: 失われた古代への旅』社会思想社:23-39

森浩一、石野博信

(1994) 『対論 銅鐸』学生社

守屋 美都雄

(1968) 「曹魏爵制に関する二三の考察」『中国古代の家族と国家』東洋史研究叢刊之十九、東洋史研究会:214-249

八尾隆生

(1998) 「黎末北部ヴェトナム村落社会の一断面-ナムディン省-旧百穀社の事例-」『南方文化』第25号:113-132

(2002)「黎朝前期紅河デルタにおける屯田所政策」『アジア・アフリカ言語文化研究』第64号:173-191

山形真理子

(1997)「林邑建国期の考古学的様相-チャキウ遺跡の中国系遺物の問題を中心に-」『東南アジア考古学』第17号:167-184

(1999)「ベトナム中部の国家形成期遺跡」『季刊考古学』66号:66-70

山形真理子、桃木至朗

(2001)「林邑と環王」『岩波講座 東南アジア史1 原史東南アジア世界』:227-254、岩波書店、東京

山本信夫

(2000)『太宰府条坊跡XV-陶磁器分類編-』太宰府市教育委員会

尤振堯

(1985)「秦漢東陽城考古發現与有關問題的探析」『中国考古学会 第五次年会論文集』文物出版社、北京:49-57

楊豪

(1983)「広東市韶関市郊的南朝墓」『考古学集刊』3:154-161

楊少祥

(1985)「試論徐聞、合浦港的興衰」『海交史研究』1期:34-39

横倉雅幸、西江清高、小沢正人

(1990)「所謂「越式鼎」の展開」『考古学雑誌』76-1:66-100

吉開将人

(1992)「「T字環」をめぐる諸問題」『東南アジア考古学会会報』第12号:158-178

(1995)「ドンソン系銅孟の研究」『考古学雑誌』80-3:64-94

(1996)「副葬品が語るもの-東アジア世界のなかの南越文化-」『中国・南越王の至宝 前漢時代広州の王朝文化』毎日新聞社:138-142

(1998a)「銅鼓再編の時代」『東洋文化』78号:199-218

(1998b)「印からみた南越世界-嶺南古璽印考-」『東洋文化研究所紀要』第136冊:89-135

(1999)「銅鼓に見る伝統の諸相-銅鐸との比較の前に-」『季刊考古学』66:40-45

(2000)「百越・南越・越南-南越印と銅鼓伝説(要旨)」『東南アジア考古学』第20号:49-54

(2002)「歴史世界としての嶺南・北部ヴェトナム-その可能性と課題-」『東南アジア歴史と文化』31:79-96

柳州白蓮洞科学博物館、北京自然博物館、広西民族学院歴史系

(1987)「広西柳州白蓮洞石器時代洞窟遺跡発掘報告」『南方民族考古』:143-160

林業強編

(1986)『広東出土晋至唐文物』広東省博物館・香港中文大学博物館

(英語・フランス語・ヴェトナム語)

Abbreviations

<b>BEFEO</b>	<i>Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient</i> Hanoi, (Paris).
<b>BIPPA</b>	<i>Bulletin of Indo Pacific Prehistoric Association</i> . Canberra
<b>JSEAA</b>	<i>Journal of the Southeast Asian Archaeology</i> , Tokyo
<b>KCH</b>	<i>Khảo Cổ Học</i> , Hà Nội
<b>KLS TĐHTHHN</b>	Khoa Lịch Sử Trường Đại Học Tổng Hợp Hà Nội, Hà Nội
<b>MSVDKCHMN</b>	<i>Một Số Vấn Đề Khảo Cổ Học ở Miền Nam Việt Nam</i> . NXBKHXH, Hà Nội
<b>NCLS</b>	<i>Nghiên Cứu Lịch Sử...</i> , Hà Nội
<b>NPHMN</b>	<i>Những Phát Hiện mới về khảo cổ học ở Miền Nam</i> , Hà Nội
<b>NPH năm</b>	<i>Những phát hiện mới về khảo cổ học Việt Nam năm ...</i> , Hà Nội
<b>NXB</b>	Nhà Xuất Bản (Publisher)
<b>NXBKHXH</b>	Nhà Xuất Bản Khoa Học Xã Hội, Hà Nội
<b>SVHTTHN</b>	Sở Văn Hóa và Thông Tin Hà Nội, Hà Nội
<b>TLVKCH</b>	Tư Liệu Viện Khảo Cổ Học
<b>VTTKHXH</b>	Viện Thông Tin Khoa học Xã Hội, Hà Nội
<b>VKHXHVN</b>	Viện Khoa Học Xã Hội Việt Nam, Hà Nội
<b>VKCH</b>	Viện Khảo Cổ Học, Hà Nội
<b>VBTL SVN TBKH</b>	<i>Viện Bảo Tàng Lịch Sử Việt Nam Thông Báo Khoa Học...</i> , Hà Nội

Albrecht, Gerd, Miriam Noel Haidle, Chhor Sivleng, Heang Leang Hong, Heng Sophady, Heng Than, Mao Someaphyvath, Sirik Kada, Som Sophal, Thuy Chanthourn and Vin Laychour

(2000) Circular earthwork Krek 52/62: recent research on the prehistory of Cambodia. *Asian Perspectives* vol.39 no.1-2:20-46.

Anderson D.D.

(1990) *Lang Rongrien Rockshelter: A Pleistocene-early Holocene archaeological site in Krabi, Southwestern Thailand*. *University Museum Monograph* No.71, University of Pennsylvania.

Anderson J.G.

(1939) Archaeological research in the Fai Tsi Long archipelago, Tonkin. *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities* No.11:75-107.

Bellwood Peter

(1989) *Prehistory of the Indo-Malaysian Archipelago*. Academic Press, London.

(1997) *Prehistory of the Indo-Malaysian Archipelago (2nd edition)*. University of Hawaii press, Honolulu.

Bùi Chí Hoàng

(1991) Báo cáo sơ bộ kết quả khai quật địa điểm khảo cổ học Dinh Ông (Tây Ninh). *NPH năm 1990*:106-108.

(2000) Điều tra khai quật các di tích vùng cận biển (Bà Rịa-Vũng Tàu). *KCH số 1*:35-53.

(2004) Khu di tích Phú Chánh (Bình Dương) tư liệu và nhận thức. in Trung tâm nghiên cứu khảo cổ học.

*MSVDKCHMN*:163-197.

Bùi Chí Hoàng, Phạm Đức Mạnh and Phạm Quang Sơn

(1997) Di tích khảo cổ học Suối Linh (Vĩnh Cửu, Đồng Nai). *MSVDKCHMN*:58-134.

Bùi Chí Hoàng, Phạm Quang Sơn and Phạm Đức Mạnh

(1997) Khai quật lần I di tích Bưng Bạc (Bà Rịa-Vũng Tàu). *MSVDKCHMN*:163-197.

Bùi Chí Hoàng and Đào Linh Côn

(2004) Khai quật Cát Tiên-Lâm Đồng. *MSVDKCHMNVN*:319-370.

Bùi Minh Trí

(2001) *Gốm Hợp Lễ trong phức hợp gốm sứ thời Lê*. Luận án tiến sĩ. VKCH.

(2003) Về niên đại và chủ nhân những ngôi mộ đất ở di chỉ chùa Gio (Hà Tây). *NPH năm 2002*:475-477.

(2004) Tản mạn về gốm trong Hoàng thành Thăng Long. *Xưa và nay số 203+204*:32-38.

(n.d.) *Bình rượu Việt Nam*. NXBKHXH, Hà Nội.

Bùi Minh Trí and Kerry Nguyen Long

(2001) *Vietnamese Blue and White Ceramics*. NXBKHXH, Hà Nội.

Bùi Minh Trí and Nguyễn Cao Tân

(1999) Di chỉ cư trú thời sơ sử. Những phát hiện ở Ninh Bình. *NPH năm 1998*:224-225.

Bùi Minh Trí, Nishimura Masanari and Đặng Định Thế.

(2003) Khai quật lần thứ sáu di chỉ gốm sứ Chu Đậu ( Hải Dương). *NPH năm 2002*:378-382.

Bùi Phát Diệm Đào Linh Côn and Vương Thu Hồng

(2001) *Khảo cổ học Long An: những thế kỷ đầu công nguyên*. Sở văn hóa thông tin tỉnh Long An, Long An.

Bùi Phát Diệm, Vương Thu Hồng and Nishimura Masanari

(1997) Research achievements of the archaeology before "Oc Eo Culture" in the lower Vam Co river Basin, southern part of Vietnam. *JSEAA No.17*: 72-78.

Bùi Tuyết Mai ed.

(2001) *Người Mường trên đất tổ Hùng Vương*. NXBKHXH

Bùi Văn Liêm and Hà Văn Phụng

(1988) Di chỉ Phư Lương:qua hai lần khai quật. *KCH* số 4:32-43.

Bùi Văn Liêm and Ngô Sĩ Hồng

(1990) Điều tra khảo cổ học Hà Nam Ninh. *NPH năm 1989*:67-69.

Bùi Văn Liêm, Trần Anh Dũng, Nguyễn Đăng Cường and Vương Thu Hồng

(1996) Điều tra và đào thám sát một số di tích khảo cổ học ở tỉnh Long An. *NPH năm 1995* : 219-220.

Bùi Văn Lợi and Phạm Quốc Quân

(1991) Di chỉ Thành Dền(Hà Nội). *VBTL SVN TBKH 1991* :103-125.

Bùi Văn Lợi and Trịnh Căn

(1993) Mộ gạch cổ Tân Hòa(Hà Tây). *VBTL SVN TBKH 1992* :20-23.

Bùi Văn Tâm

(1998) Những nét tiêu biểu về văn hóa làng Bách Cốc. *Tư liệu kỷ niệm khánh thành đền thờ Thái Phó Bình Quận Công Bùi U Đài*.

Bùi Vinh.

(1982) Cồn Cổ Ngựa (Thanh Hóa) một bước ngoặt trong nhận thức về văn hóa Đa Bút. *KCH* số 1:18-30.

(1984) Nghệ thuật trang trí hoa văn gốm Đền Đồi (Nghệ Tĩnh). *KCH* số 3:31-42.

(1991) The Đa But Culture in the stone age of Vietnam. *BIPPA*. No 10:127-131.

(1994) Niên đại C14 Làng Còng và bước tiến mới trong nhận thức văn hóa Đa Bút. *NPH năm 1993*:61-62.

Bùi Vinh and Nguyễn Cường

(1997) Văn hóa Mai Pha sau khai quật 1996 ở Lạng Sơn. *KCH* số 2:40-54.

Bùi Vinh and Nguyễn Khắc Sửu

(1978) Khai quật Gò Trũng (Thanh Hóa). *NPH năm 1977*:56-59. *VBTL SVN*.

Bùi Vinh and Nguyễn Quang Miên

(2003) Về những kết quả tuổi carbon phóng xạ trong văn hoá Đa Bút được làm gần đây. *NPH năm 2003*:72-75.

Butterfields

(2000) *Treasures from the Hoi An hoard*. 2 vols. Butterfields.

Chanthourn Thuy.

(2002) *Banteay Kou: Memotian circular earthworks*. Royal University of Fine Arts, Phnom Penh.

Chen Wei Chun

(2003) Khai quật di chỉ Ba Vũng- Quảng Ninh thuộc văn hoá Hạ Long. *NPH năm 2003*:122-126.

Chen Wei Chun, Nguyễn Văn Hảo and Nguyễn Mạnh Thắng

(2004) Di chỉ Thạch Lạc (cồn chùa Tăng Phúc)- Hà Tĩnh khai quật lần thứ hai, năm 2002. *NPH năm 2003*:93-97.

Chử Văn Tàn

(1976) Đào khảo cổ Mái đá Thẩm Khương. *KCH* số 17:38-40.

Colani M.

(1931) *Recherches sur le préhistorique Indochinoise. BEFEO* 30:299-422.

(1938) *Découvertes préhistorique dans les Darages de la Baie d'Along*. Institut Indochinois pour L'Etude de L'homme, Hà Nội.

Cuisinier, J.

(1948) *Les Muong-geographie humaine et sosisologie-.Travaux et memoires del' Institut d' Ethnologie*. XLV Paris:Institut de Ethnologie.

Diệp Đình Hoa

(1978) *Về những hiện vật kim loại ở buổi đầu thời đại đồ đồng thau Việt Nam. KCH* số 2:10-20.

(1987) *Nhận xét khảo cổ-dân tộc học về người Thái tư liệu điền dã ở miền tây Nghệ Tĩnh. KCH* số 1 :25-35.

(2003) *Những con đường khám phá*. BTL SVN.

Diệp Đình Hoa and Đậu Xuân Mai

(1976) *Người Tày Hay(Nghệ An và trống đồng. NPH năm 1975 : 247-252.*

Doãn Đình Lâm and Boyd W.E

(2000) *Holocene Coasta Stratigraphy and a Model for the Sedimentary Development of the Hải Phòng area in the red river delta, north Việt Nam. Journal of Geology. Series B* No 15-16/2000:18-28.

(2002) *Tài liệu về đợt hạ thấp mực nước biển trong Holocen giữa-muộn ở vịnh Hạ Long. Địa Chất*. loạt A số 270:1-7.

Dumont Rene

(1995) *La culture du riz dans le delta du Tonkin*. Societe d'edition. Paris. Originally published in 1935 but reprinted in 1995 from Prince of Songkla University, Thailand.

Đào Duy Anh

(1964) *Đất nước Việt Nam qua các đời:nghiên cứu địa lý học lịch sử Việt Nam*. NXBKHXH, Hà Nội.

Đào Linh Côn and Nguyễn Duy Tỳ

(1993) *Địa điểm khảo cổ học Dốc Chùa*. NXBKHXH, Hà Nội.

Đặng Văn Thắng and Vũ Quốc Hiền

(1997) *Excavation at Giong Ca Vo site, Can Gio District, Ho Chi Minh City. JSEAA* No.17: 30-44.

Đặng Văn Thắng, Vũ Quốc Hiền, Nguyễn Thị Hậu, Ngô Thế Phong, Nguyễn Kim Dung and Nguyễn Lân Cường

(1998) *Khảo cổ học tiền sử và sơ sử thành phố Hồ Chí Minh*. NXB Trẻ thành phố Hồ Chí Minh.

Đinh Văn Nhật

(1973a) *Đất Cẩm Khê, căn cứ cuối cùng của Hai Bà Trưng trong cuộc khởi nghĩa Mê Linh năm 40-43. NCLS* số 148:26-33.

(1973b) *Đất Cẩm Khê, căn cứ cuối cùng của Hai Bà Trưng trong cuộc khởi nghĩa Mê Linh năm 40-43. NCLS* số 149:31-40.



- (1977) Huyện Mê Linh về thời Hai Bà Trưng. *NCLS* số 172:24-43.
- Đoàn Nghiên Cứu Khai Quật Thành Cổ Liên Lâu
- (2000) Khai quật khu lò đúc đồng trong thành cổ Liên Lâu (Thuận Thành, Bắc Ninh). *NPH năm 1999*:174-178.
- Đoàn khai quật Cổ Loa
- (2005) Phát hiện khu lò đúc mũi tên đồng ở thành nội Cổ Loa: *KCH* số 2:107-109.
- Đỗ Đức Hưng
- (1997) *Vấn đề trị thủy ở đồng bằng Bắc bộ dưới thời Nguyễn thế kỷ XIX*. NXBKHXH, Hà Nội.
- Đỗ Như Chung
- (2003) *Nghệ thuật trồng đồng Thanh Hóa*, NXBKHXH, Hà Nội.
- Đỗ Thị Hảo ed.
- (1989) *Quê gốm Bát Tràng*. NXB Hà Nội.
- Đỗ Văn Ninh
- (1968) Khai quật hang Soi Nhụ (Quảng Ninh). *NCLS* số 117:57-61.
- (1970a) Khu lò gạch ngói cổ thuộc thế kỷ thứ 7-thứ 10 tại Thuận Thành. Hà Bắc. *KCH* số 6:15-18.
- (1970b) Thành Quên căn cứ của Đỗ Cảnh Thạc, một trong 12 sứ quân hồi thế kỷ X. *NCLS* số 132:91-97.
- (1972) *Tìm lại dấu vết Vân Đồn lịch sử*. Ty Văn hóa thông tin Quảng Ninh.
- (1989) Liên Lâu in Văn Tạo ed. *Đô thị cổ Việt Nam*. Viện Sử Học, Hà Nội:77-91.
- Fontaine, Henri
- (1971) Enquête sur le néolithique du bassin inférieur du Dong-Nai. *Archives géologiques du Viêt-Nam* 14:47-116.
- Fontaine, Henri and G., Delibrias
- (1973) Ancient marine levels of the quaternary in Vietnam. *Journal of the Hong Kong Archaeological Society* :vol.4:29-33.
- Funabiki Ayako
- (2004) *Palaeo-environmental change during the Holocene in the Red River Delta, Northern Vietnam*.  
 東京大学新領域創成学大学院自然環境学専攻2004年度修士論文.
- Glover I.
- (1995) Decorated roof tiles from ancient Simhapura-an early Cham city in Central Vietnam. in Khaisiri Sri-Aroon et al. eds. *Studies and reflections on Asian art history and archaeology: essays in honor of H.S.H. Professor Subhadradis Diskul*, Bangkok.
- Gourou P.
- (1936) *Les paysans du delta Tonkinois: étude de géographie humaine*. Les éditions d'arts et d'histoire. Paris.
- Groslier, Bernard P.
- (1966) *Archaeologia mundi: Indochine*, Geneva.

Grossin

(1926) *Hoa Binh: province de Muong*.

Hà Hữu Nga

(1998) Có một nền văn hoá Soi Nhụ tại khu vực vịnh Hạ Long. *NPH năm 1997*:91-94.

(2001) *Văn hóa Bắc Sơn*. NXBKHXH.

(2005) Báo cáo di chỉ khai quật Bà Vũng (Quảng Ninh) năm 2001. in Nguyễn Khắc Sử ed. *Khảo cổ học vùng duyên hải đông bắc Việt Nam*:158-192.

Hà Hữu Nga and Nguyễn Văn Hào

(2002) *Hạ Long thời tiền sử*. Ban quản lý vịnh Hạ Long, Hạ Long.

Hà Văn Phùng

(1986) Di chỉ Phú Lương (Hà Sơn Bình). *KCH số 2*:27-41.

(1996) *Văn hóa Gò Mun*. NXBKHXH, Hà Nội.

(1998) Di chỉ Thành Dền tư liệu và nhận thức. *KCH số 1*:13-41.

(2001) Di tích Mán Bạc: tư liệu và nhận thức. *KCH số 1*:17-46.

Hà Văn Phùng Bui Thị Thu Phương and Ngo Thị Lan

(1999) Báo cáo khai quật lần thứ nhất di chỉ khảo cổ học Mán Bạc. Tư liệu Viện Khảo cổ học.

Hà Văn Phùng and Nguyễn Duy Tỳ

(1982) Di chỉ khảo cổ học Gò Mun. NXBKHXH, Hà Nội.

Hà Văn Phùng and Trịnh Hoàng Hiệp

(2002) Báo cáo kết quả khai quật di chỉ Đồng Vườn lần thứ nhất (xã Yên Thành, huyện Yên Mô, tỉnh Ninh Bình tháng 7 năm 2002). Tư liệu Viện Khảo cổ học.

Hà Văn Tấn

(1971) Thông báo kết quả khai quật Xóm Rền. *Thông báo khoa học, Trường Đại Học Tổng Hợp*, tập 5:39-53.

(1976) Xưởng làm đồ đá Núi Dầu, Bãi Phôi Phối. *KCH số 17*:51-53.

(1977) Gốm kiểu Hoa Lộc ở một số di chỉ văn hóa Phùng Nguyên. *NPH năm 1977*:121-124.

(1983) Trống đồng Cổ Loa-di chỉ Đình Tràng-văn minh Sông Hồng. in Sở Văn Hóa Thông Tin Hà Nội ed. in *Phát hiện Cổ Loa*:21-39.

(1987) Niên đại C14 của Đồng Chẽ với giai đoạn Gò Bông trong văn hóa Phùng Nguyên. *NPH năm 1986*:181-182.

(1991) Adzes, pottery and language in prehistoric Vietnam. *BIPPA 11*: 353-362.

(1994) Yazang in Viet Nam. *Ancient Cultures of South China and Neighbouring regions. Essays in Honor of Professor Cheng Te-K'un on the Occasion of the Sixtieth Anniversary of His Academic Career*. Center for Chinese Archaeology and Art, ICS, The Chinese University of Hong Kong: 451-454.

(1997) The Hoabinhian and before. *BIPPA 16*:36-41.

(2002) Viên gạch có chữ trong ngôi mộ thời Nam Tề và cuộc khởi nghĩa của Lư Tuấn. *NPH năm 2001*:711-713.

Hà Văn Tấn ed.

(1998) *Khảo cổ học Việt Nam tập I: Thời đại đá Việt Nam*. NXBKHXH, Hà Nội.

(1999) *Khảo cổ học Việt Nam tập II: Thời đại kim khí Việt Nam*. NXBKHXH, Hà Nội.

(2002) *Khảo cổ học Việt Nam tập III: Khảo cổ học lịch sử Việt Nam*. NXBKHXH, Hà Nội.

Hà Văn Tấn, Nguyễn Khắc Sửu and Trình Năng Chung

(1999) *Văn hóa Sơn Vi*. NXBKHXH, Hà Nội.

Hà Văn Tấn, Nguyễn Xuân Mạnh, Bùi Văn Lợi and Chu Ngọc Toàn

(1985) Khai quật lần thứ hai di chỉ Thành Dền (Hà Nội). *NPH năm 1984*:93-95.

Haruyama S, Doãn Đình Lâm and Nguyễn Dịch Dỹ

(2001) On the Pleistocene/ Holocene Boundary and the Holocene Stratigraphy in the Bắc Bộ Plain. *Journal of Geology* Series B No.17-18/2001:1-9.

Haruyama Shigeko, Tanabe Susumu and Lê Quốc Doanh

(2000) *Holocene Sediment of the Southern Delta of the Song Hong*. Technical Report No. 2000-18. Advanced Research Institute For Science and Engineering Waseda University.

Higham Charles. F.W.

(1989) *The archaeology of Mainland Southeast Asia*. Cambridge University Press.

(1996) *The bronze age of Southeast Asia*. Cambridge:Cambridge University Press.

(2002) *Early cultures of Mainland Southeast Asia*. River books, Bangkok.

Higham, C.F.W., R.Bannanurag, B.K. Maloney and B.A. Vincent

(1987) Khok Phanom Di: the results of the 1984-5 excavation. *BIPPA* 7:148-177.

Higham, C.F.W. and Kingam, A.

(1984) *Prehistoric investigations in Northeast Thailand B.A.R.* 231(1-3).

Hoàng Văn Khoán ed.

(2002) *Cổ Loa: trung tâm hội tụ văn minh sông Hồng*. NXB Văn hóa thông tin.

Hoàng Vinh, Nguyễn Văn Huyền and Hà Văn Thăng

(1977) Phát hiện trống đồng Xóm Rậm I (Hà Sơn Bình). *NPH năm 1977*:197-199.

Hoàng Xuân Chinh

(1966a) *Báo cáo khai quật Hang Đang (Cúc Phương, Ninh Bình)*. Tư liệu của VKCH.

(1966b) Hệ thống di chỉ vỏ sò điệp ở Quỳnh Lưu in *Một số báo cáo về khảo cổ học Việt Nam 1966*:37-76.

(1966c) Hệ thống di chỉ vỏ sò điệp ở Hà Tĩnh. in *Một số báo cáo về khảo cổ học Việt Nam 1966*:77-104.

(1968) *Báo cáo khai quật đợt một di chỉ Lũng Hòa*. NXBKHXH, Hà Nội.

(1978) Quan hệ giữa văn hóa Hòa Bình và văn hóa Bắc Sơn. *KCH* số 2: 10-17.

- (2000) *Vĩnh Phúc thời tiền sử và sơ sử. Sơ văn hóa thông tin-thể thao.*
- Hoàng Xuân Chinh ed.
- (1989) *Văn hóa Hòa Bình ở Việt Nam.* NXBKHXH.
- Hoàng Xuân Chinh and Nguyễn Khắc Sử
- (1978) Địa điểm hậu kỳ đá mới Cầu Sắt (Đồng Nai). *KCH* số 4:12-18.
- Hoàng Xuân Chinh and Nguyễn Khắc Sử
- (2005) Báo cáo khai quật di chỉ Cái Bèo, Đảo Cát Bà (Hải Phòng) năm 1973. in Nguyễn Khắc Sử ed. *Khảo cổ học vùng duyên hải đông bắc Việt Nam*:274-340.
- Hori Chihiro and Miyamori Yuko
- (2001) Plant remains detected from pediform pottery (Chac Gom) unearthed from the Xom Dinh location of the Lang Vac sites, Nghe An province. in Imamura K. and Chu V.T. eds. *The lang Vac sites vol.1* :212-214
- Hori Kazuaki, Tanabe Susumu and Saito Yoshiki
- (2003) Sedimentary facies, architecture and evolution of the Song Hong (Red River) Delta, Vietnam. in 春山成子編『紅河デルタの環境変動と環境評価』:63-100.
- Hou Yamei, Richard Potts, Yuan Baoyin, Guo Zhengtang, Alan Deino, Wang Wei, Jennifer Clark, Xie Guangmao and Huang Weiwen
- (2000) Mid-Pleistocene Acheulean-like Stone Technology of the Bose Basin, South China. *Science* 287:1622-1626.
- Imamura, K.
- (1996) *Prehistoric Japan: new perspectives on insular East Asia.* University College London Press.
- Imamura K. and Chu Van Tan eds
- (2004) *The Lang Vac sites vol1: basic report on the Vietnam-Japan joint archaeological research in Nghia Dan District, Nghe An Province, 1990-1991.* The University of Tokyo.
- Janse O.R.T.
- (1947) *Archaeological research in Indo-China. vol.1.* Harvard University Press, Boston.
- (1951) *Archaeological research in Indo-China vol.2.* Harvard University Press. Boston.
- KLS ĐHTHHN (Khoa lịch sử, Đại học tổng hợp Hà Nội)
- (1967) Địa điểm Hang Tầm. In VBTL SVN ed. *Những hiện vật tàng trữ tại Viện bảo tàng lịch sử Việt-Nam về văn hóa Hòa Bình.* VBTL SVN:126-155.
- Lại Văn Tới, Đoàn khai quật Ba Vát, Nguyễn Tấn Nghĩa, Nguyễn Đăng Giới, Nguyễn Thị Lan, Nguyễn Thư Thảo, Cao Thị Thái and Bảo tàng Bến Tre.
- (2005) Đào thám sát di chỉ Giồng Nổi (Bến Tre). *NPH năm 2004*:175-199.
- Lê Mạnh Thát
- (1999) *Lịch sử Phật giáo Việt Nam. Tập 1.* NXB Thuận Hóa, Huế.
- Lê Thế Hoàng

(1999) Vài suy nghĩ về trống đồng Mỹ Khánh (Hải Phòng). *NPH năm 1998*:281-282.

**Lê Thị Liên**

(2006) *Nghệ thuật phát giáo Hindu giáo ở đồng bằng sông Cửu Long trước thế kỷ X*. Nhà xuất bản thế giới.

**Lê Trung**

(1966) Những ngôi mộ táng thời thuộc Hán ở Thiệu Dương. in Nguyễn Văn Nghia ed. *Một số báo cáo về khảo cổ học Việt Nam*. Đội khảo cổ, Bộ Văn hóa:277-328.

**Lê Văn Tự**

(1996) *Đất nông nghiệp Thành phố Hồ Chí Minh*. Nhà xuất bản nông nghiệp.

**Lê Xuân Diễm**

(1966) Báo cáo khai quật mộ quách gỗ ở Ngọc Lặc. in Nguyễn Văn Nghia ed. *Một số báo cáo về khảo cổ học Việt Nam*. Đội khảo cổ, Bộ Văn hóa:249-276.

(1978) Khai quật di tích An Sơn (Long An) . *NPH năm 1978*: 231-233.

(1979) Khai quật An Sơn(Đức Hòa, Long An). *NPHMN* : 51-80.

**Lê Xuân Diễm, Đào Linh Côn and Võ Sĩ Khải**

(1995) *Văn hóa Óc Eo: những khám phá mới*. NXBKHXH, Hà Nội.

**Lê Xuân Diễm and Hoàng Xuân Chinh**

(1983) *Di chỉ khảo cổ học Đồng Đậu*. NXBKHXH, Hà Nội.

**Lê Xuân Diễm and Nguyễn Văn Long**

(1983) *Đàn đá Bình Đa*. NXB Đồng Nai.

**Lê Xuân Diễm, Phạm Quang Sơn and Bùi Chí Hoàng**

(1991) *Khảo cổ Đồng Nai*. NXB Đồng Nai.

**Li Zhen, Y. Saito, E. Matsumoto, Wang Yongji, Tanabe S. and Vu Quang Lan**

(2006) Climate change and human impact on the Song Hong (Red River) Delta, Vietnam, during the Holocene. *Quaternary International* No.144:4-28.

**Lồ Giảng Páo**

(1996) *Trống đồng cổ với các trống tỉnh Hà Giang*. NXB Thế giới.

**Lưu Trần Tiêu and Trịnh Căn**

(1983) Trở lại di chỉ Cái Bèo:kết quả và nhận thức. *VBTLVN TBKH 1983*:14-24.

**Lưu Văn Dư and Nguyễn ĐăngHiệp Phố**

(1998) Đồ gốmđi chỉ Cái Vạn qua tài liệu khai quật lần II , năm 1996. *KCH số 4*:41-51.

**Madrolle C.**

(1937) Le Tonkin ancien. *BEFEO* 37:263-333.

**Malleret,L**

- (1959) *Archéologie du Delta du Mékong*. Tome I , EFEO, Paris.
- (1960) *Archéologie du Delta du Mékong*. Tome II , EFEO, Paris.
- (1963) *Archéologie du Delta du Mékong*. Tome IV, EFEO, Paris
- Maloney B.K.
- (1991) The pollen, pteridophyte spore and microscopic charcoal: conclusions. In Higahm C.F.W. and R.Bannanurag eds. *The excavation of Khok Phanom Di, a prehistoric site in central Thailand vol. II: the biological remains (part I)*. : 91-94.
- Mansuy H.
- (1920) Contribution a l'étude de la Préhistoire de L'Indochine IV. Gisements préhistoriques des environs de Lang Son et de Tuyên-quang, Tonkin. *MSGI* 7-2.
- (1924) Contribution a l'étude de la Préhistoire de L'Indochine IV. Stations préhistoriques dans les cavernes du massif calcaire de Bắc-Son, Tonkin. *MSGI* 11-2.
- (1925) Contribution a l'étude de la Préhistoire de L'Indochine V: nouvelles découvertes dans les cavernes du massif calcaire de Bắc Son, Tonkin. *MSGI* 12-1.
- Mansuy H. and M. Colani.
- (1925) Contribution a l'étude de la Préhistoire de L'Indochine VII. Néolithique inférieur BacSonien et Néolithique supérieur dans le Haut-Tonkin (dernières recherches) avec la Description des crânes du gisement de Lang Cuom. *MSGI* 12-3.
- Maspero H.
- (1910) Le protectorat general d'Annam sous les Lí, les Trần et les Hồ. *BEFEO* 10:539-682.
- (1918) L'expédition de Ma Yuaf. *BEFEO* 18:11-28.
- Matsushima Yoshiaki
- (2004) Giám định vỏ sò và môi trường cổ di chỉ Mán Bạc. *NPH năm 2003*:34-36.
- McNamara K. and Bevan A.
- (1991) *Tektites*. Western Australian Museum.
- Meacham William
- (1995) Middle and Late Neolithic at "Yung Long South". In Yeung Chun-tong and Li Wai-ling Brenda eds. *Conference papers on archaeology in Southeast Asia*. The University Museum and Art Gallery, The University of Hong Kong:445-466.
- Mudar K.
- (1995) Evidence for prehistoric dryland farming in Mainland Southeast Asia: Results of regional survey in Lopburi Province, Thailand. *AP* vol.34-2:157-194.
- Ngô Quang Toàn, Nguyễn Đình Dỹ, Phạm Văn Hùng, Phạm Văn Mẫn ed.
- (2000) *Vỏ phong hóa và trầm tích đệ tứ Việt Nam*. Cục địa chất và khoáng sản Việt Nam Hà Nội.
- Ngô Sĩ Hồng
- (1983) Khai quật Làng Vạc (Nghệ Tĩnh). *KCH* số 2:37-54.
- Ngô Thế Phong and Bùi Phát Diễm

(2000) *Báo cáo khai quật di chỉ Gò Ô Chùa năm 1997 (Hưng Điện A-Vĩnh Hưng-Long An)*. Bảo tàng lịch sử Việt Nam and bảo tàng Long An.

(2001) Khai quật di chỉ Gò Ô Chùa (Long An). *VBTL SVN TBKH năm 2001*: 1-45.

Ngô Thế Phong and Nguyễn Mạnh Thắng

(2002) Kết quả khai quật di chỉ khảo cổ học Đồng Đậu lần thứ 6 (Yên Lạc, Vĩnh Phúc). *VBTL SVN TBKH 2004*:18-61.

Ngô Thế Phong, Vũ Quốc Hiền, Bùi Phát Diệm and Nguyễn Đức Diêng

(1998) Báo cáo sơ bộ khai quật khảo cổ học di chỉ Gò Ô Chùa, xã Hưng Điền A, huyện Vĩnh Hưng, Long An. *NPH năm 1997*: 255-259.

Nguyễn Anh Tuấn

(2001) *Trống đồng vùng đất tổ*. Sở văn hóa thông tin thể thao Phú Thọ.

Nguyễn Chiêu, Hoàng Văn Nhâm, Nguyễn Danh Hạnh và Nguyễn Thương Hiền

(1991) Cát thành Trà Kiệu (Quảng Nam-Đà Nẵng). *NPH năm 1990*:235-236.

Nguyễn Chiêu, Lâm Mỹ Dung and Vũ Thị Ninh

(1991) Đồ gốm trong cuộc khai quật di chỉ Chàm cổ ở Trà Kiệu năm 1990. *KCH số 4*:19-30.

Nguyễn Duy Hình

(1983) Trống bằng đồng. *NPH năm 1982*:174-175.

(1996) Dòng chữ Hán khắc trong lòng trống Cổ Loa I. *NPH năm 1995*:157-158.

(2001) *Trống đồng quốc bảo Việt Nam*. NXBKHXH.

Nguyễn Duy Tỳ

(1985) Khai quật địa điểm Bà Quế (Thuận Hải). *NPH năm 1984*:117-118.

Nguyễn Duy Tỳ and Nguyễn Phương Anh

(1995) *Những hiện vật Văn hóa Óc Eo ở bảo tàng tỉnh Cần Thơ*. Bảo tàng tỉnh Cần Thơ. Cần Thơ.

Nguyễn Đình Chiến

(1999) *Cẩm nang gốm Việt Nam có minh văn thế kỷ XV-XIX*. Viện bảo tàng lịch sử Việt nam.

Nguyễn Đình Thực

(1985) Công trình đào kênh thời Lê Hoàn. Sở văn hoá thông tin Thanh Hóa ed. *Lê Hoàn và 1000 năm: chiến thắng Tống xâm lược (981-1981)*. Sở văn hóa thông tin Thanh Hoá.

Nguyễn Đức Bạch

(1983) Báo cáo sơ bộ về phát hiện nhóm hiện vật ở gò Mả Tre Cổ Loa 1982.

*Phát hiện Cổ Loa 1982*. Sở văn hóa và thông tin Hà Nội, Hà Nội.

Nguyễn Gia Đối

(1986) Khai quật Hang Dơi. *NPH năm 1985*:43-46.

(2001) *Di chỉ mái đá Điều và một số vấn đề thời đại đá ở miền Tây Thanh Hóa*. Luận án Tiến sĩ lịch sử. VKCH, Hà Nội.

Nguyễn Gia Đối and Bùi Vinh

(1988) Hang Dơi, Suy nghĩ thêm về văn hóa Bắc Sơn. *KCH* số 1-2:12-19.

Nguyễn Giang Hải and Trịnh Sinh

(2001) *Thư mục khảo cổ học Việt Nam, tập 2: thời đại kim khí*. NXB Thế Giới.

Nguyễn Hữu Chiếm

(1994) Former and present cropping patterns in the Mekong Delta. *Southeast Asian studies* 4:345-384.

Nguyễn Khắc Sứ

(1983) Sự phát triển kinh tế và tổ chức xã hội của cư dân cổ Cúc Phương. *KCH* số 1:8-21. NXBKHXH, Hà Nội.

Nguyễn Khắc Sứ ed.

(2005) *Khảo cổ học vùng duyên hải đông bắc Việt Nam*. NXBKHXH.

Nguyễn Kim Dung

(1983) Hai hệ thống gốm sớm trong thời đại đá mới Việt Nam. *KCH* số 1:22-35.

(1996) *Công xưởng và kỹ thuật chế tạo đồ trang sức bằng đá thời đại đồng thau ở Việt Nam*. NXBKHXH, Hà Nội.

(2000) Kết quả phân tích niên đại tuyệt đối một số địa điểm khảo cổ học những năm gần đây. *NPH năm 1999*: 343-345.

(2001) Nhận thức mới về khảo cổ học Cát Bà qua hai lần khai quật di chỉ Bãi Bền. *KCH* số 4:3-24.

(2002) Từ kết quả niên đại C14 gần đây ở một số di chỉ khảo cổ học ở Cát Bà đóng góp thêm một vài suy nghĩ về tiền sử đảo Cát Bà. *NPH năm 2001*:184-188.

(2005a) Báo cáo khai quật di chỉ Trảng Kênh (Hải Phòng) năm 1986. Nguyễn Khắc Sứ ed. *Khảo cổ học vùng duyên hải đông bắc Việt Nam*:235-248.

(2005b) Báo cáo khai quật di chỉ Trảng Kênh (Hải Phòng) năm 1996. Nguyễn Khắc Sứ ed. *Khảo cổ học vùng duyên hải đông bắc Việt Nam*:249-273.

(2005c) Báo cáo khai quật di chỉ- xưởng Bãi Bền (Hải Phòng) năm 1999. Nguyễn Khắc Sứ ed. *Khảo cổ học vùng duyên hải đông bắc Việt Nam*:391-419.

(2005d) Báo cáo khai quật di chỉ- xưởng Bãi Bền (Hải Phòng) năm 1999. Nguyễn Khắc Sứ ed. *Khảo cổ học vùng duyên hải đông bắc Việt Nam*:420-448.

Nguyễn Mạnh Lợi, Đỗ Bá Nghiệp and Nguyễn Văn Long

(1978) Khai quật di tích khảo cổ Suối Chồn (Xuân Lộc, Đồng Nai). *NPH năm 1978*:179-195.

Nguyễn Ngọc, Đào Thị Miên and Lê Thị Nghinh

(2002) Góp phần nghiên cứu môi trường tiền sử cánh đồng Châu Can theo tài liệu vi cổ sinh. *KCH* số 2:13-23.

Nguyễn Ngọc Phát and Vũ Đức Thơm

(1999) *Di tích chảo cổ học ở Thái Bình*, Bảo tàng Thái Bình, Thái Bình.

Nguyễn Quang Miên

(2003) Thông báo về kết quả nghiên cứu xác định tuổi mẫu gốm cổ bằng phương pháp carbon phóng xạ. *NPH năm*



2002:56-59.

Nguyễn Quang Miên and Lê Khánh Phồn

(2000) Some results of 14 C Dating in investigation on quaternary geology and geomorphology in Nam Định-Ninh Bình Area, Việt Nam. *Journal of geology*. Series B No 15-16/2000:106-109.

Nguyễn Quang Ngọc

(1993) *Về một số làng buôn ở Đồng bằng Bắc Bộ thế kỷ XV III-XIX*. Hội sử học Việt Nam.

Nguyễn Quốc Hội

(1994) *Kết quả thám sát khảo cổ khu di tích Miếu và Đình Cao Đài, xã Mỹ Thịnh*. Tư liệu Bảo tàng tỉnh Nam Định.

(1999) Phát hiện thêm một số công cụ đá mới sơ kỳ kim khí ở Núi Hổ (Vụ Bản, Nam Định). *NPH năm 1998*: 221-222.

Nguyễn Quốc Hội, Nguyễn Xuân Năm và Trần Đăng Ngọc

(1996) Đào thám sát bãi Hạ Lạn, xã Lộc Vượng, ngoại thành Nam Định. *NPH năm 1995*: 415-416.

Nguyễn Tá Nhí

(1999) Văn bia Đền Sĩ Vương. Bài phát biểu hội thảo khoa học "Văn hóa Luy Lâu và Kinh Dương Vương" Sở văn hóa thông tin tỉnh Bắc Ninh.

Nguyễn Thành Trai

(1985) Góp phần tìm hiểu trống loại II Heger. *VBTL SVN TBKH số 3*: 70-81.

Nguyễn Thị Hậu, Đặng Văn Thắng, Vũ Quốc Hiền và Ngô Thế Phong

(1997) Di chỉ Long Bửu (TP Hồ Chí Minh). *VBTL SVN TBKH 1997*: 67-94.

Nguyễn Thị Mai Hương

(2002) *Kết quả phân tích bào tử phấn hoa di chỉ Đại Trạch (Đình Tổ, Thuận Thành, Bắc Ninh)*. TLVKCH.

Nguyễn Thị Phương Chi

(2002) *Thái ấp-diền trang thời Trần (thế kỷ XIII-XIV)*. NXBKHXH.

Nguyễn Trung Đỗ

(1984) Di tích thành đất hình tròn ở Lộc Ninh (Sông Bé). in Lê Xuân Diệm and Phạm Đức Mạnh ed. *Văn hóa Óc Eo và các văn hóa cổ ở Đồng bằng Cửu Long*:136-141.

(2004) Nhung phat hien moi ve di tich dat dap co hinh tron o Binh Phuoc. *MSVDKCH 2004*:41-58.

Nguyễn Tuấn Lâm

(1992) Vết tích văn hóa Hòa Bình vùng ven biển và hải đảo Đông Bắc Việt Nam. *KCH số 2*:49-55.

Nguyễn Văn Hào

(1979a) Thời đại đá mới vùng Đông Bắc Việt Nam. *KCH số 1*:29-36.

(1979b) Những di chỉ còn diệp của văn hóa Quỳnh Văn- Quanh những cồn Diệp ở Quỳnh Lưu. *KCH số 3*:10-18.

Nguyễn Văn Hào and Nguyễn Khắc Sứ

(1976) Tìm kiếm di tích khảo cổ ven biển Quảng Ninh, Thanh Hóa, Quảng Bình. *KCH số 17*:58-59.

Nguyễn Văn Long

(1981) Khai quật di tích Bình Đa (Đồng Nai). *NPH năm 1980*:126-130.

Nguyễn Việt

(1990) Tàn tích nhuyễn thể trong các di tích tiền sử Việt Nam. *KCH số 1-2*:39-62.

(2001) Cổ môi trường Châu Can: tiếp cận liên ngành. Bài phát biểu trong buổi sinh hoạt khoa học "Cổ môi trường làng cổ và mộ cổ Châu Can".

Nguyễn Xuân Lân

(2000) *Địa chí Vĩnh Phúc (sơ thảo)*. Sở văn hóa thông tin-thể thao Vĩnh Phúc.

Nishimura Masanari

(1998a) Khuôn đúc trống đồng được phát hiện trong lòng Thành cổ Liên Lâu. *KCH số 4*:99-100.

(1998b) Một trung tâm sản xuất gốm sứ sành? tại xã Vạn Ninh, Huyện Hải Ninh (Quảng Ninh). *NPH năm 1997*:561-564.

(2001) Nhận xét mới về niên đại cuối cùng ở thành cổ Luy Lâu Lũng Khê (h. Thuận Thành, t. Bắc Ninh). *NPH năm 2000*:629-632.

(2002a) Chronology of the Neolithic Age in the southern Vietnam. *JSEAA No.22*:25-58.

(2003a) A minor-excavation at Co Son Tu in the upper Vam Co Tay River, Long An, Vietnam. *JSEAA No.23*:113-144.

(2003b) Về hiện vật đá, đồ xương và vỏ nhuyễn thể ở di chỉ Mán Bạc, khai quật lần thứ hai. *NPH năm 2002*:235-240.

(2003c) Vài nhận xét về những hiện tượng khảo cổ học ở di chỉ Đại Trạch, Bắc Ninh. *NPH năm 2002*:226-231.

(2004a) Nhận thức bước đầu về đồ gốm địa điểm Chân Gò Minh Sư (Gò Tháp- Đồng Tháp). *NPH năm 2003*:740-745.

(2004b) Những đặc trưng và phân kỳ giai đoạn đồ gốm di chỉ Nhơn Thành (Cần Thơ). *NPH năm 2003*:793-797.

(2005a) Chronology of the Metal Age in the southern Vietnam. *JSEAA No.25*:105-147.

(2005b) Settlement pattern of the Red River Plain from the late prehistory to the 10th century AD. *BIPPA 25*:99-107.

(2005c) Thành Lũng Khê: nhận xét mới từ những điều tra khảo cổ học. *Một thế kỷ khảo cổ học Việt Nam vol.II NXBKHXH, Hanoi*: 53-71.

(2006) Chronological framework from the Palaeolithic to Iron Age in the Red River Plain and the surrounding. In *Prehistoric Archaeology in South China and Southeast Asia*. (in press)

(n.d.) Basic data collection of the archaeological sites reach of the Eastern lower Mekong and Đồng Nai rivers.

Nishimura Masanari and Bùi Minh Trí

(2004) Excavation of Duong Xa kiln site, Bac Ninh Province, Vietnam. *JSEAA No.24*:91-131.

Nishimura Masanari, Nguyễn Duy Tỳ and Huỳnh Văn Trung

(2006) *Báo cáo khai quật di chỉ Nhơn Thành, Cần Thơ*.

Nishimura Masanari and Momoki Shiro

(2002) Nam Dinh and the Lower Red River Delta in the Ly-Tran Period-Seen from Archaeological and Historical Evidence-. Paper presented at IIAS workshop, Vietnamese peasant's activity, an interaction between culture and nature., 30th

Aug., Leiden.

Nishimura Masanari, Nguyễn Duy Tỳ, Vương Thu Hồng and Bùi Phát Diệm

(1996) Thăm sát Cỏ Sơn Tự (huyện Vĩnh Hưng, tỉnh Long An). *NPH năm 1996* : 245-250.

Nishimura Masanari, Nguyen Duy Ty and Nguyen Xuan Ly

*Excavation of Da Kai site in the upper reach of the Dong Nai River, southern Vietnam.* (in press)

Nishimura Masanari and Nguyen Kim Dung

(2002) Excavation of An Son: a Neolithic mound site in the middle reach of Vam Co Dong River of the southern part of Vietnam. *BIPPA* 22:101-109.

Nishimura Masanari, Nguyễn Văn Hảo, Lê Văn Chiến and Lê Hải Đăng

(2002b) Báo cáo khai quật chũm cháy mộ gạch ở Bãi Nội (Bắc Ninh). *NPH năm 2001* :524-530.

Nishimura Masanari, Nishino Noriko, Trịnh Hoàng Hiệp, Hirano Yuko, Hán Văn Khẩn và Nguyễn Quốc Hội

(1999) Báo cáo tham sát xã Thành Lợi (h.Vụ Bản, t.Nam Định). *NPH năm 1998* : 453-457.

Nishimura Masanari, Nishino Noriko, Mukai Ko, Hán Văn Khẩn và Nguyễn Quốc Hội

(2000) Báo cáo tham sát lần thứ ba tại xã Thành Lợi (h.Vụ Bản, t.Nam Định). *NPH năm 1999*:372-377.

Nishimura Masanari and Nishino Noriko

(2002) Archaeological study of the settlement formation in the Red River Plain: a case of Bách Cốc and the surrounding. Presented at IIAS workshop: Vietnamese peasants' activity, an interaction between culture and nature. IIAS, Leiden University.

(2003) Chronological sequence for late 14th to Early 15th century Vietnamese ceramics from Bãi Hàm Rồng, Kim Lan and Hồ Citadel. *JSEAA* No.23:145-163.

(2004) Báo cáo khai quật chũm cháy lần thứ hai ở di chỉ Bãi Hàm Rồng, Kim Lan (Huyện Kim Lan, Thành Phố Hà Nội).

(n.d.) *Classification and chronology of the glazed and unglazed ceramics of Bach Coc sites group. Manuscript of excavation research from 1997 to 2000.*

Nishimura Masanari, Nishino Noriko, Phạm Minh Huyền and Hán Văn Khẩn

(2002a) Báo cáo khai quật tiếp tại thành cổ Lũng Khê năm 2001. *NPH năm 2001* :545-559.

Nishimura Masanari, Phạm Đức Mạnh, Bùi Phát Diệm and Vương Thu Hồng

(1997) Điều tra khảo cổ học lần thứ nhất ở lưu vực sông Vàm Cỏ (tỉnh Long An). *NPH năm 1996*:668-670.

Nishimura Masanari and Trần Thị Kim Quy

(2005) Những mảnh ngói của di chỉ Bãi Mèn : phân loại và kỹ thuật. Bài trong Hội nghị những phát hiện mới về khảo cổ học ở Việt Nam năm 2005.

Nishimura Masanari and Phạm Minh Huyền

(1998) Những tư liệu khảo cổ mới sau văn hóa Đông Sơn tại huyện Thuận Thành và Gia Lương, tỉnh Bắc Ninh. *NPH năm 1997*:637-641.

(2005) Những hiện tượng khảo cổ học thời kỳ thành Cổ Loa ở di chỉ Bãi Mèn khai quật năm 2002 và 2003. Bài trong Hội

ngiht những phát hiện mới về khảo cổ học ở Việt Nam năm 2005.

Nishimura Masanari, Trịnh Hoàng Hiệp, Tống Trung Tín and Bùi Minh Trí

(2002) Khai quật chũa cháy ở Kim Lan (Hà Nội). *NPH năm 2001* : 393-403.

Nishino Noriko

(2002) Classification and chronological sequence of Tran dynasty ceramics of Vietnam. *JSEAA* No.22: 81-106.

(2003) Gốm sứ Phù Lãng. *NPH năm 2002* :423-426.

Nishino Noriko, Trịnh Hoàng Hiệp and Nishimura Masanari

(2001) Báo cáo thám sát xóm B xã Thành Lợi, huyện Vụ Bản, tỉnh Nam Định. *NPH năm 2000* : 541-548.

Nishino Noriko and Nishimura Masanari

(2001) Niên đại, kỹ thuật và vai trò gốm sứ ở di chỉ Cồn Chè, Cồn Thịnh, huyện Mỹ Lộc, tỉnh Nam Định. *NPH năm 2000*:552-558.

(2003) Nhận xét mới về hành cung ứng phong thuộc thời Lý ở huyện Vụ Bản, tỉnh Nam Định. *NPH năm 2002* : 595-596.

Nitta Eiji

(1991) Archaeological study on the ancient iron-smelting and salt-making industries in the Northeast of Thailand: preliminary report of the excvations of Non Yang and ban Don phlong. *JSEAA* No.11:1-46.

O'Harrow S.

(2001) Người Hán, người Hồ, người Bách Man :tiểu sử Sĩ Nhiếp và khái niệm về xã hội Việt Nam cổ đại (translaed paper). in *Những vấn đề lịch sử Việt Nam*. NXB Trẻ.

Parmentier,H.

(1918) Le tombeau de Nghi-Vê. *BEFEO* 18:1-7.

Phạm Đức Mạnh

(1975) *Cum di chỉ đồ đá Hương Sơn*. Luận văn tốt nghiệp khoa sử, ngành khảo cổ học trường Đại học tổng hợp Hà Nội.

(1996) *Di tích khảo cổ học Bưng Bạc(Bà Rịa- Vũng Tàu)*.NXBKHXH, Hà Nội. Summary of this book was printed in English in *JSEAA* No.17: Special issues for Vietnamese Archaeology.

(1998) Trống đồng Phú Chánh. *MSVDKCHVN*: 159-172. NXBKHXH Hà Nội.

Phạm Đức Mạnh, Trần Thị Diễm, Nguyễn Tuyết Hồng, Trần Minh Trí and Nguyễn Hồng An.

(1997) Điều tra và khai quật lần thứ hai di chỉ Bình Đa (Đồng Nai). *MSVDKCHMN* :135-150.

Phạm Huy Thông, Hoàng Xuân Chinh and Nguyễn Khắc Sử

(1990) *Hang Con Moong*. Vườn quốc gia Cúc Phương and Viện Khảo Cổ Học, Hà nội.

Phạm Huy Thông, Phạm Minh Huyền, Nguyễn Văn Hảo and Lại Văn Tới

(1990) *Dong Son drums in Viet Nam*. NXBKHXH.

Phạm Lý Hương

(1973) Đào khảo cổ di chỉ Gò Mả Đống. *NPH năm 1972*:150-163.

Phạm Lý Hương

(1999) Nhóm di tích Mả Đồng-Gò Con Lợn. *Khảo cổ học Việt Nam. Tập II: Thời đại kim khí Việt Nam*. NXBKHXH:63-95.

Phạm Lý Hương, Nguyễn Quang Miên.

(2001) Các kết quả xác định niên đại bằng phương pháp Radio Carbon ở Việt Nam và một số nhận xét. *KCH* số 3:81-101.

Phạm Minh Huyền

(1970) *Báo cáo khai quật địa điểm Đường Cờ.VKCH*.

(1983) Nghiên cứu nhóm hiện vật Cỗ Loa bằng phương pháp quang phổ. In *Phát Hiện Cỗ Loa 1982*. Sở văn hóa thông tin Hà Nội, Hà Nội:100-105.

(1994) Các loại hình địa phương và các giai đoạn phát triển của văn hóa Đông Sơn. in Hà Văn Tấn ed. *Văn hóa Đông Sơn ở Việt Nam*:257-283.

(1995) "Qua" và "Chương" bằng đá trong các di tích thời đại đồng thau ở miền Bắc Việt Nam. *VBTL SVN TBKH* 1995:22-38.

(1996) *Văn hóa Đông Sơn tính thống nhất và đa dạng*. NXBKHXH, Hà Nội.

(1997) Một trung tâm văn minh cổ đại đầu nguồn sông Hồng ở đất Việt. *KCH* số 1:38-63.

(1999) Nhận diện văn hóa Đông Đậu ở di chỉ khảo cổ Đại Trạch. *KCH* số 4:19-41.

(2001) Trống đồng ở Bảo tàng tỉnh Hà Giang. *KCH* số 4:25-45.

Phạm Minh Huyền, Nguyễn Văn Huyền and Trịnh Sinh

(1987) *Trống Đông Sơn*. NXBKHXH, Hà Nội.

Phạm Minh Huyền and Nishimura Masanari

(1998) Điều tra khảo cổ học hai huyện Thuận Thành và Gia Lương, tỉnh Bắc Ninh. *NPH năm 1997*:135-137.

(2002) Excavation of Dai Trach: a Bronze Age settlement site in the Red River Plain. Paper presented at the 16th Congress of the Indo-Pacific Prehistoric Association. 8th Sep, Taipei.

Phạm Minh Huyền, Phạm Thị Ninh, Lại Văn Tới, Hà Mạnh Thắng, Hoàng Văn Khoán and Nishimura Masanari

(2004) Khai quật Cỗ Loa. *NPH năm 2003*:175-178.

Phạm Quang Sơn

(1978) Khai quật khảo cổ học di tích Rạch Núi (Cần Giuộc-Long An). *NPHMN*:97-130.

Phạm Quang Sơn and Phạm Hùng

(1980) Điều tra khảo cổ học ở Huyện Đức Huệ (Long An). *NPH năm 1979*: 66-68.

Phạm Quốc Quân

(1985) Suy nghĩ về những chiếc trống loại II Heger. *VBTL SVN TBKH* số 3:82-90.

(1993) Mộ Mương Kim Truy (Hòa Bình). *VBTL SVN TBKH* 1992: 60-87.

Phạm Quốc Quân and Trịnh Căn

(1982) Khu mộ thuyền Xuân La (Hà Sơn Bình). *KCH* số 4:36-50.

Phạm Thị Ninh

(2000) Văn hóa Bàu Tró. NXBKHXH, Hà Nội.

Phạm Thị Ninh, Trịnh Sinh, Trịnh Hoàng Hiệp

(2005) Báo cáo khai quật di chỉ Đâu Rằm (Quảng Ninh) năm 1977. Nguyễn Khắc Sử ed. *Khảo cổ học vùng duyên hải đông bắc Việt Nam*:106-157.

Phạm Văn Kinh and Lưu Trần Tiêu

(1969) *Những hiện vật tàng trữ tại Viện bảo tàng lịch sử Việt Nam về văn hóa Bắc Sơn*. VBTLSVN, Hà Nội.

Phạm Văn Kinh and Quàng Văn Cậy

(1977) *Văn hóa Hoa Lộc*. VBTLSVN, Hà Nội.

Phan Cu Tiên ed.

(1991) *Gelology of Cambodia, Laos and Vietnam. 2nd edition*. Geological survey of Vietnam, Hà Nội.

Phan Đại Doãn

(1973) Bước đầu tìm hiểu di tích về cuộc khởi nghĩa của Hai Bà Trưng hiện còn ở Hà Tây và Vĩnh Phú. *NPH* năm 1972:226-243.

Phan Huy Lê

(1995) Lịch sử hình thành và phát triển của làng gốm Bát Tràng. In Phan Huy Lê, Nguyễn Quang Ngọc và Nguyễn Đình Chiến. *Gốm Bát Tràng*. NXB Thế Giới.

Phan Khánh ed.

(1981) *Sơ thảo lịch sử thủy lợi Việt Nam*. NXBKHXH, Hanoi.

Phan Văn Thích and Hà Văn Tấn

(1970) Phân tích chì trong vật đồng di thời đại đồng thau và thời đại sắt sớm. *KCH* số 7-8:126-129.

Pookajorn,S. and stuff

(1996) *Final report of excavations at Moh Khiew Cave (Krabi Province), Sakai Cave (Trang Province) and ethnoarchaeological research of hunter-gatherer group, so-call Mani, Sakai or Orang Asli at Trang Province*. Silpakorn University, Bangkok.

Quách Văn Aích

(2003) *Trống đồng cổ ở Hòa Bình*. Luận án tiến sĩ. VKCH.

Quách Văn Aích and Trịnh Sinh

(2002) Phân loại và định niên đại trống đồng ở Hòa Bình. *KCH* số 2:24-56.

Quang Văn Cậy, Lưu Trần Tiêu, Hà Văn Thăng, Nguyễn Văn Huyền, Nguyễn Thành Trai, Đặng Cao Sâm, Hoàng Hoa Toàn, Lê Mai Châu and Diệp Đình Hoa

(1974) Những trống đồng mới phát hiện: người Lô Lô với trống đồng. *KCH* số 16:115-125.

Quang Văn Cậy and Ngô Thế Phong

(1994) *Hồ sơ khai quật di chỉ Lộc Giang (ấp Lộc An, xã Lộc Giang, huyện Đức Hòa, tỉnh Long An)*. Viện Bảo Tàng Lịch Sử Việt Nam.

Quang Văn Cậy, Trình Năng Chung, Ngô Thế Phong, Bùi Văn Tiến and Hoàng Ngọc Đăng

(1981) *Thần Sa-Những di tích của con người thời đại đồ đá*. VBTLVN.

Rolett Barry V., Wei-Chun Chen and John M. Sinton

(2000) Taiwan, Neolithic seafaring and Austronesian origins. *Antiquity* 74:54-61.

Sakurai Yumio

(2002) Revolution and war: modern history of Vietnam from villagers' perspective. in Sakurai Yumio ed. Paper collection IIAS workshop Vietnamese peasant's activity, an interaction between culture and nature:88-183.

Shoocongdej, R.

(1996) *Forager mobility organization in seasonal tropical environments:a view from Lang Kamnan Cave, Western Thailand*. Ph.D. Dissertation of the University of Michigan.

Schrock J.L., Stockton Jr.W., Murphy E.M.and Fromme M

(1966) *Minority groups in the Republic of Viet nam*. Cultural information Analysis Center, The American University Wasington, D.C.

Sở Văn Hóa Thông Tin Hà Nội ed.

(1983) *Phát hiện Cổ Loa*. Sở Văn Hóa Thông Tin Hà Nội, Hà Nội.

Sorensen, P. and Hatting, T.

(1967) *Archaeological investigations in Thailand. Vol.II, Ban Kao, part 1: the archaeological materials from the burials* Munksgard, Copenhagen.

Stark M.T.

(1991) Ceramic production and community specialization: Kalinga case study. *World Archaeology* 23-1:64-78.

Ta Thi Kim Oanh, Nguyen Van Lap, Tateishi Masaki, Kobayashi Iwao, Tanabe Susumu and Saito Yoshiki

(2002) Holocene delta evoluitiof and sediment discharge of the Mekong River, southern Vietnam. *Quaternary Science Review* 21:1807-1819.

Takaya Y.

(1974) A physiographic classification of Rice Land in the Mekong Delta. *South East Asian Studies* 12-2.september:135-142.

(1975) Rice cropping patterns in Southern Asian Delta. *South East Asian Studies* 13-2:256-281, Kyoto.

Tăng Bá Hoàn ed.

(2000) *Gốm Chu Đậu*. Kinh Books.

Taylor,K.W.

- (1983) *The Birth of Vietnam*. University of California Press.
- Thanh Hương and Phương Anh
- (1977) *Hà Bắc ngàn năm văn hiến. Tập 1: các di tích lịch sử, kiến trúc và nghệ thuật*. Ty văn hóa Hà Bắc:54-64.
- Tổng Trung Tín
- (1997) *Nghệ thuật điêu khắc Việt Nam-thời Lý và thời Trần (thế kỷ XI-XIV)*. NXBKHXH, Hà Nội.
- Tổng Trung Tín and Bùi Minh Trí
- (1994) *Báo cáo khai quật di tích Gò Cây Tung(xã Thới Sơn, huyện Tịnh Biên, tỉnh An Giang)lần thứ nhất*. Tư liệu viện khảo cổ học.
- (1997) *Báo cáo khai quật di tích Gò Cây Tùng (An Giang) lần thứ II (1995)*. Tư liệu viện khảo cổ học.
- Tổng Trung Tín and Lê Đình Phụng
- (1987) *Báo cáo nghiên cứu khu di tích Luy Lâu (Thuận Thành-Hà Bắc) năm 1986*. Tư liệu viện khảo cổ học.
- Tổng Trung Tín, Trần Anh Dũng, Lê Thị Liên and Bùi Xuân Quang
- (1999) Kết quả thám sát và khai quật di tích cổ đô Hoa Lư (Ninh Bình) năm 1998. *KCH* số 2:44-61.
- Trần Anh Dũng, Bùi Văn Liêm, Nguyễn Đăng Cường and Vương Thu Hồng
- (1996) Khai quật di chỉ Gò Cao Su (Long An). *NPH* năm 1995:70-93.
- Trần Anh Dũng, Bùi Văn Liêm and Nguyễn Đăng Cường
- (2001) Khai quật di chỉ Gò Cao Su (Long An) Lần thứ nhất. *KCH* số 4: 70-93.
- Trần Anh Dũng and Đặng Kim Ngọc
- (1985) Khu lò nung gốm cổ ở Đại Lai (Hà Bắc). *KCH* số 1:71-80.
- Trần Đình Luyện
- (1970) *Báo cáo khai quật di chỉ Luy Lâu năm 1970*. Tư liệu viện khảo cổ học.
- (1999) *Luy Lâu, lịch sử và văn hóa*. Sở văn hóa thông tin tỉnh Bắc Ninh.
- Trần Kim Thạch
- (1998) *Địa chất & môi trường Thành phố Hồ Chí Minh*. Nhà xuất Bản trẻ.
- Trần Phương
- (1998) Trống đồng Mỹ Khê (Hải Phòng). *NPH* năm 1997:228-229.
- Trần Quốc Vượng
- (1959) Một vấn đề địa lý học lịch sử. *NCLS* số 6:23-38.
- (1960) Địa lý lịch sử miền Hà Nội:trước thế kỷ XI. *NCLS* số 15:48-57.
- (1969) Cổ Loa:những kết quả nghiên cứu vừa qua và những triển vọng tới. *KCH* số 3-4:100-134.
- (1975) Vài nét về các di tích khảo cổ Việt Nam thế kỷ I-X. in Trần Quốc Vượng, Hà Văn Tấn and Diệp Đình Hoa ed. *Cơ sở khảo cổ học*. NXB Đại học và trung học chuyên nghiệp, Hà Nội:223-251.
- (1978) Vài nét về các di tích khảo cổ Việt Nam thế kỷ I-X. in Trần Quốc Vượng, Hà Văn Tấn và Diệp Đình Hoa *Cơ sở*



*khảo cổ học*. Nhà xuất bản đại học và trung học chuyên nghiệp:330-372.

(1983) Nhân những phát hiện mới về khảo cổ ở Cổ Loa: Suy nghĩ thêm về thành Cổ Loa nước Âu Lạc- An Dương Vương. In *Sở văn hoá thông tin Hà Nội ed. Phát hiện Cổ Loa 1982*. Sở văn hoá thông tin Hà Nội.

(1999) Vì thế Luy Lâu. Bài phát biểu hội thảo khoa học "Văn hóa Luy Lâu và Kinh Dương Vương" Sở văn hóa thông tin tỉnh Bắc Ninh.

(2001) Vì thế Luy Lâu. Bài phát biểu hội thảo khoa học. *NCLS Số 315*:3-7.

Trần Quốc Vượng and Hà Văn Tấn

(1960) *Lịch sử chế độ phong kiến Việt Nam tập I*. NXB Giáo Dục, Hà Nội.

Trần Quốc Vượng and Hoàng Văn Khoán

(1984) Cổ Loa-mùa điền dã 1983. *NPH năm 1983*:96-98.

(1986) Đầu ngôi Trà Kiệu (Quảng Nam Đà Nẵng). *NPH năm 1985*:235-237.

Trần Quốc Vượng, Lâm Mỹ Dung, Phạm Đức Mạnh, Nguyễn Giang Hải, Lưu Văn Du and Nguyễn Đăng Hiệp Phô

(1997) Trở lại Cái Vạn (Long Thành, Đồng Nai). *NPH năm 1996*:228-230.

Trần Quốc Vượng and Phan Tiến Ba

(1973) Đào khảo cổ những ngôi mộ cổ ở Triều Khúc. *NPH năm 1972*:120-132.

Trần Quốc Vượng and tập thể sinh viên chuyên ban khảo cổ

(1978) Cổ Loa mùa điền dã 77. *NPH năm 1977*:124-126.

Trần Quốc Vượng, Trần Đình Luyện và Nguyễn Ngọc Bích

(1981) *Một Hà Bắc cổ trong lòng đất*. Ty văn hóa và thông tin Hà Bắc.

Trịnh Hoàng Hiệp

(2004) *Di tích Mán Bạc và mối quan hệ của nó với các di tích tiền Đông Sơn ở đồng bằng sông Hồng*. Luận án thạc sĩ khoa học lịch sử. Đại học quốc gia Hà Nội.

Trịnh Hoàng Hiệp and Phạm Thị Ninh

(2005) Đồ gốm di chỉ Đầu Rằm trong hệ thống gốm cổ vùng ven biển Đông Bắc Việt Nam. *Một thế kỷ khảo cổ học Việt Nam vol.I*. NXBKHXH, Hanoi:492-513.

Trịnh Sinh

(2001) Excavating Phu My site in 1998. *JSEAA No.21*: 29-36.

(2005) Suối Linh qua mùa khai quật thứ hai. *KCH số 2*:30-57.

Trịnh Sinh and Nguyễn Anh Tuấn

(2001) Những chiếc trống đồng ở Phú Thọ. *KCH số 2*:38-71.

Trịnh Sinh, Trịnh Hoàng Hiệp, Nguyễn Sơn Ka, Nguyễn Xuân Càn and Nguyễn Huy Hạnh

(2004) Khai quật di chỉ khảo cổ học Đông Lâm (Bắc Giang). *NPH năm 2002*:196-197.

Trương Hoàng Châu

(1969) Gốm Cổ Loa. *KCH* số 3-4:135-137.

VECCO(Vietnam Engineering and construction company)

(1973) *Land and water resource maps*. Saigon.

Vincent B.A.

(1984) Petrographic analysis of prehistoric pottery from Ban Na Di and related sites. in Higham, C.F.W. and Kingam, A.

(1984) *Prehistoric investigations in Northeast Thailand B.A.R.* 231, Vol.3:644-697.

(2004) *The excavation of Khok Phanom Di: a prehistoric site in Central Thailand Vol. VI: the pottery, other ceramic materials and their cultural role, the material culture, (Part II)*. The society of Antiquities of London, London.

Vũ Công Quý

(1991) *Văn hoá Sa Huỳnh*. NXB Văn hóa.

Vũ Quốc Hiền

(1991a) Di chỉ Bến Đò (Thành phố Hồ Chí Minh). *VBTL SVN TBKH năm 1991* : 37-60.

(1991b) Di chỉ Cái Vạn (Đồng Nai). *VBTL SVN TBKH 1991* :61-79.

(1991c) Di chỉ Suối Chồn (Đồng Nai). *VBTL SVN TBKH 1991* : 126-138.

Vũ Quốc Hiền, Đặng Văn Thắng, Trịnh Căn and Lê Công Tâm

(1994) Di chỉ Giồng Am (Thành phố Hồ Chí Minh). *VBTL SVN TBKH 1993* :59-74.

Vũ Quốc Hiền and Hồ Khắc Bửu

(1999) Những nghiên cứu bước đầu trên cơ sở khai quật di chỉ khảo cổ học Bưng Thơm (Bà Rịa-Vũng Tàu). *VBTL SVN TBKH 1999*: 37-48.

Vũ Thế Long

(1980) Di tích động vật ở Cồn Cỏ Ngựa (Thanh Hóa). *NPH năm 1980*:60-61.

Vũ Thế Long

(1984) Sơ bộ nghiên cứu những xương răng động vật và di cốt người trong đợt khai quật Đồng Đậu 1984. *NPH năm 1984*:85-89.

Vũ Thế Long and Nguyễn Gia Đối

(1987) Xương động vật ở di chỉ Cái Bèo. *NPH năm 1987*:49-51.

Vũ Thế Long and Hà Văn Cẩn

(1997) Di tích động vật ở Xóm Hồng (Hải Hưng). *NPH năm 1996*:69-70.

Vũ Thế Long, Lâm Mỹ Dung and Đặng Quốc Phồn

(1995) Di tích động vật trong di chỉ Phụng Hoàng (Sài Sơn, Quốc Oai, Hà Tây). *NPH năm 1994*:29-31.

Vũ Thế Long and Nguyễn Cường

(1997) Di tích động vật ở Mai Pha (Lạng Sơn). *NPH năm 1996*:59-62.

Vũ Thế Long and Nguyễn Mạnh Thắng

(2005) Xương răng động vật trong di chỉ Thạch Lạc (Hà Tĩnh, 2002). *NPH năm 2004*: 29-31.

Vương Thu Hồng

(1992) Những niên đại C14 của các di chỉ Rạch Rừng, Gò Sao và Gò Chàm ở Long An. *NPH năm 1991*: 165-166.

(1996) Về hai niên đại C14 của di chỉ Gò Cao Su (Đức Hòa Thượng, Đức Hòa, Long An). *NPH năm 1995*: 222-223.

Vương Thu Hồng, Đào Linh Côn, Bùi Phát Diệm, Nguyễn Tấn Quốc, Văn Ngọc Bích

(1996) *Đánh giá hiện trạng và hệ thống hoá các di tích khảo cổ học trên địa bàn tỉnh Long An*. Bảo tàng tỉnh Long An.

Wang Gungwu

(1958) The Nanhai trade: a study of the early history of Chinese trade in the South China Sea. *Journal of the Malayan Branch of the Royal Asiatic Society* 31-2:1-135.

Watson, W. and Loofs-Wissowa, H.H.E.

(1967) The Thai-British archaeological expedition: a preliminary report on the work of the first season, 1965-66. *Journal of Siam Society* 55-2:237-262.

Yamagata Mariko, Phạm Đức Mạnh and Bùi Chí Hoàng

(2001) Western Han bronze mirrors recently discovered in central and southern Viet Nam. *BIPPA* 21: 99-113.

Yi Seonbok

(2004) Báo cáo về các dự án Hòa Bình 2003-niên đại ams từ các di chỉ khảo cổ học ở Việt Nam. *NPH năm 2003*:22-29.

Zuraina majid

(1982) *The west mouth, Niah, in the prehistory of Southeast Asia. The sarawak Museum Journal, special monograph No.3, Kuching.*